魔法使いと風精霊

田中２３号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法使いと風精霊

【Ｎコード】
Ｎ５８８４Ｚ

【作者名】
田中２３号

【あらすじ】
趣味は剣と弓と錬金、特技は魔力節約、最終学歴は王都魔法学院卒業。現在無職。そんな魔法使いと、インチキ魔法で契約した高位精霊の物語。
魔法使いと精霊がイチャイチャしたりしなかったりします。

第一章プロローグ

木々に囲まれた静かな街道を男が一人、のんびりと歩いている。

しかし、その静寂を破る言葉が響く。

「おい、お前！荷物と腰の剣をおいていきな！」

木々の陰から出てきた賊が三人道を塞ぐ。

その賊はこれでもかというほど、山賊のオーソドックスな格好をしている。

伸び放題の髭面に、ところどころなんの染みかも分からないものが付着した汚い服を着て、曲刀をもっている。

しかし、道を行く男は止まらずに進む。

「と、止まらないと切るぞ！」

賊は動揺しつつも曲刀を抜き、歩く男を威嚇する。

しかし男は止まらない。

「「「うおおおお！」」」

そして、とうとう賊は一斉に男に襲い掛かる。

それに対して男は腰の剣を抜かずに、手を賊に突き出して短く言葉

をつむぐ。

「風よ、突き進め」

瞬間突風が吹き荒れ、賊はまとめて吹き飛ばされ、木々に打ちつけられ、昏倒する。

そして男は、何事も無かったかのように、また歩き出した。

・・・・・

「俺、かっこよくね？」

第一話「魔法使いと精霊の関係」

先ほど賊を倒した男、名をクリスと言う。

今クリスは、生まれ故郷へ続く道を歩いてる。

「かっこよさで言えば、２９点ですね。ぎりぎり赤点。主の学院でのテストの平均点よりはましですね」

森の中に突如、女性の声が響く。

「な、なんだと・・・。俺のかっこよさも精霊にはつたわらんか・・・、嘆かわしいなぁ。あとテストの点は言わないで・・・」

クリスはすっと現れた女性に目を向け、わざとらしく頭を抱える。

「精霊に伝わらないというか、人間にも伝わってなかったじゃないですか、可哀想な主、学院の創立記念パーティーも一人で・・・。あとテストが近づくと意味もなく掃除しだしたり、趣味の錬金したりしてるから赤点なんですよ」

しかし女性は意に介さず、クリスの過去を暴いていく。

「あああああ！やめて、俺の心の柔らかいところを言葉のナイフで抉らないで！！あとテスト前にいつも二番目の趣味に走ってしまうのは病気なんだよ！なぜか一番目は気が引けてやれないんだ」

地面に手をつき、うなだれるクリス。

「まったく。そもそも主は格好つけずに、口を閉じていれば外見も悪くないのに。勉強もやればできるんですから。まぁ、卒業できたのでよしとしましょう」

「フウリは俺の母親か！」

クリスと話しているのは、彼と契約した風の精霊、フウリだ。

「ほぼ無償で面倒を見ているという点では、母親と言ってもいいかもしれませんね」

「あはい。本当にすみません。未熟者で。けど、普通フウリ級の精霊と直で契約結ぶのは人間的にきついんですよねー」

「主は魔力節約の鬼ですが、魔力自体は一般人に毛が生えたくらいですからね。まぁ、あなたの魔法は面白いので、契約に不満はありませんがね。本当に良く考え付きましたね、契約に節約魔法を組み込んで、精霊の魔力消費を抑えるなんて」

普通、精霊は魔力のある所にいて、上位の精霊ほど魔力の多い所にいる。

契約するためには、場所から精霊が受けている魔力以上の魔力を契約者が提供しないといけない。

精霊が合意すれば、魔力が少なくても契約できるが、その分精霊の格はおちる。

クリスは得意の節約魔法を契約魔法に組み込んでフウリに使い、人間では契約するのが難しい高位精霊のフウリと半ば詐欺のような方

法で契約している。

「いや、本当にできると思わなかった。内容を理解して契約してくれる精霊となると高位精霊だからな、下手したら不興かって死んでたな！」

「私は大らかな精霊ですからね。有難く思ってくれていいですよ。そして余剰魔力を私に渡していいですよ？」

そう言って、浮いたまま、歩くクリスの前に回るフウリ。

「ば、馬鹿言うな。余剰なんてあるわけないだろおおお！いくら節約してるからって、あんた自分の格を考えろよ！！ほとんど限界値の魔力を提供してるんですだよ！？俺に干乾びろって言うのか！」

「うふふ、そんなこと言って。私知ってるんですよ」

「何をしってるんだ、性悪精霊！」

思わせぶりなフウリに、戦々恐々とするクリス。道の上で見つめ合いが続く。

「まぁ、性悪だなんて。ただ、前に拾った魔力を吸い取る指輪に、卒業試験前に錬金を繰り返して、吸った魔力を蓄積できるようにしたでしょう？今主がつけてる指輪、おいしそうですね？」

怪しく笑って、フウリはクリスの指輪に注目する。

精霊が人間と契約するメリットとして、人間の魔力は世界に漂っている魔力より、人間の感覚で言えば、美味しいのである。

「勘弁してください。ほんと。自分の使える魔力ほとんどないんです。塵もかき集めないと、錬金も満足にできない可哀想な魔法使いになってしまいます。どうかこの指輪だけは・・・！」

指輪を手で押さえて、胸の前にもっていき祈るようにお願いするクリス。

「あらあら、仕方ない主ですねー」

「ありがとうございやす、ありがとうございやす！この恩は魔力量向上魔法ができたらお返しいたしますので」

クリスはゴマをするように両手をもみ合わせる。

「そもそもこの面白い契約は、その魔法を完成させるために精霊の魔力取り込みの仕組みを研究するためでしたね」

精霊は無意識に世界から魔力を吸収して段々と格を上げ、取り込める魔力も増えていく。

人間は魔力を少しずつ取り込み、上限まで溜め込んだら、なんらかの形で放出するまでは魔力を取り込まない。

クリスは、体に取り込む上限を精霊のように増やしていけないかと思ったのである。

「けど、なかなか研究も進まないまま卒業しちゃったからなぁ」

クリスは空を見上げぼやく。

「向こうでは、引く手数多でしたし、宮廷魔法院にも内々に推薦をもらっていましたのにね」

「勘弁してくれ。あんなギスギスした職場。推薦貰った日にそれまで話したことない貴族がどの派閥に入れとか、半ば脅し気味に言ってくるんだぜ。ハニートラップまであるし、女性不信ですよ俺は」

フウリもそのことは知っていたので、むしろ魔法院に主が行かなくてよかったと思っている。

「なら、あのままギルドで遺跡に潜っててもよかったじゃないですか。あと主は女性不信になっても意味がないでしょう、周りに元々いないんですから」

「あれはあくまでお小遣い稼ぎなの、なんでもかんでも師匠に面倒みてもらうわけにもいかないでしょ。あと推薦蹴ったら、女性どころか野郎もいなくなりました」

「一生の仕事にするには、リスキーですからね、あの仕事も。まぁ、他にもいろいろあったと思いますが、推薦蹴ったらそっちもなくなりましたよね」

「上に睨まれるとやばいってのは知ってたつもりだけど、平民にできる想像のさらに上のやばさだったんだよ！」

不毛な言い合いを続ける主従。

国の魔法関係の最高権力は、もちろん宮廷魔法院である。

「お陰で魔法学院卒業で無職ですからね、主」

「先生たちの哀れみの目線が今でもトラウマです」

「私もひそかに哀れんでました」

「泣くぞ！！」

フウリの言葉に本当に涙目になり、クリスは顔を拭う。

「はいはい、落ち着いてください、主。お師匠さまのところのは何で蹴ったんですか。いいと思うんですけどね、学院教師も」

「それこそ、師匠に迷惑かかるっしょ。宮廷魔法院に睨まれてる小僧なんぞが入ったら」

「迷惑かけるのはいまさらじゃないですかー。気に入らない貴族のお坊ちゃんをハメたときも、お小遣い稼ぎがばれたときも、お城に忍び込んだときも、推薦蹴ったときも、他にもいろいろ全部、後始末してくれたのはお師匠さまじゃないですか」

クリスの師匠は、魔法の名門貴族の家柄なのでいろいろなところに顔が利く。

「今思うと、学院で無茶苦茶してたから、学院でほとんど人がよってこなかったんじゃ」

「それはそうでしょう。挙句に私のような高位精霊連れてますからね、怖がられますよ。テストの点があれでも」

「お、俺の青春が・・・。もう少しおとなしくしていればよかったのかぁぁぁ！！」

真実に気づき、愕然とし叫ぶクリス。

「主がおとなしくとか、無理がありますよ。まぁ、けど、男友達なら結構いたじゃないですか」

フォローしているのかどうか分からない言葉を主にかけるフウリ。

「あいつらほとんど彼女やら許婚やらいたからなぁ。友情より女を選びやがって・・・」

「それでパーティーではほとんど一人ぼっちでしたよね。だからってパーティー会場を事前に爆破しようとするのはどうかと思いますけど」

爆破は、土壇場で裏切り者が出て、未遂に終わった。

しかし、この計画への男性参加者が多く、学院ではそういった生徒への配慮も考えるようになったとか。

「嫉妬の炎が俺を狂わせるんだ・・・。あれは予想以上に人も集まって引けなくなったのもあるけどな」

手を頭の後ろに組みながら歩くクリスがそう言う。

「嫉妬するくらいなら、彼女を作ればよかったじゃないですか」

「簡単に作れるならそうしてるよ！！」

クリスは腕を振り上げ、フウリの言葉に全力で抗議する。

「主に気のある人もいたじゃないですか、あのショートヘアの金髪碧眼で、炎魔法が得意で、精霊とも契約してた・・・ような？」

「あいつの精霊はお前に怯えて、俺の前じゃほとんど出てこなかったからな」

フウリは上位精霊の中でも最上位に位置されるほど高位な風精霊のため、中位、下位精霊は一緒の空間にいるだけでもその影響をもろに受けてしまう。

「あと、あいつは男だ！！」

「え？」

「え？」

何か認識の齟齬を感じる二人。

「まぁ、主がそう言うならいいです」

「なんだその引っかかるいい方！」

「気にしないで下さい、ところで主の生まれ故郷はまだですか？」

「なんと強引な話題変換。あと少し、この森越えればすぐ着くからおとなしくしてるんだぞ」

「なら飛んで行きましょうよ、主！」

「うーん、そうするか。そんな距離ないしな、森を突っ切ろう」

風精霊が契約者を飛ばしても、魔力はほとんどかからないので節約の鬼であるクリスもフウリの提案に乗る。

クリスがどんどん浮き上がり。

そして、村まであと少し。

第二話「魔法使いの過去と白い風」

「よっと」

村の少し前で、ふわりと地面に降り立つクリス。

「浮いて村まで行けばよかったじゃないですか」

「おばか！そんなこと田舎の村でやったら、俺が村で浮いてしまうだろう！」

「何をいまさら。主は浮くの得意じゃないですか」

「学院でも好きで浮いてたんじゃないだよ！？」

「学院でも・・・？ああ、村でも浮いていたんですか」

「抉らないでください・・・」

「そういえば、主の昔話を聞いた事がないですね」

「え、なに？聞きたい？」

「期待をこめた目で見ないでください。想像つくのでいいです」

「ひどくね？仮にも主だよ俺？」

「主は勘違いしていますね。そもそも人と精霊の契約は対等です、そして主のした契約ですと、私の方が若干上になります。主を主と

呼ぶのはただの趣味です、別に他の呼び方もできるんですよ、無職主。分かりましたか？」

クリスは契約魔法を弄る代わりに、クリスの魔力をフウリが好きに使っていいという条件をつけている。

ちなみに、フウリとの契約の維持でほとんどクリスの魔力はないのだが・・・

「え、あ、はい、すみませんフウリ様。お願いですから無職呼ばわりはやめてください、お願いしますお願いします」

「仕方ない主ですね」

「ありがとうございます。これからも誠心誠意フウリ様に尽くさせていただきますとも！」

「その意気ですよ主」

フウリが胸を反らして尊大に告げる。

ちなみに、フウリは今人型である。

精霊は、格が上がってくると段々人型をとれるようになる。

上位になれば服なども魔力で形成できるが、実際服を着ている精霊は少数派である。

「まぁ、主の過去は特技から推察できます。弓が得意なのは、森で狩猟をしていたからでしょう？」

「うん、畑耕すより向いてたみたいだから、狩のときはいつもついていってた」

「で、剣が上手いのは騎士に憧れたからでしょう?王都でもすれ違うと目を輝かせて見てましたからね」

「あはい、ちゃんばらごっこで磨きました」

「ちゃんばらごっこであそこまでの腕になるのですか、さすが主。変なところで突きぬけてますね」

「あれ、褒められた・・・?」

「褒めてますよ、えらいえらい。それで、どうせ騎士になるんだとか言っていつも木の棒でも振り回して大きくなって、本当に王都まで行っちゃったんですね。可哀想に・・・。それは村でも浮きますよ」

現実を見ないといけませんよ、とフウリが続ける。

「あ、当たってる・・・剣買う余裕なんてなかったんだよ!木の棒で悪いか!」

「悪くは無いですけど、本当に木の棒で王都に行ったんですか・・・。ここ数日通った道、結構魔物いましたよね?」

「え、うん。木の棒で頑張った。で、王都目前で力尽きたところを、遺跡の研究に出てた師匠に拾われた」

「本当に馬鹿で可愛いですね主」

「やめて、生暖かい眼差しを送らないで・・・！」

「おっと、そろそろ村に着きますね。私はさっきから何か良からぬ気配がするので、ちょっと周辺の格の高い精霊に挨拶してきます」

「お、おい、なんだ良からぬ気配って。やばいのは嫌だからな！」

「主のやばいの基準が分かりません。遺跡であった亡霊騎士はやばいに入りますか？」

「おいおい、あれはやばいってレベルじゃないだろ・・・。フウリと俺の剣技とこの剣があって五分五分だったやないかい！・・・え、あれレベルの良からぬ気配なの？」

以前クリスが、師匠の手伝いで手付かずの遺跡に入ったときに、最下層で王の墓の守人の成れの果てである亡霊に襲われ、遺跡が崩壊寸前になるまで戦って、やっと倒したという事があった。

ちなみにクリスの剣は、王都の古びた武器屋に行ったとき、小汚い樽に十把一絡げで売っていたものだが、魔力の流れがおかしいことに気づいたクリスがとりあえず購入した。

そして遺跡マニアで古代魔法の数少ない使い手である師匠に見せたところ、古代の魔法文字が特殊な方法で刻まれており、解読できない部分も多かったが、できた部分をあわせると、

世界の魔力を吸引して吸引した分だけ切れ味がよくなり、斬撃を飛ばすことができるようになる、ということが発覚したのだ。

ボロボロだったその剣をクリスが得意の錬金で見栄えと、剣そのも

のの切れ味をよくしたものである。
所持者の魔力を吸ってなんらかの効果を得る魔剣というのは存在するが、世界の魔力を吸って効果を得る魔剣というのは大変珍しいものである。

あと、魔法使いが武器屋に行くことなど滅多に無いのだが、クリスが自由にすることができるお金を得て初めていったのが武器屋だ。
木の棒を振り回すのは恥ずかしいということに、王都に来て少ししてやっと自覚したそうだ。

「そうですね、あれ並なら主の腕も上がってるし、剣の魔力も満ちてるのでそこまで苦戦しないと思うのですが」

「超不安です。師匠に連絡いれたほうがいいかな」

「王都出て一週間で、ですか？」

「は、恥ずかしい。師匠泣いて見送ってくれたのに。ちょっと俺には無理だわ」

「まぁ、様子見だけでもしてきます。処理できそうなら処理しますし」

「うーい。お願いします」

「はい、お願いされました。それでは、危なくなるかもしれないので、少し頂きますね？」

「頂くって何・・・を！？」

クリスの唇にフウリのそれが重なる。

「ん・・・。ごちそうさまでした」

「おいまてそこの色情精霊」

「勘違いしないでください主。別に主に好意を持っての行動ではないですよ?ただ、魔力を頂いただけです」

「そんなことは分かってるわ!だけど別にその方法じゃなくてもいいだろ!?」

「はて?その方法とは?」

「い、いや、だから、き、き、キスじゃなくてもだな!」

「うふふ、純情ですね可愛い主。けど、これが効率いいんですよ、私にとっては」

「う、うそくさい。しかも指輪から魔力無くなってるんだけど、ねえ、なんでなんだよフウリィィイ!指輪から取るなら俺に接触しなくてもいいだろうが!!」

「それでは見てきますので、おとなしくしてるんですよ主。あんまり騒いでると、ほら村の人も変な目で見てますよ」

「スルーするな!!お前のせいだ!!早く行って来い!!怪我すん

なよ！！」

「はい、それではまた後ほど」

そう言うと、フウリの体がふわりと浮いて段々遠ざかっていった。

「ふぅ、白・・・か・・・」

第三話「魔法使いは初代騎士団長」

けしからんフウリを見送ったクリスは、村の前まで足を運ぶ。

「お、おい、お前！さっきから一人で大声だしたりしやがって！怪しい奴は村には入れないぞ！」

ちょうど村の前で遊んでいた少年たちが声を上げる。

精霊は基本、ある程度魔力を扱える者にしか見えない。

よって、フウリと話しているクリスは独り言を言ってるように見えるため、　学院外でもあまり人がよりつかなかった。

フウリなら、人に姿を見せることも簡単なのだが、フウリはあまり王都で人前にでようとする事は無かった。

「怪しいだと！こんなシティボーイの俺を捕まえて怪しいだと！この田舎者が！お前じゃ話にならん！村長を呼べい！」

クリスはまるでギルドのカウンターにたまにいる、たちの悪い客のような言葉と仕草で子供たちに向かう。

「ふ、ふざけやがって！この！！」

「おれたちにかなうと思うなよ！」

「ぼっこぼこにしてやんよ！」

「僕たちはトリエ村騎士団だぞ！」

「けどあの剣本物じゃない？やばくない？」

「ばっか、どうせ偽物だって」

「金持ちそうな顔じゃないだろ」

少年たちは口々に言い、木の棒を振り上げて威嚇する。

子供たちの中では、クリスが怪しい奴から、大悪党にまでランクアップしている。

「木の棒・・・それにトリエ村騎士団だと・・・。くそ！なんてことだ。俺の負けだ・・・。好きにしろ・・・」

少年たちが振り上げる木の棒を見て、がくりと膝をつくクリス。

ちなみに、トリエ村初代騎士団長はいま膝をついている。

「分かればいいんだ！」

現騎士団長が、膝をつくクリスを上から見てふんぞり返る。

「けどこいつどうする？」

「自警団の兄ちゃんたちのところに連れてく？」

「それがいいな、これでこの前、商人さんを間違えてつかまえちゃ

ったのはちゃらだな！」

「兄ちゃんたち、村長の家に集まってたよな」

団長の後ろで、この大悪党をどうするか、処遇を決定する会議が行われる。

「よし！ついて来い！村長の家にいくぞ！」

後ろの会議で決定したことを耳に入れ、団長が号令をかける。

そうして結局、クリスは故郷の村へと、子供たちに引っ立てられて足を踏み入れる。

「よし、お前はここで待ってろよ！今兄ちゃんたち呼んでくるから」

そう言い残して子供たちは村長の家に入っていく。

クリスは一人になってしまい、後ろから村長の家に入ってしまおうか迷っている。

「お前ら、何しに来た！今日は大事な話してるから、村の外で遊んでろって言っただろ！」

すると怒鳴り声がしてきたので、反射的に目を瞑って衝撃に耐えるように首をすぼめるクリス。

よくこの怒鳴り声と共に殴られていたクリスは、「お前」の「お」

の時点でこの防御体制を取る。

しかしいつもは瞬間に来る衝撃がこないので、クリスはゆっくり目を開けて防御体制を解く。

そして自分が怒られているわけではないことに気づき、周りを確認し誰も見て無いことにほっとする。

クリスが奇行に走っている中、子供たちは必死に弁解していた。

「ちがうんだよ兄ちゃん」

「悪党を村の前で見つけたんだ！」

「それでみんなで捕まえて連れてきたんだよ！」

「凄いだろ！」

と、自慢げな子供もいる中、一発の雷が落ちる。

「お前たちは！！また、そんな勝手なことして！！何度言えば分かるんだ！！本当に危ない奴だったら、最悪殺されてしまうかもしれないんだぞ！！」

子供たちの弁解は怒鳴り声にかき消される。

旅の商人を捕まえたときにも、同じことを言われて、こっぴどく怒られているトリエ村騎士団員は顔を青くしたり、泣いてる子もいる。

「それで、そいつは何をしてたんだ？」

子供たちの泣き顔に、少し声色が優しくなった村の男が聞く。
子供たちはそれを聞いて顔を見合わせる。
「えっと、空に向かって独り言を叫んでたんだ！」
涙目になりながら、団長がみんなを代表して発言する。
「そ、それだけか！？」
「う、うん・・・」
子供たちも、今更になって捕まえた人物が特に何も悪行を働いていないことに気づく。
男は一瞬固まる。
村の客人かもしれないのに、無礼を働いたとあっては何かあれば困った事になる、ざわつく大人たち。商人のときは穏便に済んだが、もし変な噂が立って商人が来なくなったりすれば、村にとっては一大事なのだ。
「とにかく、その人のところにすぐ案内しろ！」
すぐに立ち直った男は口を開き、子供たちに命令する。
「う、うん。村長の家の前にいるよ」
「わしも行こう」

それまで成り行きを見守っていた村長は、立ち上がって家を出る。
自然、集まっていた大人が全員ついて行く事になる。

家の前に出た村長は、見覚えのあるような男が立っているのを見つけて、しかし慌てていた村長はすぐに謝罪に入る。

「おお！あなたが、うちの子供たちがいたずらしてしまった人かな？」

「あーそうですね、たぶん。きっと」

「ふむ。まことに申し訳ない。この通りじゃ！」

「本当にすまない！」

そう口々に言って皆が頭を下げる。

「あの、そのですね、気にして無いというか、遠く巡って俺のせいというか・・・」

止められるのも無視して村を出た身であり、その後連絡もしなかった身であり、初代トリエ村騎士団長という身でもあるので、クリスのほうも気が気じゃない。

「おお！そう言ってくれますか！」

村長がぱっと顔を上げて喜び、頭を下げてた村の大人も顔を上げる。

「・・・あれ？」

「お？」

「んー？」

「おい」

落ち着いて見ると、村の闖入者がどう見ても見知った顔であることに皆が気づいてくる。

「お前、クリスじゃねぇか！」

「おい、クリ坊か！」

「おおー、本当だ」

「人違いです」

クリスは即否定するも、皆聞く耳を持たない。

「心配させやがって！」

「生きてたのか」

「勝手に出て行きやがって！」

「マリアンさんもジョシュもずっと心配してたんだぞ！」

マリアンとはクリスの母の名前で、ジョシュは弟の名前である。

「俺も心配してたんだぜ、団長！ププッ」

「なんだ、初代じゃないか、頭下げて損したぜ」

初代団長時代の五年ほど前は、村の客人を罠に掛けたりと、もっとひどかった。

団長は年下の団員をこき使って、村の周りに罠を仕掛けまくっていた。

「お前の仕掛けた罠にはまって、一週間臭いがとれなかったんだぞおお！」

「で、騎士にはなれたのか？」

「なれてたらここにいないべ」

「結局戻ってきたのか」

「まぁ、いま大変だし、若い働き手は居て困るもんでもないしな」

「てめぇ、貸してた色本返せや！」

「お前が出ていってからリリィちゃんが元気なかったんだからなぁぁあ！」

「くそ、もげろ！」

等々、熱烈な歓迎を受けるクリス。

そこに、後ろから声が掛かる。

「クリス！！」

そこには、丁度畑から戻ってきたマリアンがいた。

マリアンが大声でクリスの名前を呼び、駆け寄ってくる。

そしてその勢いのまま、あつい抱擁・・・タックルを繰り出す！

倒れたクリスに馬乗りになって殴るマリアン。

「このっ！馬鹿息子がっっ！」

「おご、ちょ、あば、母、あが」

「おいおい、そんなにすると死んでしまうぞマリアン」

村長が見かねて止めに入る。

「チッ。命拾いしたわね！」

「それが息子に向けて言う言葉か！！」

「うるさい、馬鹿息子！五年も連絡なしで！どんだけ心配したと思ってんの！」

マリアンが涙目で怒鳴る。

「あー、いや。すんませんでした！」

クリスは勢いよく頭を下げる。

「もういいわ。殴ってすっきりしたし。ジョシュはまだ畑だから、とりあえず家で待ちましょ」

「はいさ」

「皆もお騒がせしてごめんなさいね。この馬鹿息子には、今度日を改めてちゃんと村長のところに挨拶させにいきますので」

「よいよい。積もる話もあるじゃろうて」

「さすが村長だぜ。あと村長の息子よ、色本は犠牲になったのだ」

「お、俺のお気に入りがあああああああ」

晴れ渡った故郷の空に次期村長の絶叫がこだまするのだった。

第四話「魔法使いと母と弟」

「うおおお、帰ったぞおお」

「うるさいわね、お帰りなさい」

クリスは家に入るなり騒ぎだす。

「我が家はいいね、一番だね！王都なんてほこりっぽいし、それに比べてこの村はなんて清々しいんだ」

クリスはテーブルについてくつろぎ、マリアンはお茶を入れて戻ってくる。

「あんた、王都にいたのかい」

「うん。騎士になるつもりだったからねー」

クリスはお茶を飲みつつ答える。

「うそおっしゃい。あんたが何で家を出たかなんてこっちはお見通しよ」

「う、嘘じゃねーし！騎士になるつもりだったし！」

しどろもどろに叫ぶ息子に母は呆れ顔だ。

「あの年は、ウルバが死んでから初めての不作だったかね。本当ならジョシュをどこかに奉公に出さないといけなかったのを知って、

出て行ったんでしょ」

ウルバとはクリスの父、マリアンの夫である。

「う・・・。ま、まぁ、それが関係してないといったら嘘になるけど、本当にそれだけじゃなくて、騎士になりたいってのも理由だったし。そもそも、ジョシュのほうが俺より何倍も畑仕事できるからね」

すっかり見破られていたクリスは、少し赤い顔で本音を語る。

「はぁ。あんたが納得してるならいいけどね、母としては複雑だわ。今からでもジョシュと土地半分ずつとかしない？」

「そんな慣習作ると村の人たちに睨まれるからやめとくよ。ジョシュは家の農地をちゃんと相続したんでしょ？」

「ぐずったけど、村長にも話して、ちゃんと相続させたわよ。村長もうすうすあんたが出て行った理由気づいてたみたいだけど黙っててくれてね。ジョシュは年齢的にはちょっと早かったけど、体でかいし体力あるから大丈夫だろうって、村のみんなも説得してくれたわ」

「ああ。ジョシュはでかかったからなぁ」

マリアンの話に、クリスはどこか懐かしそうに弟の姿を思いだす。

「あれからもっと大きくなったわ」

「え！？何食ったらそんなにでかくなるんだよ！」

しかし、マリアンの言葉で思いだした弟の姿が霧散する。

「あんたと同じ物食べさせてたんだけどねぇ」

しみじみとマリアンがお茶を飲みながら語る。

「身長の格差社会や！」

「主もそこまで小さくはないでしょう」

「弟より小さいだけで俺のプライドはズタボロなんだよ・・・」

クリスはどこか哀愁の漂う背中で語る。

「主のプライド・・・？ああ、あれですか、遺跡でよく捨ててますよね」

「プライドなんて遺跡じゃ邪魔なだけだよな」

無駄にプライドが高いだけで食っていけるのは貴族だけ、クリスはそう思っている。

「さすが主です。早さに自信のある私も、あんな見事な逃げっぷりは真似できません」

「毎度毎度抉り込むように言葉の暴力を振るってくるな・・・ってあれ？」

「どうしました、主？」

いつも過ぎるやり取りに、やっと何かに気づいたように横を見るクリス。

フウリが首をかしげてクリスと見つめ合う。

「何、さも当然のように会話に混じってるの」

「やっと気づきましたか、鈍いですね主。それだから、女性との出会いも見逃すんですよ」

「最近、フウリの罵倒に慣れてきた自分が怖い」

「変態主ですね、無職と並べるともう手の施し様がないですね、ご愁傷さまです」

「えーっと、馬鹿息子。そこの綺麗なお嬢さんはだれだい?!」

突然現れた美女に驚いて、固まっていたマリアンが再起動してクリスを問いただす。

「これはこれは。挨拶が遅れまして、大変失礼いたしました。私、主と契約させていただいております、フウリと申します。未熟な身ではありますが、誠心誠意クリス様に尽くしていきますので、どうかよろしくお願い致します」

綺麗なお辞儀とともにフウリは自己紹介をする。

「ちょ、馬鹿!フウリ!大事なところが抜けてるよ!?」

「何が大事なところよ！馬鹿息子！都会に行って帰ってきたと思ったら、こんな別嬪さんと契約して主なんて呼ばせるなんてどういう了見だい！もう少しお仕置きが必要なようね！表に出な！」

「勘弁してくれえええええ」

その自己紹介に足りないものを感じたクリスが叫ぶが、マリアンが腕まくりをして睨みつける。

「ふむ、大事なところですか、主・・・ああ！そうですね、誤解を招いてしまいました。失礼しました。主とは契約してますが、ほとんど対価も頂いておりませんよ」

「違うよおおお！？そうだけど、違うよおおお！！？」

思いだしたように手を打つフウリを見て、クリスは期待の眼差しを向けるも、見当がはずれて叫ぶ。

「あ、あんたって子は・・・！そんなことする子じゃないと思ってたんだけどねぇえ！？都会に行って根性が腐っちまったのかね！」

「おいいいい！信じてくれよ母さん！ってか、フウリも悪ふざけが過ぎるって！」

マリアンの雰囲気に押され、クリスは必死に状況を打開しようとする。

「ふむ、すみません、主。お母様も途中から気づいてるようでしたので、少し悪乗りしてしまいました」

「母さんもぐるかあああああ！」

結局二人にからかわれてただけだと分って叫ぶクリス。

「五年も心配かけた罰さ。それにしても、あんた中々面白い娘さんを連れてかえってきたじゃないのさ」

「主をからかうのは私の趣味ですので」

「ここに味方はいないのかあああああ！！」

悪びれもしない二人を見てやっぱり叫ぶクリス。

「そんなことより、この娘さんとはどんな関係なんだい？」

「そんなことって軽く流さないで・・・」

「私は主と契約した精霊兼嫁です。お義母さま、これからよろしくお願い致します」

「あら！まあまあまあ！こちらこそこんな馬鹿息子ですが、可愛いところもあるので、見捨てないでやってくださいね」

フウリが事実を少し捻じ曲げながら伝え、マリアンがそれを受け入れ嬉しそうに言う。

「おいいい！精霊が嫁とか聞いた事ねえよ！？そんな契約してないからね！？」

このコンビにたまらずクリスは叫ぶが、同時にこの二人には何言って無駄だと思い始めていた。

騒いでいると、玄関が開く音と共にどたどたと慌てたような足音が響く。

「母さん！兄さんが帰ってきてる本当！？」

「本当よ、ほらここに」

マリアンがクリスを指差すと、クリスの弟、ジョシュがクリスをロックオンする。

そして一息に間合いを詰めると、クリスを力一杯抱擁する。

「兄さんっっ！生きててよかったよぉぉぉ」

「ああ、心配掛けたなって痛い痛い、馬鹿、絞めすぎだあああああ」

「に〝い〝さ〝ぁ〝ん〝～」

「聞いてねぇぇ！おいまじで体格差考えろおおおお！ギブ！ギ・・・ブ・・・」

段々、動かなくなっていくクリス。

「こら。ジョシュ、クリスがぐったりしてるから離しな！」

「うあああ、ごめんよ兄さん！嬉しくてつい」

ジョシュはしゅんとうつむく。

「はぁはぁ。殺す気か！」

「ごめんよぉ」

「ああもうわかったから涙目になるな鬱陶しい」

「うん・・・」

うなだれるジョシュ。

それを見て、クリスはため息をつきつつ、丁度目の前にきたジョシュの頭を撫でる。

「すまんかったな、家のこと全部任せちまって」

「に、兄さん！そんな、僕のほうこそ！」

そう言ってジョシュは両腕を広げる。

「ああまた抱き着こうとするな」

「う、ごめんなさい」

「はいはい、もういいから、とりあえず畑仕事の泥落としてこいよ」

「うん、洗ってくる」

ジョシュは家の裏の井戸へ向かう。

「相変わらずだなぁ、あいつは」

「あんたが出て行った理由も、最近気づいたみたいでね、少し落ち込んでたのよ、あれでも」

でも少しは元気でたんじゃないかしら、とマリアンが続ける。

「主が家を出た理由ですか?騎士になるためでは?」

マリアンの言葉にフウリが食いつく。

「あら、お嫁さんにも何も話していないなんて、いけない子だわね、あんたは」

「おいちょっとまってください、嫁じゃねぇですよこいつは」

「また、そんな照れちゃって。こんな息子だけど結構家族思いなのよ、家を出た理由だって本当は」

「おおおっと、そこまでだぜお母様」

「主は黙っていつも通り壁の花になっていてください」

「ひどいわ!パーティーでもいつの間にか壁際に移動してる俺に向かって!」

「で、あの子が家を出た理由なんだけどね・・・って理由なのよ」

「まあ、主は家族思いなんですね、そういえば学院でも女の子に言い寄ってた貴族に・・・それで・・・あれで・・・」

「キャッキャッ」「ウフフ」

・・・・・・・

弟が戻るまで、部屋の隅でいじけている魔法使いの姿があったとか・・・

第五話「魔法使いとドラゴン？」

話をしていたら、いい時間になったので、マリアンが夕飯を作り、皆で食卓を囲む。

「で、兄さん、フウリさんとの関係は良く分かったんだけど、結局五年も何してたの？」

夕飯を食べながら、ジョシュがクリスに尋ねる。

ちなみに、精霊であるフウリは特に食べ物を食べる必要はないのだが、少しは食物の魔力を取り込むことができるから、という言い訳でクリスが同席を求める事が多かったため、最近では魔力以外にちゃんと味を感じることができるようになった。

クリスとしては、一人で食べるの寂しいというのが本音である。

「王都の魔法学院で学生してました。超優等生だったんだぜ」

「さすが、兄さんだね！」

ジョシュは、昔から兄の言うことを無条件で信じるのである。

「本当に、さすがですね主」

「あ、やめて。ごめん、嘘だから。実は卒業もぎりぎりでした」

「あんたは昔から、ジョシュを騙し切ったことはないわよねぇ」

ジョシュの純真無垢な瞳に弱いクリス、嘘をついても結局嘘だと言うか、その嘘を真実にしてしまう。

「くそ！そこはいつもなら、フウリが痛烈なツッコミをするところなのに、俺の弱点を的確に突いてくるなんて・・・いつも通りか」

「平常運転です」

クリスががっくりとうなだれ、フウリはすまし顔だ。

「本当に仲がいいんだね、二人は」

その様子を見て、ジョシュが嬉しそうに言う。

兄が五年も音信普通でとても心配した弟は、ちゃんと心が許せる人がいてよかったと思っている。

「夫婦ですから」

「夫婦じゃない！」

フウリの虚言にすばやく切り返すクリス。

「主従と言ったほうがよろしいですか？主」

「え、あ、うん。そう言われると、契約内容があれだし、ちょっと困っちゃうわ」

フウリの切り返しに、十分な魔力を渡していないこともあり、フウリが簡単に自分の魔力を奪えることもありで、主従とは決定的に何

か違うと思っているクリスはしどろもどろになる。

「父親に似て煮え切らない男だね、あんたも！ちゃんと責任とりな！」

「おおおい！？責任ってなんだよおおお」

マリアンは生前の夫のどっちつかずな態度を思いだし、息子と重ねる。

「主、契りまで交わしたのに、そんな・・・」

「まてやこら！契りって契約だろが！なんか変なふうに聞こえるから！ただの、魔法使いと精霊の契約だろ！」

「あはは、まあまあ。兄さんも熱くならないで。フウリさんも兄さんをあんまりいじめないでね？」

フウリがクリスをいじって、マリアンが煽って、クリスが爆発して、ジョシュが宥めるローテーションで食事の時間が過ぎていく。

「結局、あんたは冒険者しつつ学生してたのかい？」

「うん、学生が本業で、冒険者はお小遣い稼ぎだね」

「なら、兄さん魔法も使えるんだ！すごいなぁ」

「あんた、あんまり危ないことはするんじゃないよ？冒険者なんて乱暴者も多いって言うし」

ジョシュはきらきらとした目で兄を見、マリアンはあまり良い噂を聞かない冒険者に眉をしかめる。

「大丈夫です、お義母さま。主は、剣と弓の腕では冒険者ギルドでも一目置かれ、難易度高い討伐も何度かこなしていて、そっち関係ではかなり有名人です。逆に、魔法使いと言ってもだれも信じてくれませんが」

心配そうなマリアンにフウリが安心させるように、クリスのギルドでの評価を教える。

「そういえばこの子、昔から木の棒で魔物しばき倒してたからねぇ」

「兄さん強いもんねぇ」

「しみじみこっちみないでくれますか!?魔法使いなんだよ!一応!ギルドの登録も魔法使いなのに、それっぽい依頼一度も受けた事ないけど!!フウリと契約してからは、本当に全然使って無いから腕が落ちてないか超心配なんだけど!」

実際、錬金以外の魔法はフウリ任せが多く、クリスはギルドだとドラゴンキラーの称号を持っているため、凄腕剣士として扱われており、魔法は、使えるらしい?くらいにしか思われていない。

ちなみにドラゴンキラーは、ドラゴンを討伐したときに国から与えられる称号だが、国の騎士はほとんどもっている。

騎士団のドラゴン討伐ほど醜い狩は無いと言われているが・・・

何人で倒しても参加すれば貰えるため、騎士の虚栄心を満たすものというのが一般の認識となっている。

しかし冒険者でもっていると、その冒険者の実力を示すものとして、ぐんと価値があがる。

「そういえば、騎士団からもお誘い受けてたのに、何でそっちに行かなかったんですか？」

「うん？だってお前、魔術学院入れてもらったのに、卒業して騎士団入りましたとか滑稽だろ！師匠にも顔向けできないし！あと実際見た騎士団はちょっとなぁ」

「あのお師匠さまなら、笑って許してくれそうですけどね。逆に無職のほうが心配してると思いますよ。まぁ、主が騎士団入るって言ってたら私は実家に帰ってましたけど」

「師匠には心配掛けてばっかりだなぁ、今度遺跡潜って、また貢物でも献上するか。あとお前の実家と言えばあの空の島か、さすがにもう行きたくないぞ・・・」

クリスとフウリが話している横では、マリアンとジョシュが呆れ顔だ。

「あんた、本当に危ないことは程々にしなさいよ」

「兄さん、ダメだよ、危ないことは。兄さんが怪我したりしたら悲しむ人がいるんだからね」

「あはい、すんません、気をつけます」

兄が落ち込んだことを感じて、ジョシュが明るく言う。

「けど、兄さんの冒険の話聞きたいなー」

それに喜ぶクリス。

「そうかそうか！じゃあまずは、国境付近で暴れてたドラゴンを退治した話をしよう！あのときは本当に大変だった、敵国の軍隊まで出張ってきて」

「そして、敵国の軍隊がドラゴンを切り倒す主を見て、逃げ出して行きましたよね。おかげで今、相手の国とは停戦交渉中です」

「いや俺のせいじゃないだろ、停戦交渉は」

クリスの話を途中で受け継いだフウリが、当の本人もしらないような事実を語る。

「いえ、聞いた話だと、あのときの軍隊に敵国の王子がいたらしく、帰って早々見てきたことを報告したら、王様が泡を食って停戦を要請したらしいですよ」

「だからか、なんかあの依頼以降、国からおいしい仕事が・・・」

報酬のほとんどは、クリスの師匠への貢物や、錬金の素材で消えている。

「お師匠さまが名前は隠してくれたみたいですけどね、ギルドも主には借りがありますから、しっかり情報統制してくれたみたいです

よ」

「なるほどなー。しかし、なんで俺の知らないことをフウリが知ってるのか、とても疑問なんだけど」

「気にしないでください、趣味の範囲です」

「多趣味な精霊だなおい！」

マリアンとジョシュは呆然と二人の話を聞いている。

「兄さん・・・戦場に行ったの？」

ジョシュが心配そうに言う。

「あんた、ほんと無茶ばっかりだね・・・」

マリアンが、呆れ切った顔をする。

「俺ですが、家族の視線が痛いです」

「ドラゴンなんて序の口じゃないですか」

家族の視線に耐えかねたように呟くクリスにフウリは追い討ちをかける。

「おいやめろ、もう少し刺激の少ない話をしよう」

「じゃあ、騎士団を闇討ちした話ですか？」

「過激すぎるだろ！！」

「そもそも、刺激が少ない話が出てこないですね。人間相手な分、騎士団闇討ちが一番刺激が少ないですよ」

「おいいいい、あるだろなんか！俺も思いつかないけど！ああ！あれだ。王城忍び込んだときのやつ！あれなら特に問題ないだろ！」

「王様に一撃いれたあれですね」

「あ、ごめん、やっぱなし」

クリスは過去の悪行を思いだし、冷や汗をかきながらフウリを止める。

「あああああ、あんた！そんなことしたのかい！？」

「兄さんそれはさすがにまずいんじゃ・・・？」

「おいいいいい、違うんだ、俺はやってないいいいいいいいい」

魔法使いの絶叫が響く中、夕食の時間が過ぎていった。

第六話「魔法使いの剣の秘密」

「くそ、なんだ、この五年！本当にろくなこと無いぞ！」

夕飯を食べ終わって、クリスは五年ぶりの自分の部屋でごろごろしている。

「私との出会いをお話すればよかったのでは」

ふわふわ浮きつつ、フウリが言う。

「・・・！あれならちゃんと冒険してるし、別になんか倒した話じゃないし、とっても食卓向けの話だったんじゃね？なんで早く言わないし！」

フウリの言葉に昔を思いだしたクリスは、ベッドから起き上がり言う。

「ええ、そうですね、すみません。あの島に来るのに遺跡一個無くなってますけど、一番まともな話ですよね」

「ああ・・・嫌な・・・事故だったね・・・」

フウリの言葉に悲痛な面持ちでクリスは俯く。

「お師匠さまが涙目だったじゃないですか」

「やめて、あの顔思い出すと今でも罪悪感がひしひしと！」

「ダメな主ですね」

ベッドに顔を埋めているクリスを見ながらフウリが続ける。

「ところで、あの良からぬ気配についてですが」

「おお、そういえば何か分かったのかい！」

ベッドから勢いよく起き上がりクリスはフウリに顔を向ける。

「ええ。ちょっとやばいことになってます」

「え。なにそれこわい。亡霊はもう勘弁」

フウリの発言に、クリスは最近の一番やばかった事項を上げる。

「私は亡霊のほうがまだいいですけどね」

「お、おい、やめてくれよ。亡霊のほうがましって、もう俺個人でどうにか出来るレベルじゃなくね！？」

それ以上と言われて、クリスは慌ててフウリに食って掛かる。

「落ち着いてください、主。大丈夫です、私にとっては都合の悪い相手なだけで、主なら一刀両断です」

「一応魔法使いなんだけどね俺。まあ倒せるならなんでもいいや・・・」

「さすが主。それでそのやばい奴なんですが・・・魔力食いです」

沈黙が部屋を支配する。

「・・・。おいいいいいいいいい、まじもんでやばいやないかあああああ！」

魔力食いとは、その名の通り魔力を食べる、魔物の突然変異である。

魔力食いは、世界から一切の魔力を吸収できず、そのため、生物がもっている魔力を食べて力をつける、特に精霊が好物で、精霊食いとまで言われる。実際、精霊食いというのは別にいるのだが、人間から見た被害はどちらも天災レベルなのであまり区別されない。

どちらも、放置して精霊を食べつくされてしまうと、不毛の大地ができあがる。

「まだそこまで精霊も食べられていないそうなので、明日にでも倒しにいきましょう」

「え、倒せるのあれ。くそ珍しいし、俺見たことも無いんだけども」

「主の剣なら、切れ味抜群ですよ。切ればあいつの魔力も吸って切れ味がドン！更にドン！切り刻みましょう」

「フウリさんテンションおかしくね？そもそもうちの剣、他の生物の魔力吸えたっけ？」

「いやですね、主。私はいつも通りですよ。ただちょっと同族が食べられてイライラしてるだけです。あと、主の魔剣はそもそも主の魔力を吸うこともできますよ？ただ、主が素寒貧だから世界の魔力

を吸ってるだけです。切れば生物の魔力も吸収します。だからドラゴン切ったとき切れ味やばくなったじゃないですか。本当にあの大きさのドラゴンを一刀両断するなんて、そりゃ停戦したくもなりますよ」

「ああ、怒ってるのね。まあ、俺もむかつくし、切ろうか。ってか、この魔剣すごかったんだな・・・。てっきりちょっと珍しいだけかとおもってたわ。ごめんよ」

「明日、切り刻みましょう。というか、魔剣については、私より長い相棒なんですから、正確に把握してあげてください」

「はい、すんません。けど、刻まれた古代魔法文字は難解すぎて、師匠だって解明できないところ多いし！剣振ってるときは、切れ味増したなぁと思うことはあったけど、俺の隠された力がピンチで覚醒したんだなってくらいにしか思って無かったです、すんません」

「てっきり知ってるものかと思ってましたが。主に隠された力は一切ないので安心してください。ピンチになっても、魔剣にあげれるほど魔力もないですしね」

「ぐぬぬ。指輪の魔力もまた集めなおしだし、ってか結局魔力使ったの？」

「ああ、主に接吻して頂いた魔力ですね、ちゃんと使いましたよ、半分食われて消滅しかかってた精霊に」

「接吻って・・・。まあ使ったならいいや」

「ふふ、赤くなって可愛い主」

「おい、やめろ、くっついてくるな」

「しかたないじゃないですかー、あるじのへや、ベッドいっこしかないですしー」

「棒読みはやめろ！別に浮いたまま寝れるだろうが！そもそも睡眠いらないだろ！」

「まぁまぁ、主。私も長旅で疲れているんです。接触してれば効率的に魔力を摂取できますし、主の節約にもなるでしょ？」

一応、契約して魔力を渡している場合、契約者と非契約者が離れていると、到達するまでに微弱な魔力が世界に放出されている、と言われている。

「くっ・・・分かったよ。もう寝よう」

「はーい、主。おやすみなさい」

「おやすみ。フウリ」

・・・・・

「（ちくそう！柔らかいものが当たって寝れない！！）」

翌朝。

「結局ほとんど寝れなかった・・・」

クリスは隈ができた顔でベッドから出て顔を洗いに行く。

「主、寝不足ですか？いけませんよ、素人ではないのですから、戦いの前に夜更かしなんて」

「お前のせいなんだよ！？」

「ふむ。刺激が強すぎましたか」

「狙ってやるなよおおおお」

クリスとフウリはいい合いしつつ食卓へ。

「おはよう母さん」

「おはようございます、お義母さま」

「はい、二人ともおはよう」

クリスは、大きな弟の姿が見えないことに気づいて母に尋ねる。

「あれ、ジョシュは？」

「もう畑にいったわ」

「うお、早いな」

「あの子、お兄ちゃんがいつ帰ってきてもいいように頑張ってたのさ」

「ったく、あいつは・・・」

「ふふふ、いい弟さんですね、主」

「うっさい」

マリアンが微笑ましそうに二人を見る。

「ほら早く食べちゃいな」

「うぃーす。いただきます」

「いただきます」

「私もそろそろジョシュの所に行くから。あんたは村長に話をしてきな。あとリリィにも顔見せに行くんだよ、あの子はあんたのことすごい心配してくれてたんだから」

リリィとはクリスの幼馴染で、何かと変わっていたクリスの面倒を良く見てくれていた。

「あいあい。そのあと少し森のほうに行くからー」

「森のほうは、今危ないからやめときな。なんか見た事もない魔物が出るらしいから。そのせいで、昨日も村長の家に猟師とか自警団が集まってたんだよ」

「なるほど。まだ食われた人とかいない？」

マリアンがクリスを鋭く睨む。

「食われた人はいないけど・・・あれは人を食うのかい？というか、あんたあれの正体がわかるのかい？」

「あ、あはは。ちょっとやっかいな魔物だけど、何度か倒したことあるから、今日にでも始末してきちゃうよ。村の人が食われたら嫌だからね」

「危ないことはしないで欲しいんだけどねぇ。まぁ、あんたがそう言うなら信じるわよ。そのこと、村長には言っていきなよ」

「りょーかいしました、まっかせといてよ！」

「はいはい、それじゃ行ってくるからね。怪我するんじゃないよ」

「いってらっさいー」

「いってらっしゃいませ」

マリアンを見送ったクリスとフウリは、食事を済ませ、支度をする。

「魔剣って、切った奴の魔力も吸収できるんだよなぁ・・・。これ応用できれば、魔力の上限を増やせなくても、吸収速度をアップできそうだなぁ。うーん、取り込む術式に節約魔法を織り交ぜて、小さい作用で大きい魔力を得れるように・・・、まずは魔剣を改造して・・・」

「主、考えるのもいいですが、早くあいつを切りに行きましょう」

「あ、はいはい、大分怒ってるね」

「ええ、同族を食べられて黙ってはいられません。昨日助けた精霊も手助けしてくれるらしいです。火精霊で、魔力食いに棲家の洞窟を奪われたらしいです。私、火精霊とは相性いいので、丸焼きにして切り刻みましょう」

「怖いよ!?」

「ところで、さっきさらりと嘘ついてましたね」

「倒したことがあるくらい言わないと、心配されるだろ」

「そうですね、いい嘘だと思いますよ。馬鹿正直だった主が、ちゃんと嘘もつけるようになってうれしいです」

「へいへい。んじゃ行こうかね」

「まずは、村長さんのところでしたね」

そうして、魔法使いは家を出たのだった。

第七話「魔法使いと魔力食い」

フウリを待たせて、村長の家の玄関をまたぐ。

「ちわー」

「挨拶くらいちゃんとせんか！」

クリスの挨拶に怒鳴る村長。

いつも集会をしている部屋にクリスが行くと、昨日とほぼ同じ面子が集まっていた。

「すんません。それで、村長。昨日は言いそびれましたが、少しの間村に滞在したいのですが、よろしいですか？」

クリスは居住まいを正し、村長をまっすぐ見る。

「う、うむ。それは問題ないが。敬語を使われるのも、ちとむず痒いのぉ。というか、滞在なのか？住まないのか？」

「ええ。王都の学校を卒業したので、家族の様子を見に帰ってきた次第です。少ししたら王都に戻ろうと思います」

途端、集まった面々にざわめきが広がる。

「王都の学校だと！」

「嘘だろ・・・」

「木の棒しか持たないで出て行ったって話なのに」

「王都の学校で雑用してただけなんじゃ」

「俺の色本・・・」

昔からクリスを知っている、そして叱ってきた面々は、その事実を受け入れられないようで皆一様に信じられないという顔をしている。

村長がそんな面々を見て一喝する。

「静まらんか！」

すぐに皆が黙り込み、しかしやはりどこか信じられないという顔をしながら、次の言葉を待つように村長に視線を向ける。

「して、王都では何を学んだのだ？」

「魔法について少し」

村長が回りを気にしつつ厳かに聞くと、クリスもその雰囲気に呑まれて緊張気味に答える。

「む、そうなのか、てっきり剣術だと思ってたのだがな、あと喋り方はいつも通りでいいぞ」

まさか、建前だと思うが騎士になると言って出て行った子供が、魔法使いになって帰ってくるとは思わなかった村長は、その突拍子もない子供がいまだに敬語を保っていることに違和感を覚えてそう言

う。

「ひゃっほい！敬語とかあんまり使わないから疲れるんだよね！」

クリスは村長の言葉を聞いて、すぐにはっちゃける。

「はぁ、お前という奴は・・・。まぁいい。お前が望むなら村の空家を貸してもいいから、村に残る気はないか？」

村に魔法使いがいれば、実力なんて無くても、何かと役に立つし、字の読み書きが出来るというだけで貴重なのだ。

「うーん、まだやり残した研究もあるし一度王都に戻るよ。師匠にも恩返ししたいしねー。けど暫くはいるつもりだし、戻った後もちょくちょく帰ってくるよ」

「そうか、残念だが、仕方ないか」

「すんません」

村長の本当に残念そうな顔に、五年も心配をかけたということも自覚しているクリスは罪悪感を覚えて心から謝罪する。

「よいよい。ところで他の者には挨拶してきたのかの？リリィは特に心配しておったんだぞ？」

村長は謝るクリスの真剣さを感じ取り、あまり思いつめないようにと殊更明るく話題を変える。

「このあと行って来るよ」

「ふむ、この時間なら、皆畑だな。ちゃんと顔を見せに行くんだぞ」

「はーい。あ、それと村長、森になんかいるじゃん？あれの件なんだけど・・・」

クリスが本題に入ろうとしたところで、部屋のドアが開く。

「村長！大変です！」

件のリリィの妹、ユリィが息せき切って入ってくる。

その姿を見た集まっていた面々が、何事かとユリィを囲み事情を聞く。

「どうした、ユリィ！？」

「ね、姉さんが、森に入った子供たちを追って森に！」

集まっていた村人がユリィの言葉を聞き、今の森の現状を思い浮かべ騒ぎ出す。

「子供っていうとあの悪ガキどもか！」

子供たちとは、騎士団の面々である。

「な！森は今やべぇんだぞ！」

「化け物がうろついてんだ！」

狩に出た時に魔物の凄惨な死骸を見た者が、子供たちのことを想像して顔を青くする。

「すぐ呼び戻しにいかないと」

「けど、魔物だって何体も食い殺されてるんだぞ、俺たちで行っても・・・」

「おい！子供を見捨てるってのか！」

森で魔物を食い散らかす化け物を相手にすることに怯む村人に、別の村人が食って掛かる。

男たちが取っ組み合いになって意見をぶつけ合う。

「静まれ！」

村長が立ち上がり一喝するも、いつもはすぐに静まる面々が更に言い募る。

「だけど、村長！」

「おぬしらが騒いでも仕方ないだろう！すぐに若いもん集めて森に行くぞ」

村長は子供を見殺しにするなど論外だとばかりに叫ぶと、全身の雰囲気で周りの面々に有無を言わさぬ圧力をかける。

村人たちは、すぐに村長に言われた通りに動こうとする。

「あ、村長」

そんな中、クリスが声を上げる。

「クリス、今状況を説明している暇がないんだが、森に一緒に来てくれんか？」

ここ最近の森のことを知らないであろうクリスに村長は、説明する間もおしいと早口に告げる。

「ああ、森に行くのはいいんだけど。先に行くから、村の人は森の入り口で待っててもらえないかな」

「おい、何言ってるんだ！今、森には化け物が！」

「正体も分かってるから。ちゃちゃっと倒しちゃうからさ。森の入り口で子供たちを頼むわ」

クリスは森に化け物がいると言われても、気にした様子もなく、お使いにでもいくかのように村人たちに言い放つ。

クリスにとっては、村人たちがいくら武装しても邪魔になるだけなのだ。

フウリに任せれば、探すための人数も必要ない。

「しかしな！」

言い募る村人を押し戻して村長がクリスと向かい合う。

クリスの目をじっと見つめる村長。

「分かった。子供たちとリリィを頼む」

クリスの真剣な目と先ほどの発言から、ここにいる誰よりも事態を把握してるのだろうと思った村長は即決断する。

「村長！？」

「クリスの弓の腕は、おぬしらも知ってるだろう。魔法も使えるんだ。わしらがいても邪魔なのだろう」

「村長がそう言うなら・・・」

村人たちは村長の説得にしぶしぶ引き下がる。

クリスは心の中で、無条件に信じてくれた村長に感謝をする。

「そんじゃ行って来る」

クリスはそう言うと何か呟き、瞬間村長らの目の前から掻き消えた。

フウリは、村娘が村長の家に駆け込んだとき、クリスに契約を通して話かけていた。

『主、何やら慌しくそちらに向かった娘がいましたよ』

『うん、今ちょうど来たね』

少し途切れてから、クリスが慌てた言う。

『まずい！子供が森に入ってそれを追って娘も一人入ったらしい！』

『森は魔力食いの狩場になってますから、危険ですね』

『すぐ追いつくから、先に行って子供たちを探してくれ』

『分かりました』

クリスの指示を聞いて、フウリは晴れ渡った空に急上昇すると、まるで本物の風のように森を目指し高速で移動する。

フウリは森に着くと、昨日助けた火精霊の戦っている気配がすることに気づく。

『主、昨日助けた精霊が戦っているようです。たぶん相手は魔力食いですね。人の気配もします』

森の上空で待機しながら、フウリはクリスに契約を通じて状況を報告する。

『すぐ行ってくれ、俺もフウリを目印に向かう』

『分かりました』

クリスの返答を聞くと、フウリは戦いの気配がするほうへ急ぐ。

クリスも、フウリの補助が無い中、なけなしの魔力を使い高速で移動する。

「頼むから、無事でいてくれよ!!」

魔法使いは祈り、さらに加速する。

第八話「魔法使いの幼馴染」

火精霊が魔力食いと戦っている後ろで、子供たちが泣きじゃくり、村娘がなんとか子供たちを逃そうとしている姿がフウリの目に入る。

フウリは急降下しつつ、魔力食いに風の刃を無数に叩き込む。

ふわりと、フウリが火精霊の前に降り立ったときには、魔力食いがいたところは、地面が抉れ土煙が立ち込めていた。

「間に合ったようで良かったです。そこの娘、子供たちは全員いますか？」

フウリは土煙の向こうを見つめながら、顔を向けずに村娘に話しかける。

村娘、リリィは目の前で起きた事象に一瞬呆然とするも、すぐにフウリの質問に答える。

「は、はい、皆います！」

「それでは、急いで逃げてください。私たちが足止めしますので」

全員いることに心の中で安堵したフウリは、守りながら戦うには心許ないと思い、冷静な顔で魔力食いと反対方向を指差し言う。

土煙がはれてくると、うごめく影が見える。

「分かりました！ほら、皆立って！逃げるよ！」

その影が見えたリリィは、急いで子供たちに向き返り促す。

しかし、子供たちは泣きじゃくり、なかなか移動しようとしない。

そして、フウリたちの事情などお構いなしに魔力食いが襲い掛かってくる。

魔力食いは、オークの変異のようだがほとんど原型を留めておらず、体中から黒い霧のようなものを撒き散らし、腕を振り上げて攻撃してくる。

「く、存外早い攻撃ですね・・・！」

避けると、後ろにいる子供たちに当たってしまうため、避けるわけにも行かず、フウリは魔力食いの攻撃を風で防ぎ、いなしている。

火精霊も隙を突いて攻撃するが、消耗が酷く有効打にならない。

魔力食いはすばやい動きで、消耗している火精霊を狙ってくる。

それをフウリがいなしながら、近づいて来ているであろう主の気配を探る。

「魔法に対する耐性も半端ないですねぇ・・・まぁ私は時間稼げばいいので」

そう言うと、フウリは突風を起こし魔力食いを吹き飛ばす。

しかし、魔力食いはすぐに木を蹴って戻ってきて、腕を振り下ろし

攻撃する。

「守りながら戦うのは久しぶりです。主はあまり守らせてくれませんからね。しかし、もう終わりです」

フウリは魔力食いの攻撃を風で受け流し、体勢が崩れた隙に風の刃を数発叩き込み、足止めする。

瞬間、魔力食いの姿がぶれたかと思うと、真っ二つになり崩れおち、黒い霧となって消えていく。

成り行きを見ていたリリィは何が起きたか理解できなかった。

「遅いです、主。落第点です」

魔力食いの消え去った後にはクリスが立っていた。

「厳しいな！フウリがいないし、魔力もろくにない状態で、こんな急いできたのに！むしろピンチに来て颯爽と悪を倒した白馬の王子さまじゃないか！っていうか本当に切れてびっくりだわ！なんか黒いの出てたけど、呪われないよね！？もう呪いは嫌なんだけど！」

大分急いだのだろう、クリスは息も絶え絶えなのに、それでも大声で叫ぶ。

「次からもう少し早く来てください、危うく本気を出すところでした。あと、主の剣なら切れるって言ったじゃないですか。呪いは分かりませんが、魔剣が粗方吸ってたようなので、もしかしたら何かあるかもしれないですね。よかったですね、主」

「おいいいい、無理無理！魔剣何食ってるのおおお！ダメでしょ！ぺってしなさい！」

フウリの発言を聞いて、クリスは大きく剣を振り回す。

その奇行の最中に、リリィと子供たちが目には入り、取り繕うかのように襟を正す。

「ま、まぁ、なんにせよ、無事でよかった。皆怪我はないかい？リリィも久しぶりだね？」

クリスはところどころ服がぼろぼろになり、枝が刺さっていたり、顔に傷ができてる。

そんなぼろぼろの状態でリリィに近づくと、キザったらしい笑みを浮かべ手を差し伸べる。

「主、その顔は気に障るのでやめてください」

「おま、気に障るってひどくない！？」

そんなクリスの行動をフウリはまるで無表情にばっさりと切り捨てる。

そこで、目を白黒させたリリィがやっと答える。

「えっと、そこの女性が守ってくれたので皆怪我は無いですけど」

そして落ち着いてきたリリィは、助けてくれたであろう青年の顔をみる。

「・・・あ、あー！クリス君！あれ！？何でいるの！？帰ってきたの！？その女の人だれ！？っていうかさっきの化け物なに！？どうなったの！？」

リリィは村でも元気がよく、その容姿と相まって結構村の男にも人気がある。

「おっと、帰って村長に報告しないと」

しかし、疲れているところでこの質問攻めに答えるのは面倒だとクリスは判断し、踵を返す。

「ちょ、ちょっと待ってよ！置いてかないでよ！」

慌ててリリィはクリスに手を伸ばし、逃さないとばかりにその服を掴む。

「後は任せた、フウリ」

「面倒を押し付けないで下さい」

「め、面倒ってどうゆうこと！？クリス君！」

服をリリィに掴まれたクリスは、その場でフウリに向き直るとリリィを指差し、差し出そうとするも素気無く断られる。

そのやり取りをみて、リリィは掴んだ服を引っ張りながら問い詰める。

「俺、ここまで超特急で来て、本当になけなしの魔力まで使ってふらふらなんだよフウリ」

「私も疲れました、帰って寝たいです」

「お前寝ると回復するのか・・・？」

「するわけないじゃないですか、気分です」

「ですよねー。んじゃ、二人で帰るか。家まで飛んでく？」

「いいですね。面倒事はいつも後回しにする主のその姿勢、私は好きですよ」

リリィを無視して仲良さそうに会話を重ねていくクリスとフウリに、リリィが疎外感から叫ぶ。

「うがあああ！無視するなー！」

「うがーって年頃の娘が上げる声じゃねえぞ！慎みたまえ！」

「そうですね、うるさいですよ娘。主との癒しの時間を邪魔しないでください」

叫ぶリリィを一瞥して二人はそれぞれ注意する。

「ふ、二人してなにさ！そんな怒鳴らなくてもいいじゃん！っていうか説明してよー！」

「俺は毎回あんまり癒されないんだけど、どうなってるの」

「仕方ない主ですね。今度とびっきりの癒しを私が提供しましょう」

「お、なになに?精霊の癒しなんて、俺想像つかないなぁ」

駄々をこねるように、クリスの服の端を掴んだ手を振り回すリリィに、しかし二人は無視を決め込んで無駄話をはじめる。

「無視しないでよぉ」

「落ちるのと、上がるの、どっちがいいですか?」

「おいまてや、なんか不吉な感じがするぞ・・・?」

「いえ、ただ急降下するか急上昇するかの違いですよ?どっちもがいいんですか?主も欲張りですね」

「あぶねぇよ!?癒されねぇよ!?欲張らねぇよ!?」

「私はそれをすると癒されます」

「お願いだから無視しないでぇ」

リリィは段々と涙をためて、力なくクリスの服を引っ張る。

「やっぱ、癒されなくていいわ・・」

「我がままな主ですね」

しかし、結局リリィに構うことなく二人は会話を続ける。

「うう・・・、クリス君が数年ぶりに帰ってきたと思ったら、私を無視して知らない女の人といちゃいちゃしてるぅぅぅ」

黒い霧が晴れ、森はにぎやかになってきた。

第九話「魔法使いの飴」

やっと泣き止んで周りの状況を理解しだした子供たちに、クリスがいつも持ち歩いている飴をあげることで収拾を図る。

「ほら、王都でも有名なお菓子屋の飴だぞ！一個ずつやるから並べー。みんな食べたら出発だ」

クリスは飴を手に持ち、高く掲げて注目を集める。

子供たちは、泣いてたことも忘れて我先にとクリスの前に列を作る。

そんなクリスを見てフウリが感慨深そうに告げる。

「さすが主。昔は年下しか遊び相手がいなかっただけあって、そういうことは上手いですね」

「ど、同年代の友達もいたわ！」

「え？」

クリスから飴を貰おうと列に並んでいたリリィが疑問の声を上げる。

「いい度胸だ、お転婆娘！おまえにはやらん」

「ああ！嘘嘘！クリス君友達いっぱいいたよ！本当だよ！」

リリィは飴欲しさに、必死に嘘を並べてフォローしようとする。

そんなリリィを無視してクリスはフウリに顔を向ける。

「ところでフウリ、火精霊は大丈夫なのか」

「はい、先ほど指輪に少し溜まっていた主の魔力を頂いて、渡しましたので消滅はしないでしょう。あとは魔力食いもいなくなったので、元の棲家にいれば、すぐ回復するでしょう」

契約していない人と精霊が魔力のやり取りをするより精霊同士でやり取りをしたほうが楽なので、クリスはフウリに火精霊の面倒を任せていた。

「あ、あの、クリス君、私も飴ほしいなー、なんて」

リリィがクリスの服を引っ張りながらその顔を見上げるが、クリスは知らん顔をする。

「ならよし。フウリ、火精霊をその棲家に運んできてくれるか？」

「分かりました。運び終わったら主の所に行ったほうがいいですか？」

「うーん。たぶん村長の家で説明会だから、フウリは先に家に戻って休んでていいよ」

少し考え込んだクリスが、フウリを先に家に帰そうとする。

「あの、飴・・・」

小さく呟いたリリィの発言はやっぱり無視される。

「また、私が倒したことにしようとしてますね」

「てへ」

クリスは拳を頭にのせ、舌を出す。

「気持ち悪いです主」

「すんません」

クリスはごまかそうとしたのだろうが、フウリに一刀両断される。

「うう・・・またクリス君がー！」

「うるさい子だな！ほら、飴あげるからちょっと黙ってなさい」

「やった！」

騒ぎ出したリリィに、クリスはポケットから飴を一つとりだし、リリィの手の平に乗っける。

嬉しそうに飴を手に取るリリィを見てため息を吐くクリス。

「見た目だけ大きくなって、中身はあのままなのか」

外見はいい女と言ってもいい程なのに、中身は子供のころと変わらず、世話焼きでお転婆で向こう見ずなリリィに、クリスは懐かしそうに目線を向ける。

「んー？」

リリィは飴に夢中で聞こえていない。

「なんでもない」

もう一度、クリスはため息をつくとフウリに向かう。

「んじゃ、そっちは頼んだ。こっちは、フウリさんマジ半端ねぇっす、って感じにしとくから」

フウリが呆れたように言う。

「たまには自分の手柄にすればいいじゃないですか。私は人間に尊敬されるのも畏怖されるのもどうということはないのですが。主が下に見られるのはあまり我慢できないんですよ？」

「ドラゴンキラーでお腹いっぱいなんだよ！あの時だって決闘申し込んでくる奴とか、闇討ちまがいに狙ってくる奴とかいて大変だったんだから・・・」

やたらプライドの高い王都の騎士団員が、新しいドラゴンキラーが冒険者だと聞いて闇討ちするも逃げられ、その数日後に逆に闇討ちされたとか・・・

精霊に対抗意識を燃やす人間はまずいないので、手柄をフウリのものにしたほうが波風が立たないとクリスは思っている。

「まぁ、いいでしょう、分かりました」

「助かるわ。さすが我が精霊さま、愛してるぜ」

「はいはい。それでは火精霊を運んできますので」

嬉しそうな顔をして、火精霊を抱えるフウリ。

「ほい、気をつけて」

「よし、こっちも行くぞー。森の入り口に村長たちがいるから、さっさと安心させてあげるぞー」

「ふぁーい」

飴を口にいれながら返事をするリリィ。

子供たちも、甘いものを食べて元気が戻ってきて、立ち上がって歩き出す。

「なぁなぁ兄ちゃん、その剣本物なのか!?」

「触らせてくれ!」

「あのお姉ちゃんたち大丈夫かな?」

「あ、あんな化け物、僕一人でも退治できたし!」

「お前泣いてリリィ姉ちゃんにしがみついてたくせにー!俺は泣かなかったぜ!」

「なんだとー！」

「ねぇねぇ、クリス君、飴玉もう一個頂戴？」

子供たちプラス1が騒ぎながら森を移動する。

「この剣は一応本物だぞー、ただ今抜くと呪われそうだから抜けないけど。あのお姉ちゃんたちは心配ないよ、家に帰って休めば良くなるんだと。あんな化け物一人で退治できるなんてすごいなー、けどこれから村長たちによる地獄のお説教大会で坊主が退治されちゃうかもなー。あとそっちの坊主は泣かなかったかもしれないけど、ズボンの染みをどうにかしような。そしてリリィ、再会して早々こんなこと言うのもなんだけど・・・」

子供たちの発言に律儀に答えたクリスは、最後にリリィのほうを真剣に見つめる。

「え、なに？告白？さすがに急すぎるよ？私困っちゃう」

「あー、うん。お前五年前と全然変わってないなー」

クリスは、リリィにあってからここまでの感想を率直にのべる。

「そ、それどういう意味？」

「可哀想に・・・」

哀れみの視線をリリィに送るクリス。

「え？え！？どうゆう意味さ！？」

リリィを無視してクリスが子供たちに視線を向ける。

「さーて、入り口が見えてきたぞー。坊主ども、しっかりこってり怒られてこいー。ついでにリリィも怒られろ！」

「わ、私怒られないよね？助けに行っただけだもんね！？」

「さぁなぁ。っと、村長ー！」

クリスは、前方に見えてきた武装した村人たちの先頭にいた村長に手を振る。

村人たちは急いでクリスたちのほうに駆けてくる。

「く、クリス！みんな無事か！？」

「うん、みんな怪我も無し。健康そのものなので、しっかり頼みまーす」

「うむ、引き受けよう。しかしとりあえず、村まで戻らんとな。子供たちの家族も心配してるしの」

村長先頭で、子供たちを囲うようにして村に戻る。

「これは久々に腕がなるぜ・・・！」

「初代以来の大仕事だな！」

「初代は更生できなかったからな、こいつらはあんなことにはさせない・・・！」

「もちろん、リリィも一緒に説教だな。あのお転婆娘が！」

「ローテーションは、いつも通りでいいか。まずは両親、次に村長、あとは順々にいこう」

等々、説教に妙なやる気を見せる大人たちに囲まれ、青い顔をする子供たち、プラス１。

「ね、ねぇ、クリス君。私も説教されそうなんだけど。た、助けてくれないかなーなんて」

「しっかり受けておいで。骨は拾ってやるから」

「み、見捨てないでよぉ」

リリィはクリスの袖を掴む。

「ま、命があっただけいいじゃないか！あれも慣れてくるとなかなか赴きがあるよ。俺はもう一生分受けたから全力でお断りだけど！」

「だ、だけど。一応私は、皆を助けに行ったんだよ！」

リリィは情状酌量の余地はあるのではないかと何故かクリスに訴える。

「結果、家族にも村のみんなにも心配かけたんだぞ」

しかしクリスは、正論を武器にリリィの発言を粉砕する。

「むぅ！クリス君だって、村出て行ったとき、家族にすごい心配かけたんだよ！私も心配したし！」

「残念。それはもう昨日、母親に殴り倒され、弟に絞め殺されそうになって清算されました」

「私の心配は！」

「今日助けたのでちゃらです」

「ぐぬぅ」

「ほら、飴やるから、元気だせって」

「わー！ありがとー！」

（なんというちょろさ。まぁどうせ、リリィも子供たちも夕飯食えないだろうしなー）

村の篝火が見えてくる。

そして、村の入り口にはお母様集団が待ちうけている。

魔法使いが旧友と親交を暖めている中、そのときは刻一刻と迫ってくるのだった。

第十話「魔法使いとお風呂」

鬼の形相をした親たちと共に、村長の家に数年前にできた、通称説教部屋に子羊たちが引きずられていくところを確認すると、村長はクリスに言う。

「今回は長引きそうだの。とりあえず、疲れてるかもしれんが、こっちも話だけ聞かせてもらっていいかの？」

「了解、村長の家で？」

「うむ、あの様子だと第一陣は母親たちだろうから、順番待ちしてる者にも聞かせよう」

説教は親と村の主だった者たちがやるので、順番待ちの部屋は重要な話をするのに丁度いい。

「順番待ち・・・なんという説教地獄」

「おぬしのせいで出来たのだがな」

「さて、行きましょうか、村長さま！」

「はぁ、これ走るでない」

村長はため息をついてクリスを追う。

村長の家で、時々漏れ聞こえる怒声や泣き声を聞き流しつつ、クリスは森であったことを、村長と順番待ちの部屋で説教に向けて各々作戦を話し合ったりアップしていた面々に、少し事実を曲げて説明した。

「ふむ。では魔力食いが魔物が森に住みついて悪さをしてたのかの。それであの子たちはそれに襲われていたと」

「そそ。それで、それを森にいた精霊と、俺と契約してる精霊が倒したと」

村長が目を瞑って何か考え、ゆっくり目を開ける。

「昔、旅の人に聞いた話だと、魔力食いというのは精霊を食べるということだったんだがの」

クリスは、立ち上がって腕を振り上げ、捲くし立てるようにしゃべりだす。

「おいおい、村長さんよ。うちの精霊、フウリさまをなめないでもらおうか！そんじょそこらの精霊とは訳が違うんだぜ！風精霊ならではの用途に応じて使い分けることができる機能に富んだ魔法、すばやい移動速度と魔法行使、気配察知、遮断もお手の物。風精霊というと攻撃力が無いと勘違いする素人もいるが、あれは間違いであるとここで断言しよう！風の刃による微塵切りから、突風による磨り潰しまでなんでもござれの多種多様な攻撃！他の精霊と組めばその脅威は更に増す！それに加え、手前事で悪いけど、うちのフウリ

はそれはもう美人だし、気が利くし、やさしいところもあるし、実は最近料理に興味を持ったりと家庭的なところも見せ始めて、そこと普段とのギャップがそれはもう言いようのない気持ちを俺に抱かせるんだ！ああ、もちろん欠点みたいなものもあるよ？主に対して口が酷く悪いとか、心の柔らかい部分を抉ってくるとか。けどそういうところも含めてもあいつと契約したこと俺は後悔してないよ？なんていうのかな、契約とは別に信頼っていうのかな、そんなものがあいつと俺の間にはあるんだ。だからあいつには安心して背中を任せれるし、あいつも同じだと思う。はは、ちょっとくさかったかな、けど本心なんだぜ。まぁ結論を言うと、フウリは魔力食いなんかには負けないぜっていうことなんだ」

周りの村人は呆然とそれを眺める中、クリスが座りなおす。

（（（（結論と関係ない話が間に長々と挟まっちゃってたよ！？））））

我に帰った村人たちは、そんな感想を一様に覚えるが、皆が突っ込む前に、村長が一息吐いて言う。

「う、うむ。お前と契約した精霊さまの話はよく分かったぞ。しかしどちらにせよ、お前のおかげで、本当に助かった。ありがとう」

村長と、集まっていた面々は深く頭を下げる。

煙に巻けたことにクリスは安心し、同時に謝罪されて妙に居心地が悪くなる。

「勘弁して。そんなことされると、散々迷惑かけて出て行った身としては逆に座りが悪いっす」

クリスがそう言うと、皆頭を上げて口々に好き勝手言い出す。

「確かに違和感あるな、昔はここでクリスをいかに反省させるかを考えてたわけだしな」

「世の中分からないもんだなぁ」

「クリスのくせに俺らに頭下げさせるなんてな」

「いきなり惚気だすしな」

「そもそも、家庭的で気の利くちょっときつめな美人の精霊さまと契約だぁ！？」

「しかもセルフで言葉責め！」

「クリ坊のくせに生意気だ！」

「うちのかかぁと代えてくれ！」

「っていうか、元はといえば初代が悪いんじゃね？」

「お、それ俺も思った」

「おい初代、お前も説教参加していけよ、もちろんされる側で！」

たまらず初代が絶叫する。

「変わり身が早い上に、割とひどいなあんたたち！！」

「うるせえ！お前が作ったんだろ、あのいたずら集団！責任とれ！」

「俺の色本も責任とってくれ！！」

皆、悪態を吐きつつも、嬉しそうにクリスをもみくちゃにする。

「ほれ、クリスも疲れてるだろう。それくらいにせんか、お前たち」

村長がたしなめ、場を静める。

「まぁ、こうやって言い合ってるほうが気が楽でいいかな。けど、雲行き怪しいからそろそろ帰るわ」

「うむ。明日は久々に狩に出れるから、馳走を期待してくれ。宴を開くぞ」

「はーい、母さんと弟にも伝えとくよ」

「うむ、頼んだぞ」

そして、村長とその他の面々、あと怒声と懺悔の声に見送られてクリスは帰途についた。

「ただいま」

クリスが玄関を開けて家に入ると・・・

「に〝い〝さ〝ぁ〝ん〝～」

ジョシュがタックルしてくる。

と、それを寸前の所でマリアンが首根っこを掴み止める。

「おかえり、クリス」

「おかえりなさい、主」

玄関には、ジョシュを取り押さえたマリアンと、フウリが立っていた。

「ジョシュはどうしたの？」

「あんたが森に魔物退治に行ったって聞いて、自警団に無理やりついて行こうとしたのを私が止めたから、ずっと玄関で待ってたのよ」

「それはまた・・・心配掛けたな」

クリスがジョシュの頭を撫でる。

「ちゃんと魔物も倒したし、明日は宴だと」

「分かったわ。フウリちゃんもさっき戻ってきていろいろ手伝ってくれたのよ。お風呂も水入れ替えて沸かしてあるから入っちゃいな」

クリスはジョシュの頭から手をどかす。

「お言葉に甘えてお風呂に行こうかね」

「主、背中流しましょうか」

「兄さん、背中流すよ！」

「む？」「え？」

フウリとジョシュの視線がぶつかる。

「あらあら。クリスもてもてじゃない」

面白そうに言うマリアン。

「とりあえずジョシュは、昔俺の背中を力一杯擦って傷だらけにしたことを思い出せ」

「う、ごめんなさい」

ジョシュが下を向いてしゅんとする。

「それはすごいですね。なかなか主の背中に傷をつけれる者はいませんよ。誇っていいです」

クリスの身体能力を知っているフウリが嫌味無しに言う。

「まぁ、かわいい弟だしな。最初は我慢したんだけど、段々強くなっていってな・・・」

「あのときは凄かったわ。ジョシュが大慌てで呼びにきて、行ったらあんたは血だらけで倒れてるし、なにがあったのかと思ったわよ」

「ううぅ・・・」

ジョシュが涙目になってきたので、クリスがフォローする。

「ま、まぁ、今日は疲れてるから、また今度一緒に入ろうな」

そう言うとジョシュは、ぱぁっと顔を輝かせて頷く。

それを見届けて、クリスは風呂へと向かう。

その後ろを当然のようについていくフウリ。

「おい、フウリ。ついて来るな。お前も少し反省しろ」

「おかしな主ですね。私はこれと言って、お風呂絡みで反省するようなことは無かったと思いますが」

「ほうほう?昔、有名温泉地に突如謎の竜巻が発生して被害が出たことに関する弁明を聞こうか?」

「何を言っているんですか主。あれは事故です、自然現象です。乙女の柔肌を見ようとした不埒者以外に人的被害も無かったからいいじゃないですか。ついでに削られたところから温泉も出て万々歳。いい事したあとは気持ちがいいですね?」

「阿呆か!その不埒者は一応一緒のパーティーを組んでたんだぞ!再起不能一歩手前まで追い込むなよ!せめて、おとりにできる状態

くらいで我慢しろよ！おかげで後に控えてた依頼を俺一人で処理しなくちゃいけなくて、指輪に呪われたりで俺も再起不能になりかけわ！」

「では主は私の肌を人間の男に見られてもいいのですか？見下げた主ですね」

「あれ、それはなんかむかつくな。今度あいつらに会ったら九割刻むか」

「いいですね、去勢しましょう」

「同じ男としてそれは許してあげて・・・」

結局、魔法使いとその精霊は言い合いながら、風呂場へと消えて行くのだった。

第十一話「魔法使いの指輪の秘密」

「やっぱ自分のベッドは落ち着くなぁ」

お風呂から上がって、ご飯を食べたクリスは部屋のベッドにダイブしてごろごろしている。

「それはいいですが主、魔剣を抜いて見ましたか？」

フウリは机の椅子に座ってお茶を啜っている。

「おいやめろ、俺の今一番気にしたくない事ランキング第一位に堂々と突っ込みをいれるな。触れないようにしてたんだ。ちょっと時間置いて魔剣があの黒いの消化してからでいいじゃん」

「消化するような器官はあの魔剣にはついていません。もう取り込んでしまったでしょう。抜いてください」

クリスはベッドから勢いよく起き上がり、部屋の隅に置いてある魔剣を指差して言うが、フウリはお茶を置いてクリスに詰め寄り、剣を抜かせようとする。

「え、なんでそんな積極的なのフウリさん」

「私の推察が正しければ、その魔剣、面白い事になってますよ」

「ちなみにその推察とは？」

興味を持ったクリスが身を乗り出して聞き返す。

「ふむ、説明したほうが主も安心できそうですね。それでは説明します。まず、あの魔力食いの黒い霧ですが、いろいろな説がありますぎて体から溢れているとか。私個人の見解ですと、黒い霧は一種の消化器官だと思っています」

「消化器官・・・他の生物の魔力をあれで消化して自分のにしてるのか」

クリスはフウリの講義を聞いて、自分なりに咀嚼していく。

「そうです。普通、面倒な手順を踏まないとできない生物間での魔力の取引を、一方的にできるようにしているモノがあの黒い霧だと推察します」

「あれけどそれなら、うちの魔剣もできないっけ？」

ふと思った疑問を、クリスは部屋の隅を見ながら問いかける。

「あれは相手を切って体内に刃が接触しないとできません。十分面倒な手順でしょう。ついでに吸引するだけで、その魔力で出来ることも限定されてますし」

「なるほどなぁ」

「世界からの魔力供給を一切できない魔力食いが、あの黒い霧によって他の生物から魔力を食らって生きている。そこまではいいですね？」

「さすがフウリ先生、教え方も上手くて素敵！」

学院時代、クリスの追試前には付っきりでフウリが勉強を教えていたので、教えるのはお手の物だ。

「もっと褒めていいですよ？」

「続きを期待」

「仕方ない主ですね。それで、元々黒い霧と魔剣は似ているところもありますので、うまく吸収できていれば、黒い霧の力が使えるかもしれないと思うのです。魔剣からもほんのり魔力食いの力を感じますしね」

「フウリ先生質問があります！」

手を上げるクリス。

「はい主、そこで三回回ってワンと鳴いてから質問をどうぞ」

クリスを指し、ついで床を指差すフウリ。

「学院の変態教師どもでもなかなかそんなこと言わねぇよ！？じゃなくて、結局うちの魔剣ちゃんは何ができるようになったの？」

「ふむ。黒い霧は取り込んだ魔力を完全に自分のものとして扱えるようにする器官だとするなら、本来なら魔剣に蓄積した魔力は切れ味向上と斬撃を飛ばすことしか出来なかったのが、主の好きにできるようになるんじゃないかと思います」

「おお・・・！？」

「つまり、擬似的に魔力量が増えて、しかも回復量も増えた上に、切れば切るほど魔力が回復する、ということになってるかもしれないですね。さぁ、主の研究がまた一歩進むかもしれないのです、すぐ抜きましょう」

フウリはクリスに剣を抜くよう急かす。

「お、おう。それじゃあ、抜くぞ？抜くからな！？」

クリスは、部屋の隅から剣を取り、恐ろしいものを触るかのようにその柄を握る。

「早くしてください、へたれ主」

「あはい」

意を決したようにクリスは剣を抜く。

しかし、特に何も起こらない。

「ん？何もなさそうだよ？」

折角意を決めて抜いたのに何も起きないことにクリスは気が抜ける。

「本当にお馬鹿さんですね主。魔剣の魔力を使わないと分からないでしょう。そうですね、剣を握って私に魔力を送るイメージをしてください。どうも私からは奪えそうに無いので」

「ほほう」

クリスは目を瞑って、契約で出来ている自分からフウリへの魔力の流れに、剣からも魔力が流れるようにイメージする。

「ふむ。これはこれは」

フウリが楽しそうに呟く。

「お？できた？」

クリスが目を開けて聞く。

「ええ、ばっちりですね。しっかり流れ込んできて、主の魔力の味がします」

「え、どういうことなの」

「簡単に言うと、魔剣は自分の魔力を主の魔力に限りなく味を似せているのです。なので、剣を通して魔力を使う他に、主は簡単に剣の魔力を自分の魔力として取り込んで使うこともできるようですね。けど、魔力の所有者は魔剣なので、いくら味が似ていても直接私が奪うことはできないのです」

「おおー！自由にできる魔力がふえたのか！」

クリスは喜び剣を抱く。

「そうです、よくできました。けど、主が魔剣から魔力を吸い取れ

ばそれは主の魔力なので、私の好きにできます。喜ばしいことです」

フウリの言葉を聞き、剣を置きながらクリスがつぶやく。

「なんか魔力が増えたと思ったら、結局そうでもなかったような感じになってる件」

「いえいえ、切れば切るほど魔剣の上限までは使える魔力が増えますよ。よかったですね。早速ドラゴン狩りに行きましょうか」

「過激発言禁止!!そもそも魔剣は今お腹いっぱいなので切っても取り込めません!」

クリスが腕を交差させ、フウリを止める。

「魔剣から主を通してその指輪に魔力を送って、魔剣の空きを作ればいいじゃないですか。ああけど、ちょっと容量が足りないようなので、その指輪を量産しないといけませんね」

「無茶言うな!この指輪の元、どんなもんか知ってるだろ!一時期この指輪に呪われて大変な思いしただろうが!」

「そういえば、主が遺跡にあった指輪を何の疑いも無く手にとって、危うく契約が切れそうになりましたね」

しみじみと思い出し、フウリが言う。

「その節は大変ご迷惑をおかけしました、すみません」

クリスはすぐにフウリに頭を下げる。

「まぁ、いいでしょう。魔剣の確認も出来たことですし、そろそろ寝ましょうか」

「おう。今日は一緒に寝ないからな！」

「主は私に床で寝ろというのですね」

「おい、現在進行形で浮いてるだろうが」

「馬鹿なこと言わないでください、浮いてるのは主の存在ですよ」

「そっちの浮くじゃない！！ったく、さすがに疲れてるからもう寝るぞ」

そう言ってベッドの端に寄る魔法使い。

精霊が空いたところに潜り込む。

結局、一緒に寝るのだった。

第十二話「魔法使いと周りの国々」

晴れ渡った朝、クリスとフウリは魔力の都合がついたので、火精霊が養生している洞窟へ向かう。

クリスは昨日はほとんど見れなかった森の風景を懐かしそうにみながら歩く。

フウリはクリスに合わせてその横を浮きながら移動している。

「ところであの火精霊さん、格高いの？」

「なんですか主。私以外の精霊に興味津々ですか？浮気ですか？」

「突拍子も無いこと言うねお前！」

フウリは蔑む様にクリスに顔を向けて言い、それを聞いたクリスの叫び声が森に響き渡る。

「冗談です、半分くらい。あの精霊はなかなかの格ですよ、私と同じところにいても逃げないくらいには」

「そう考えると、凄いよな。大抵の精霊はフウリにあんまり近寄ってこないからなぁ」

「似たもの同士ですね、主と私。少し照れてしまいます」

フウリは表情を一切変えずに言う。

「真顔で言わないでくれる？しかも俺は別に人が寄ってこないわけじゃないよ！？」

「何を言うかと思えば。主、良く思い出してください。あのいろいろぶっ飛んでる友人たち以外に主に友達がいますか？人間の、ですよ」

フウリに顔を向けてクリスは自分たちの認識の違いを正そうとするが、フウリの質問に答えが出ずに焦る。

「えっと・・・あれ・・・？吸血鬼とか竜人とかもだめ？人間に似てるじゃん、あ！エルフ！エルフはセーフでしょ？」

クリスはギルドの関係で変な人脈はあるのだが、まともな友達が少ない。

「一般的な友人はほとんどいませんね、それが現実です」

「う、うそだと言ってよフウリぃ・・・」

がっくりと膝をつくクリス。

「大丈夫です、主。例え主が世界を敵に回しても、私は主の味方ですよ？」

ひざまずくクリスの肩に優しく手を置いてフウリは諭すように肩を叩く。

「え、なにこれ、うれしい」

クリスがぱっと顔を上げフウリを見る。

「一度世界を壊してみたいと思っていたんです。二人の楽園を築きましょうね」

フウリが薄く笑って言う。

「過激すぎるわ！普通でいい、普通の友達がほしい」

地面を叩きながらクリスが言う。

「あのぶっ飛んだ人たちと付き合っている以上無理でしょう。主もぶっ飛んでますしね」

「他国ならできるかもしれん！」

クリスは精神によく無い自分の交友関係を思いだし、友達を国外に求める。

「頑張ってください。ただ、ガイエン帝国では、主は要注意人物としてマークされてるので、気をつけて旅行しましょうね」

ガイエン帝国は、クリスのいるオーカス王国の西に位置している大きな領土をもつ軍事国家である。

「て、帝国以外にも国はあるし！」

「ほうほう。あれですね、主のせいで停戦交渉してるグルーモス王国ですか？あっちはまだ交渉中なので危ないですよ？」

グルーモス王国はオーカス王国の南にあり領土問題で何度か戦争をしている。

戦力的にはオーカスが圧倒するのだが、帝国が支援しているため、なかなか決着がつかずにいた。

「トライン聖王国が・・・！」

トライン聖王国はオーカス王国の北にある宗教国家だ。

「ふむ。お姫さまを主が誑かした国ですね。王様が親馬鹿でしたね。あそこの王族は天使の気配もほんのりしたので、あのときは生きて出れただけでも有難いと思いますよ」

「勘違いだあれは！！っていうか、あれ。俺がこの国から出るの、大変じゃね？」

クリスが考えるように呟く。

「さて、主が現実を認識できたところで。あの洞窟が火精霊の棲家です」

前方を指差してフウリが言う。

「はい・・・」

クリスはフウリの先導で洞窟の奥へと進む。

「ほー、これは結構魔力が溜まってるな」

ごつごつとした岩肌を歩きながら、クリスは周りを見回し関心したように呟く。

外よりも少し気温が低く、ひんやりとした空気に歩いて汗ばんでいたクリスは心地よさそうにしている。

少し歩くと前方から火精霊がふわふわとやってくる。

「ぼんやりと人型を取ってるということは、かなり高位？」

「そうですね、今は消耗しているので、ぼんやりですが、回復すればくっきりするかもしれませんね」

「すぐに魔力を渡すんだ、フウリ」

何かにぴんと来たらしいクリスは、真剣な表情をしてフウリの方に手を置き揺らす。

フウリは揺れながら、クリスの発言の意図を考える。

「何で急にやる気になってるんですか主。ああ、そういうとこですか、相変わらずむっつりですね。私と初めてあったときも挙動不審でしたよね」

「ちちち、違うし、別に裸目当てとかじゃねぇし、勘違いするなし」

「主、盛大に自爆してます」

ある程度、人の世界に興味を持っている精霊以外は服というものを

知らない。

知っていても、理解できない精霊がほとんどだ。

フウリも契約当初は全裸だった。

クリスが必死に教えて、やっと魔力で服を作るようになったのだ。

クリス曰く、ちょっと見れるのはどきどきするけど、四六時中となるとその限りではない、そうだ。

そんなフウリも最近では、料理と共にファッションにも凝るようになっている。

「それでは魔力を渡しますよ」

そう言うと、フウリはふわふわ浮いていた火精霊を抱き込む。

すると段々二人が光っていく。

クリスは期待に満ちた目でその光景を見守る。

光が収まると、そこには子供の姿の火精霊が立っていた。

「くそ！幼女じゃねぇか！責任者呼んでこい！」

絶望した魔法使いの声が洞窟にこだまするのだった。

第十三話「魔法使いと火精霊」

フウリは絶叫するクリスの方を向く。

「主は本当にどうしようもないですね。少し黙っててください」

「だけど！俺の期待が！」

駄々をこねるようにフウリに向かって言うクリスに、フウリは無表情に続ける。

「それ以上言ってるとねじきりますよ？」

フウリは視線を少し落として言うと、クリスは意図に気づいたのか急所を手で覆う。

「黙ります！」

「よろしい」

どちらが主かわからないようなやり取りをしてクリスが落ち着いたのを確認すると、フウリは火精霊に近づき、膝を落としおでこを合わせる。

火精霊は再度光に包まれると、今度は白いワンピースを着て立っていた。

それを確認すると、フウリは火精霊から離れる。

こうして見ると、人間の四、五歳くらいの子供にしか見えない。

「ふむ、白い肌と服の色が合っていて似合いますね。我ながらいい見立てです」

「かぜの　せいれいさま　ありがとう」

「うお、幼女精霊が話とる」

クリスは火精霊がたどたどしく礼を述べるのを見て、昨日から先ほどまで話していなかったので驚いたようだ。

「ええ、言語と服の情報を伝えたので」

「さすが、風精霊。情報の伝達はお手の物だね！」

「私ほどになると、マッチした服を着せることもできます」

クリスのおだてに、フウリは胸を張って自慢げにする。

火精霊はそんなフウリとクリスを交互に見る。

「こちらが私の主です。ぶっ飛んだ変態無職のダメ主ですが、やればできる子なんですよ」

「いいところを一切言わないだと！」

手で火精霊に示して聞かせるフウリの横で、クリスが何か少しはあるだろうと言う。

「主のいいところですか。あまり難しい話を振らないでください、困ります」

「一個も出てこないどころか難しい話扱いかよおおおおおお」

本当にこまったかのように首をかしげるフウリに、クリスは絶叫する。

「興奮しないでください、火精霊が怯えてしまいます」

「む、精霊とは言え、子供に怯えられるのはいい気がしないな」

怯えるようにフウリの後ろに隠れた火精霊を見て、クリスは居住まいを正すと口を開く。

「森の精霊さま。村の子供たちを守って頂いたこと、感謝致します。ありがとうございます」

丁寧に謝辞を述べるクリス。

しかし火精霊は首をかしげる。

「わたし　かぜの　せいれいさまに　たすけられた　だけど　やくそく　まもれなかった」

フウリの後ろから少し顔を出した状態で、たどたどしく火精霊が言う。

「うん？約束？フウリ、何か約束したの？」

「ええ。助けたときに、森に入ろうとする人間を止めるようにと」

クリスは何も聞いていなかったようで、不思議そうにフウリを見て、フウリは思い出したように言う。

先ほどより少しフウリの後ろから出てきた火精霊が続ける。

「にんげん　もりに　はいったから　そとに　だそうとした」

「それで、魔力食いと遭遇して戦ってたのか。いや本当に子供たちを守ってもらって助かりました」

昨日の状況の理由がやっと分かり、クリスは改めて火精霊にお礼を述べる。

火精霊は完全にフウリの後ろか出てきて告げる。

「わたしは　にど　たすけられた」

「ふむ。主、この火精霊と契約しませんか？」

何か考えている風だったフウリがクリスに突如提案する。

「この流れでなぜそうなる」

まったく流れが読め無いフウリの発言にクリスが呆れた顔をする。

「いえ、火精霊から主への感謝の念が伝わってきたので、この際どうかなと。折角魔力もあることですし。あと私、火精霊とは相性いいので」

「まぁ確かに、戦力はあって困るものでもないしな」

クリスはこれまでの経験から、たまに物騒な考え方をしてしまうことがある。

「けど、容量は剣の分だけで足りるのか？」

「主は私とその少ない魔力で契約してるんですよ？得意のインチキ魔法を使えば十分足ります」

「インチキ言うなし。節約は大事なんだ」

「そういうことは、お師匠さまに値段も言えないような物を貢のをやめてから言いましょうね」

クリスの師匠は古代魔法や遺跡の研究をしているので、クリスはよく遺跡の発掘品や古代魔法の本を師匠のところに持って行っている。

珍しいものなのでかなり高いのだが、師匠は名門貴族の出なのでお金の感覚が鈍く、結構気にせず嬉しそうに貰っている。

クリスは師匠が嬉しそうに受け取ってくれるのが嬉しくて、結果その出費が続くのである。

おかげで最近は、フウリがクリスの財布を握れるほどに、物価に詳しくなってきている。

「よ、よし。森の精霊さまさえ良ければ、契約しましょう！そうし

ましょう！」

これ以上は薮蛇だと焦ってクリスが火精霊に向きなおる。

「けいやく　あの　おいしいまりょく　もらえる　？」

フウリ経由で貰った魔力の味を覚えた火精霊が首をかしげ尋ねる。

「ええ、ええ、それはもう！ただ少し契約魔法をいじりたいのですが、よろしいですか？」

勢い込んで火精霊に向かうクリス。

「けいやく　いじる　？」

火精霊はクリスと契約しているフウリを見つめる。

「大丈夫です、私も主とそれで契約してますので。あなたに害を成すものではありませんよ」

「けいやく　する」

フウリがやさしく火精霊を諭し、その言葉を聞いた火精霊が決断してクリスを見上げる。

「それでは失礼しまして」

クリスは手ごろな棒が無かったので、魔剣の鞘に魔力をこめて洞窟の床に魔法文字をすらすらと書いていく。

鞘が通った床はほんのり光っている。

普通の精霊との契約なら、人間が魔力を提示し、精霊が了承ならそれを取り込むだけの原子的な魔法なのだが、節約魔法を契約に組み込むには、クリス考案、師匠監修の魔法文字の上でそれをやる必要がある。

無事書き終わったクリスは火精霊と共にその上に立つ。

精霊は、生物との契約方法を生まれたときから自然と知っていると言われている。

「それでは、契約をしますね。そこの文字の上に立ってもらう以外は普通の契約方法ですので」

「わかった」

火精霊が文字の上に立つと、クリスは魔剣から魔力を吸いだし、それを火精霊の前に持っていく。

薄く発光した魔力が、洞窟の薄暗さと相まって幻想的な輝きを放つ。

火精霊がその魔力の塊を両腕を広げて、まるで大事なものを包むようにその腕に抱くと、段々と光の塊は吸収されて消えていく。

やがて魔力の塊が完全に消滅し、火精霊と魔法使いとの間に契約が

成立した。

第十四話「魔法使いの娘」

「ふう、無事契約出来たな」

人生二回目の契約が終わったことにほっとするクリス。

「私のときよりスムーズでしたね」

見守っていたフウリが口を開く。

「けいやく　できた」

火精霊はほとんど表情が読み取れないが、若干うれしそうにも見える。

「よくできましたね。ずっと子供がほしいと思ってたんです」

「おい、なんでそうなる」

フウリの予想外な言葉に反応するクリス。

「戦力なんてこれ以上いると思ってるんですか主。私と主で魔王にも喧嘩売れますよ、そして完勝します」

「物騒なこと言うな！っていうかどういうことなの！？」

「いえ、ですから子供が欲しかったのです。私と主の子ですよ。名前はどうしますか？」

「なまえ　？」

火精霊が首をかしげる。

「ええ、あなたの名前ですよ。持ってないようなので、今から考えましょう」

「おかしい。知らない間に子供ができた」

「現実を見てください主。私に似て美人になりますよ」

「種族的に俺には絶対似ないよね！？」

精霊は女神が作ったとされ、格が上がると全ての精霊は女性の形をしている。

「自分の子供が嫁に似ているからといって嫉妬ですか、可哀想な主」

「落ち着けや！まず俺の子供じゃないうえに嫁もまだいない！！」

「主が落ち着いてください。これからいつも一緒の主と私とこの子、並んだらどう見えますか？」

「え・・・あれ・・・ちょっと若い親と子？」

少し想像して、結果を口にするクリス。

「正解です。主がどう思おうと、世間の目が真実を照らします」

「え、けど、あれ？え、え？」

クリスがしきりに首をかしげる。

「私がお母さんで、あっちで首をかしげている少し間抜けな顔をした人間がお父さんですよ、わかりましたか？」

クリスを放って刷り込みを開始するフウリ。

「おかあさん　おとうさん」

フウリとクリスを交互に見て口ずさむ火精霊。

「さて、名前はどうしましょうか？主なにか案はありますか？」

「え、あ、うん。名前だよね、名前。どうしようか？」

思考を放棄したクリス。

「主はネーミングセンスがあまりないですからね。風の精霊だから、シルフと言い出したときには契約を引きちぎろうかと思いました」

私はあいつが嫌いなんですよ、と続けるフウリ。

「結局、フウリも自分で考えたからな！火精霊に考えてもらうか？」

「馬鹿なこと言わないでください、この子は人間の言語をさっき伝えたのですよ」

「すんません・・・」

「仕方ない主ですね。私が考えます、大事な子供ですからね」

なんだかんだとフウリは嬉しそうに考えだす。

「あのそれなんだけどやっぱ・・・」

クリスが子供発言に対して疑問を呈そうとする。

「うるさい主ですね、少し考えるので黙ってこの子を見ててください」

フウリが一刀の元に疑問を切り伏せて、火精霊をクリスの前に押す。

「おとうさん　？」

火精霊がクリスを見上げて首をかしげながら言う。

「な、なんだこの気持ちは・・・！幼女に見上げられてお父さんと呼ばれただけなのに、このときめきは！・・・も、もう一回言ってくれるかな？」

火精霊に向かってお願いするクリス。

「おとうさん　？」

火精霊は再度同じ行動を取る。

「よし。俺が君のお父さんだよ！何か欲しいものがあればすぐに言うんだ！お父さん何でも買って上げちゃうよ！」

クリスは、父性が湧き上がり、それまでの疑問を彼方へと吹き飛ばす。

「ほしいもの　？」

「うんうん、何かあるかい！」

「ん　おとうさん　の　まりょく　おいしかった」

少し考えて、火精霊が言う。

「よし、魔剣の魔力を上げよう。しかし、契約で減ったしドラゴン狩りに行くか」

クリスの思考が火精霊を中心に回りだす。

「ドラゴンなら帝国のあの山にまだ養殖場が残ってたっけか。しかし、マークされてるとなるとあそこまで行くのは面倒だなぁ。そもそもあいつらが・・・」

ぶつぶつと、娘への贈り物のために思案する父親。

ちなみに、帝国の主戦力といってもいいのがドラゴン騎兵である。

グルーモスとオーカスの国境戦争で、グルーモスに帝国がドラゴンを貸し出した事によりオーカスの被害が増大し、オーカスはギルドに依頼しそのドラゴンを討伐する。

次に、下位とはいえ人に飼われる同種を恥じと思っていた高位のドラゴンに交渉を持ちかけ、竜人の取り成しもあって、オーカスはそ

の助力を得て、新しいギルドのドラゴンキラーに帝国のドラゴン養殖場を襲撃する依頼を出す。

帝国の養殖場のいくつかが壊滅したが、ドラゴンに襲われたインパクトでギルドのドラゴンキラーは目立たず仕事ができ、帝国も疑わしいとしてマークだけはしているものの、手配書などは出回っていない。

「主、やっと父親としての自覚が芽生えたようで嬉しいです、あと三人は欲しいですね」

名前を考えていたフウリがクリスたちの方を向く。

「とりあえず魔剣の魔力を入れても、人型になってる精霊を維持するのはつらいので一人でいいです」

「甲斐性なしですね主。世界征服できるくらい子供がほしいとか言えないのですか？」

「どんだけ甲斐性あるんだよお前の中の俺は！」

「ふむ、良く考えたら、すでに世界征服できますね。よかったですね、主。私の中の主は等身大ですよ？」

フウリは少し考えて頷く。

「よくないだろが！！物騒すぎるわ！世界征服なんてしないからな！」

クリスが叫ぶ。

「ふむ。ところで名前なんですが、いいのを思いついたので、それにしたいのですがいいですか？」

フウリは頷くと、話題を変える。

「さらっと流された・・・名前はぶっ飛んだのじゃなきゃ、フウリの好きでいいよ！」

「分かりました。それでは、今日からあなたの名前は　「フィリス」です」

フウリは火精霊の前にしゃがむと目線を合わせる。

「わたし　の　なまえ　ふぃりす　？」

火精霊はたどたどしく聞き返す。

「はい、そうです、フィリス。私たちの可愛い娘です」

フウリは愛おしそうに火精霊の名前を口にする。

「うん　わかった　ふぃりす」

フィリスはうなずいて、口の中で自分の名前を暗唱する。

「ちなみにどんな意味があるんだ？」

安全第一を唱えていたクリスがフウリに聞く。

「さすが主、いいことを聞いてくれました、花丸をあげますよ。「フィ」は古代の言葉で「照らすもの」という意味があり、「リス」は主の名前から頂きました」

嬉しそうにフウリが説明する。

「おお！俺の名前使ってくれるなんて感動した！」

「はい。見た目はどうやっても主には似ないので、せめて名前だけでもと思いまして」

「感動を返してくれ！」

「うるさい主ですね。フィリス、ああなってはいけませんよ？」

「うん　うるさく　しない　」

フィリスはこくりと頷く。

「よしよし、えらいですねー」

フウリがフィリスの頭を撫でる。

「おかしい、何かがおかしいんだが！」

「はいはい、主。今日は宴もあるんでしょう？結構時間使いましたから、そろそろ戻りましょう。フィリスもお披露目しないといけませんね」

「くっ。俺も何か父親らしいことをしないといけない気がする！よし、手を繋ぐぞフィリス！」

「て　つなぐ　？」

「そうそう、お手を拝借してっと」

フィリスの左手を取るクリス。

「て　あったかい」

繋がれた手を見てフィリスが呟く。

「それじゃあ、私とも繋ぎましょうね」

「ん　」

フウリがフィリスの右手を取る。

仲良く手を繋いで森を歩くその姿は、若い夫婦とその子にしか見えなかった。

第十五話「魔法使いと精霊の評判」

「よーし、皆の衆、飲み物は行き渡ったかの」

村の広場の中央で、大きな焚き火を囲んで皆が村長の言葉に耳を傾ける。

クリスとフウリ、フィリスは村長と向かって立っている。

「それでは。森に巣くっていた強大な魔物を倒していただいた精霊さま方に感謝致します。ありがとうございました」

村長に続いて皆が口々に感謝を述べる。

やがて、それが静まると、また村長が話だす。

「そして、その精霊さま方の祝福を運んでくれたクリスにも感謝を！」

こちらは罵声混じりの感謝が飛ぶ。

「それでは、精霊さまと森の恵みに感謝し、乾杯！」

村長の音頭で皆がコップを掲げ、中身をあおる。

そこらかしこでおいしそうな匂いと共に料理が振舞われる。

そして、精霊二人を見た村人から様々な反応が飛び交う。

フウリを見た村人たちは・・・

「くそ！まじで美人じゃねぇか！」

「あの容姿で家庭的・・・！圧倒的じゃないか！」

「おい、なんだあのスタイルは。人間とは思えない」

「精霊さまだろうが！しかしすごいな・・・」

「あの容姿で罵倒してくれるのか。天国じゃね？」

「それがクリスと契約してるだと・・・」

「これは制裁を加えないといけないな、色本の件を含めて」

「我ら、トリエ村独身貴族を敵に回したこと、後悔させてやる」

「着てる服も綺麗よねぇ」

「肌も真っ白、すべすべしてそう」

「髪の毛も真っ白で長くて綺麗だわ」

「スタイルも良すぎ。何か秘訣とかあるのかしら」

「私、さっき目が合ったわ！きっと今夜呼ばれるわ！」

「それは私を見てたのよ！お風呂に入っておかないと！」

「っていうか、目も綺麗ね。水色できりっとしてて」

「お姉さまって呼びたいわ」

そして、フィリスを見た村人たちは・・・

「お父さんって呼ばれたい！」

「俺はお兄ちゃんがいいな」

「年齢考えろ。わしはおじいちゃんだな」

「あれが・・・天使か・・・」

「おい、精霊さまだってさっきから言ってるだろうが！しかし天使と言われても違和感がないな」

「あの子もクリスと契約してるんだろ・・・くそ！俺も魔法使いになる！」

「お前二十五だろ？あと五年辛抱しろ。しかし、これはトリエ村お兄ちゃんと呼ばれ隊が制裁行動に移らないといけなくなるな」

「クリスお前はいい奴だったよ、しかしお前の精霊がいけない。可愛すぎる」

「なにあの子！お人形さんみたい！」

「髪の毛真っ赤でふわふわしてるわ、顔を埋めたい」

「肌も白くて、もちもちしてそう！」

「目も真ん丸よ。可愛いわぁ」

「こっちをじぃっと見てたわ。私のことが気になるのかしら？」

「後ろの焚き火を見てたのよ。火の精霊なんて、どんな怖いものかと思ったらあんな可愛いなんて、お持ち帰りしたいわ」

「服も似合ってるわねぇ、どこか貴族のお嬢様みたい」

「貴族さまなんて見たこと無いけどね。精霊さまのほうが百倍可愛いと思うわ！」

等々、皆ヒートアップしていく。

しかし、当の本人たちは我冠せずと料理を食べている。

フィリスはクリスの膝の上で、出された料理を口一杯に頬張っている。

左隣では、フウリがクリスに酒を注いでる。

右隣では、リリィがクリスを質問責めにしている。

「結局、五年も何してたの？」

リリィは噂でクリスの話を聞いたのだが、木の棒を振りまして年下の子供たちと遊んでいたクリスが印象的で、どうにも現実感が沸かず、同じ質問を何回か繰り返していた。

「おうとで、まほうの、おべんきょうを、してたんだよ、ふうりも、そのときに、けいやくしたんだ」

そんなリリィにクリスがゆっくりと答える。

「な、なんでそんな喋り方なの！？」

「なんでって、それはもちろんリリィにも理解ができるようにだよ？」

さも当然のようにクリスが言う。

「普通の喋り方でも理解できるよ！？」

「じゃあ、何度も同じ質問をするな」

呆れたようにクリスは言う。

「だ、だって！あのクリス君だよ！？村で一番訳の分からない行動をしてたクリス君だよ！？それが、それが！うがー！」

何かに耐えがたかったかのように叫ぶリリィ。

「お前のほうが訳分からんぞ？」

「にんげんの　むすめ　うるさくしちゃ　だめよ　？」

クリスのツッコミに続いて、膝の上からフィリスのお叱りが入る。

「いい子ですね、フィリス。言われたことをちゃんと守れて、他人にも注意できるなんて。こっちのサラダもおいしいですよ」

フウリがフィリスを褒めつつ、サラダをつぎわける。

「ね、ねぇ、クリス君。フィリスちゃんっていくつなのかな？なんか娘って呼ばれると違和感が・・・」

リリィはそんな二人を暫く見つめてクリスに尋ねる。

「ん？精霊に時間の感覚は無いらしいからなぁ。年なんて数えないだろ。まぁここまで格が高いと、千年は生きてるんじゃないかね？」

クリスは、膝の上のフィリスがこぼしたサラダをつまみながら答える。

「せ、千年！？じゃ、じゃあフウリちゃんは！？」

驚愕の眼差しでクリスに質問するリリィ。

「ああ。こいつは・・・」

クリスが話そうとしたところでストップがかかる。

「主はいつから女性の年齢をぺらぺらしゃべるようになったんですか？」

すさまじいプレッシャーと共にクリスに言い放つフウリ。

「すみませんでした、フウリさま。フウリさまはいつまでもお若く、美しい存在であります。それ以外のことは存在いたしません。精霊一の美女であると不肖この私、クリスは確信しております。まさに天使もかくやという清廉さでございます！」

クリスは一瞬固まると、即座にフウリに謝る。

「ふむ。そんなこと言われると照れますね。主、杯が空いてるじゃないですか。どうぞ一杯」

クリスの言葉を聞くと、嬉しそうに酌をするフウリ。

「お、ありがと。しかしフウリも大分人間らしいこと言うようになったよね」

注がれたお酒を飲みつつクリスはしみじみ言う。

「主が人間の中では浮いていたので、せめて私くらいは仲良くしてあげなくてはと思いまして、勉強したんですよ」

フウリがフィリスの口を拭きながら言う。

「クリス君のことを大事に思ってるんだねぇ。っていうか、クリス君はやっぱり王都でも浮いてたの？」

いつもならクリスが叫ぶところだが、リリィが即座に反応したため口を挟めなくなる。

「ええ、それはもう。主ときたら魔法使いの卵なのに、剣がつよすぎて、剣の弟子までいたんですよ」

「剣の弟子・・・クリス君の弟子っていうことは、やっぱ突き抜けてた？」

「いえ、それが礼儀正しい子でしたね。今は騎士になっているはずです」

「あはは、騎士を剣の弟子にする魔法使いってどうなのよ」

「主くらいなものでしょうねぇ。あとは他にも・・・」

・・・・・

口を挟む隙が無くなり、言われるがままにして、一度夜空を見上げ、結局膝の上の娘の世話に専念する魔法使いであった。

番外一「魔法使いと傭兵団」（前書き）

感想欄見て、序盤で多そうだなぁと思ったのを、動画見つつ書いてたらできたので置いておきます。おっさんいいよおっさん。

番外一「魔法使いと傭兵団」

その日、クリスは魔法学院の寮の部屋で目が覚める。

昨日やっと地獄の追試験が終わり、部屋に戻ったクリスは夕方に寝てしまったので、まだ早朝だというのに二度寝をする素振りを見せない。

隣に寝てるフウリをおこさないように起きようとするクリス。

「おはようございます、主。今日は早起きですね、槍でも降らせて王都を壊滅に追い込むつもりですね、さすが主です」

クリスが起き上がる前にベッドから起き上がったフウリがクリスに向かって挨拶する。

「おはよう、フウリ。いつも思うんだけどフウリは寝てるの？あとそんな大規模魔法、俺の寝起きで使えたら不便しないんだけどね」

クリスはいつも自分が起きる直前に起き上がるフウリに疑問を投げかける。

「私は出来た精霊なので主より遅くねて主より早く起きてるんですよ。あと、主がご希望でしたら、槍ではなく刃なら無数に降らすことができますが、どうしますか？主が早く起きたら王都全体に、主が遅く起きたら主の上でいいですか？」

フウリが首をかしげたずねる。

「おいいいい！俺の寝起きにやばいもの付属させないでぇぇ！どっちにしろ俺死ぬじゃんそれ！」

クリスが絶叫する。

「ふむ、いい案だと思ったんですが。まぁ折角早く起きたのですし、朝食を取ってギルドのほうへ行きませんか？」

「お、いいね。久々に依頼を受けに行こうか！やっと長期休暇だし」

元気に腕を振り回してクリスが言う。

「そうですね、主は皆に遅れて休暇ですからね」

「はい、すみません。テスト勉強教えてもらって助かりました」

「それでは朝食を取ったら行きましょうか。市場なら何か食べるものもあるでしょう」

「へーい」

支度をして二人は連れ立って市場に向かった。

「クリィィィス！待ってたぞ！」

「あ、やべ。師匠に用事があったんだ」

ギルドを入った瞬間に首に腕を回してくる竜人に、確実に厄介事が待っていると思ったクリスは、ありもしない用事を思いだす。

「おいおいおい！このベアードさまが直々に指名してやるんだ、有難くついて来い！」

「おいまて、おっさん。指名ってなんだ、おい引きずるな、待てって！本当にちょっとまって！た、助けてー！攫われるぅぅ！」

クリスがギルド職員に手を伸ばして、恥も外聞もなく助けを求めるも、職員は手を合わせて祈るだけだった。

そして、馬車に詰め込まれるクリス。

馬車の中には精鋭の傭兵団が待ち構えていた。

「よっし、ほら最後の一人だ。もう少し遅くなると思ったんだがな。こいつめ、ちゃんと早くにきやがった。さすが俺の一番弟子だな」

「お、クリスか。おせーぞ。団長待たせるなんて、いい身分になったもんだな！」

「ったく、お前はこのギバル傭兵団員としての心構えがなってないな」

「帰ったら一から叩きなおすか」

好き勝手に言う馬車の住人たち。

ギバル傭兵団員は全員が竜人という恐ろしく精強な傭兵団だ。

団長のベアードはその体躯に見合った豪腕の持ち主で、身の丈以上の大剣を自由自在に振り回す。

クリスは何度かギルドの依頼でこの傭兵団と組んでいて、何故かベアードや団員たちの覚えがよく、指名で依頼を受けることも多い。

「おい、おっさん！俺は傭兵団と仕事なんて一切入れてないはずなんだけど！っていうか弟子でもなければ傭兵になった覚えもねぇ！あんたら本当に好き勝手だな！」

やっと自由になった体を振り回してクリスは叫ぶ。

「おお？フウリの嬢ちゃんに言ったはずなんだけどな」

「ええ、確かに聞きました。なので朝からギルドに誘導したのですよ主。ちなみに私が夕飯を買って帰るときにベアードから依頼を聞いたのですが、帰ったら主は寝ていたので折角ですので、長期休暇初日のサプライズイベントにしてみました」

姿を消していたフウリがすっと出てきて言う。

「おう、そういうわけだから行くぞ」

クリスが口をパクパクしてる間に馬車が走りだす。

「まぁそんな訳で依頼は簡単だ。国境にドラゴンが出た、お国のドラゴンキラーの騎士さま方は体調が悪いのかドラゴンを倒せない、だから俺たちが倒す」

馬車の中でクリスに説明するベアード。

「体調がわるいなら仕方ねぇな」

「おう、戦場の水が合わなかったんだろ」

「温室育ちどもが」

「騎士団なんて名前だけじゃねえか」

騒ぐ団員。

「うるせぇぞ！どうせ帝国の生ぬるいドラゴンもどきだろ。こっちは派手に稼がせてもらえて万々歳じゃねぇか！」

そういってクリスに向き直るベアード。

「というわけだから。そろそろドラゴンキラーの一つでも貰っとこうぜ、クリス！」

クリスの肩に手を置き、楽しそうに言うベアード。

「うっさいわ！脳筋にもほどがあるだろ！？ドラゴンだよ！？くさ

っても魔物の王者だよ!?あんたら蜥蜴とは違うんだよ!あいつら羽もはえてるしでけぇし!」

ベアードの手を振りほどき身振り手ぶりで喚くクリス。

「蜥蜴だとぉ!いい度胸だクリス!俺らと、あの羽がついた蜥蜴どもの違いを見せてやるぜぇ?なぁおい!」

ベアードは団員に向き直り同意を求める。

「おう!あんな、ちょっと火が吐けるからって調子のってる蜥蜴は、切り刻んでやるよ!」

「飛んで逃げれねぇように、しっかり羽も切り落としてな!!」

笑い声が馬車を支配し、進んでいく。

「だめだ、この脳筋ども・・・どうにもできねぇ」

クリスは隅で頭を抱えるのだった。

結局それから馬車で数日で、国境の戦場前につく。

ベアードは軍のお偉いさんのところへ顔を出しに行き、配置が教えられる。

「軍のやつらは、敵の増援をドラゴンどもと合流する前に叩く。俺らの役割はドラゴンの排除だ。戦場に出てきた温室育ちの蜥蜴ども

を食らいつくすぞ！」

「「「うおおおおお！！」」」

「くそっ、脳筋が！！」

皆が気炎を上げ移動を開始する。

そして国境の前線につくと、数体のドラゴンが舞っているのが見えてくる。

「おいおい、やっぱでかいって。俺丸呑みされちゃうって！」

クリスがドラゴンを見て及び腰になる。

「おいおいクリス、ここまで来てなんて様だよ！」

団員がクリスをちゃかす。

「黙れ脳筋ども！！俺は強制参加だぞ！！」

その様子を見ていたベアードが号令を掛ける。

「よし、お前ら！あっちはドラゴンはいるがまだ騎兵は乗ってねぇ。帝国も騎兵の貸し出しまではしてねぇみてぇだな。連戦で護衛の数も少ねぇ。フウリの嬢ちゃんが、風であの蜥蜴どもを叩き落してく

れる。奇襲を掛けて一気に叩くぞ！！」

そう言うとベアードたちは恐ろしい速さで戦場を駆けていく。

クリスもフウリに魔法を掛けてもらいベアードに追いつく。

「クリスは俺について来い！」

ベアードは並走するクリスを一瞥して言う。

「へいへい。お供しますよおっさん！」

ぐんぐんスピードを上げる一団。

途中で帝国の警備が気づくも、時既に遅し。

叩き落とされたドラゴンに向かって剣を振り上げる一団。

護衛が必死に防ごうとするも、それごと食いちぎる勢いで攻撃を仕掛ける傭兵たち。

と、そこでドラゴンが一匹だけ走って逃げる。

「おいおい、ドラゴンってあんな早く地べた走るんだなぁ」

クリスが護衛と切りあいつつ、走るドラゴンを眺めて口を開く。

「暢気に言ってねぇで、あれ切ってこい！」

ベアードが走るドラゴンをあごでしゃくって言う。

「くそっ！俺は団員じゃねぇぞっと！」

クリスは叫びながら護衛を切り倒し、走るドラゴンに向かって行く。

「フウリ！足止めできない！？」

走りながら聞くクリス。

「きついですね、ドラゴンが飛べないように上空の空気を乱してますので」

「了解。んじゃ急ぐかね！」

魔力を使い一気に加速するクリス。

やがてドラゴンに追いつくと、勢いよく羽を切りつける。

「ぐぉぉぉぉぉ」

ドラゴンが雄叫びを上げて倒れる。

そこで、前方にグルーモスの軍隊がこちらに向かってきているのが見える。

「おいおい、冗談じゃねぇぞ！うちの国の軍は足止めもできないのかぁぁ」

「主、ドラゴンはどれも飛べる状態ではないようなので、上空の魔法を解いて、あっちを私が足止めしますのでドラゴンを頼みます」

言うが早いか、軍隊のほうへ飛ぶフウリ。

クリスはドラゴンに立ち向かう。

「この！蜥蜴が！！倒れろやあああああ」

ドラゴンは尻尾を振り回し攻撃するが、クリスはそれを巧みに避けて切りつけていく。

「硬すぎるだろ！！」

クリスの剣は鱗に阻まれ、かすり傷しかつけれない。

「このぉぉぉぉ！」

クリスが渾身の力で魔剣を振るうと、さっきまで鱗に阻まれ致命傷を与えれなかった剣が尻尾を両断する。

これはいけると思ったクリスは、頭をかち割ろうと剣を振り上げ飛び上がり、力いっぱい振り下ろす。

すると、頭どころか胴体まで真っ二つになって、ついでに魔剣の斬撃が敵の増援の手前まで地面を抉る。

一瞬戦場が静寂に包まれる。

次の瞬間には、敵の増援は壊走していくのだった。

遅れてきたオーカスの軍に後始末を任せて引き上げる傭兵団。
軍の陣地近くに陣取り、宴会を始める。
「我が弟子、クリスのドラゴンキラー獲得を祝って、乾杯！！」
「「「乾杯！！」」」
団員たちが密かに持ち帰ったドラゴンの肉が焼かれる中、一人いじけているクリス。
「くそっ、脳筋どもにはめられた挙句、魔法使いがドラゴンキラーとか、また学院で浮いちまう！！」
「主、もう手遅れですので、お肉を食べましょう。おいしいですよ、主が一刀両断にしたドラゴンの肉。あそこまで綺麗に切れていたのは無かったので、皆あれから肉を剥いでましたから」
「うおおおおお！やけ食いじゃあああ！肉持って来い肉ぅぅぅ！」
「おお！クリスが復活したぞ！」
「おら、酒も飲め！」
「おいその肉まだ焼けてねぇぞ、こっち食え！」

「ったく、野菜も食えよ」

「祝いにドラゴンの鱗、何枚か持ってきてやったから」

「あ、俺ももってきたわ」

「俺心臓剥いできたぞ」

「養殖物の心臓はどうもなぁ」

「肉は結構うまいのにな」

「っていうか、団長なんてクリスのために目玉くり抜いてたぜ」

「うへぇ。俺爪な」

錬金の材料になりそうなものをクリスの前につんでいく団員たち。

その日は遅くまで宴会が続き、翌朝に王都へと戻る傭兵団。

「くそ、おっさんの依頼は金輪際うけねぇし！！」

爪やら鱗やらがはみ出てる大きな袋を抱えて膨れっ面のクリス。

「おいおい、そう言うなよ。今回も生き残ったじゃねぇか」

しみじみとベアードが言う。

「おかしいだろうが！！学生が町で拉致されて気づいたら生き死に掛けて戦場駆けずり回ってドラゴン退治とか普通ないよ！？」

「がっはっは。いい経験できただろ！！また行こうな！」

「そのピクニックにでも誘うような軽いノリをやめろおおおおおおお」

馬車の中で魔法使いの魂の叫びがこだました。

番外一「魔法使いと傭兵団」（後書き）

最終結果
複数書かれてた方のは、一番上のを集計しました。
ドラゴン　３票
師匠　　３票
フウリ　２票
リリィ　１票
王様　　１票
木の棒　１票
闇討ち　１票
トライン姫１票
貴族　　１票
弟子　　１票
父　　１票

でした。

明日は師匠を。

番外二「魔法使いの相棒」（前書き）

仕込んでおいたのさ！
アクセス解析なるものを見たらお昼時にアクセスが跳ね上がるようなので、書き貯めていたやつを予約投稿してみました。やっぱり昼休みに携帯で読みますよね！
少しでも楽しんでいただければ嬉しいですが、この話はいつもとノリが違うので注意してください。

番外二「魔法使いの相棒」

遥か昔、世界は魔法技術の発達により栄華を極めていた。

ある大陸で、人々は戦争を繰り返し、やがて大きな一つの国家となった。

しかし彼らは、それだけでは満たされなかった。

別大陸に侵攻するための、更に強大な力を求めた。

そしてその結果、世界を揺るがす出来事が起こった。

彼らは力を求めるあまり、魔界との間に扉を作り、それを開いたのである。

出てきた悪魔たちは、力に目の眩んだ人間を狡猾に騙し、世界での自由を手に入れ、人々を攻撃した。

悪魔は魔力食いを作り、大陸のあらゆる生物の魔力を集め、その力で魔物を創造した。

悪魔と魔物によって大陸は滅ぼされた。

そして、悪魔と魔物は別大陸に侵攻した。

別大陸では、悪魔召喚の地から逃げ延びてきた人々によってその地で起きたことが伝えられ、対策が練られた。

天界への門を開き、天使を呼び出したのである。

天使は人々の願いを聞きいれ、力を貸した。

天使は精霊を創造し、魔物に対抗した。

天使と悪魔、精霊と魔物の力は拮抗した。

しかし、魔物の中の知性の高い種族が、悪魔を裏切った事により拮抗は破られた。

とうとう、天使と精霊は悪魔と魔物を退けたのである。

しかし、まだ悪魔召喚の地には魔界との扉が存在していた。

悪魔との戦いで疲弊した天使には、扉を破壊するだけの力が残っていなかった。

人間、精霊も同様にほとんど力が残っていなかった。

その状況を打開するために、人間は魔界の扉の技術を応用し、別の世界から力を持った人間を召喚する扉を創り上げた。

そして扉は開いた。

扉のある神殿の中央には、奇抜な格好をした人間の女が立っていた。

短い腰巻の割に、上はしっかりとした出来の服を着、髪と目が真っ黒な特徴的な女だった。

女は最初、混乱した様子で喚き散らした。

しかし、人間の王自らの説得と説明によって状況を理解すると、元の世界に自分を返すことを条件に扉を破壊することを承諾する。

女のために人間の王は、天使から与えられた知識と、それまでの魔法技術を融合させ、聖剣を作り渡した。

女は、恐ろしいほどの魔力を有し、四大精霊と契約し、聖剣と共に悪魔召喚の地へと旅立った。

かの地で女は、密かに生き残った人間たちや、知性のある魔物、また不思議な術を使う男の力を借り、とうとう城の中にある魔界の扉の前まで辿り着いた。

そこには、初めて世界に渡った悪魔、魔王がいた。

魔王と女の戦いは苛烈を極めた。

精霊たちの力もつきかけ、女もまた魔力も体力も使い果たそうとしていた。

女はこのままでは勝て無いことを悟り、最後の賭けにでた。

自分目掛けて聖剣を振り下ろたのである。

女は王から聖剣を渡されたとき、聖剣は切ったモノの力を得ることができる、と聞いていた。

自分がこの世界を救うことができる力があるのなら、聖剣にそれを

吸わせれば魔王を倒せると考えたのである。

そして聖剣は女に突き刺さり、光を放ち女を飲み込んだ。

女の意図を正確に読み取った風の精霊は、透かさず風を操り聖剣を魔王に突き立てた。

魔王は女の前に敗れ去った。

残った門を、精霊たちは自らの身で塞いだ。

風の精霊だけは、このことを伝えるために聖剣と共に、女を召喚した大陸へと戻った。

そして、風の精霊は事のあらましを伝えると、女の魂までも食らった聖剣を王に預け、彼方へと飛び去って行った。

王は女の死を悲しみ、聖剣、魔界の扉、天界の扉、異世界の扉に関する全ての知識を封印し、この悲劇が二度と起こらないようにした。

女は勇者と呼ばれ、その偉業は長く語り継がれることになる。

聖剣は、長くに渡り力を封印された状態で、代々の王に受け継がれていったが、やがて歴史の闇へと消えていった。

そうして、あるときは屋敷に飾られ、あるときは魔物を切り、あるときは人を切った聖剣は、ボロボロになって武器屋の樽に入れられていた。

その聖剣を一人の男が掴みあげた。

男は嬉しそうに店主にお金を払うと、聖剣を貴族の屋敷へと持っていった。

その後、男はボロボロだった聖剣を綺麗にし、いつも腰にさげるようになった。

そして聖剣はまた様々なものを切った。

ゴブリンやオーク、ドラゴンや亡霊、長い時を経て生き残っていた悪魔も切った。

聖剣に意思はない、しかし女の魂だけはずっと残っていた。

ただ、絶望の中に希望を見出した人々を守りたかった勇者の魂だけが。

その魂が、今の聖剣の主にかすかに反応するのだった。

「ん？なんか魔剣から聞こえた気がする」

「何を言ってるんですか、主。魔剣はあくまで魔剣です、しゃべるわけ無いでしょう？いくら友人が少なく寂しいからと言って、魔剣にまで期待するのはどうかと思います。頑張ってもしゃべりだしませんよ？私との会話で我慢してください」

「と、友達くらいるよ!?まぁフウリとの会話は楽しいけど。そうじゃなくてだな、なんかこう語りかけてくるような、そうでないような」

「主、何度も言いますが、それは幻覚、幻聴、幻です。気のせいです。もし本当だとしても、それは呪いというものではありませんか？だとしたらあまり寄らないでくださいね、こっちにうつりそうです。あと、私も主との会話は好きですよ」

「の、呪いなんてあるのか!?師匠に見てもらいに行こう!あと、会話はもう少しお手柔らかにお願いします」

「ふむ、お師匠さまなら何か分かるかもしれませんね。まぁ十中八九、主の寂しさからくる病だとおもいますが。おっと、柔らかくでしたね。主、可哀想に、頭を患ってしまって・・・大丈夫、私がついてますからね。いざとなれば主の頭の中身を一回綺麗にしますので」

「やさしいけど、根本的に間違ってる!そしてさらりと怖いこと言うな!あとその慈愛に満ちた視線やめて!」

「わがままな主ですね、とりあえず師匠の家に行きますよ」

「はい・・・」

とぼとぼと歩きだす今の主の腰で、聖剣がかすかに震えるのだった。

番外二「魔法使いの相棒」（後書き）

ということで、これが真ヒロインさ！永遠に未実装ですが。
ツンギレ系ヒロインです、ツンツン突いて、ばっさりキレます。
本編でも出所不明で変な力を持ってるミステリアスウェポンであり、
お役立ちアイテム兼主人公の主な攻撃手段として活躍してるのに、
あまりの人気のなさに咽び泣いて、書き貯めてたやつから引っ張り
出しました。

番外三「魔法使いの師匠」（前書き）

アンケートでドラゴンと並んで多かった師匠の話です。

番外三「魔法使いの師匠」

日も暮れてきて、オーカス魔法学院の教師にして古代魔法の使い手、遺跡のスペシャリストであるフェンリー・アスクルクは、王都近郊の遺跡の調査をして家に帰る途中だった。

彼女の家は、代々宮廷魔法院に勤める貴族の家柄で、実際彼女の父や兄も勤めている。

しかし、彼女は遺跡をこよなく愛し、両親の持ってくる縁談の話をことごとく断って、学院で教師をしつつ、遺跡や古代魔法の研究をする毎日を送っている。

本当にたまにある、断れないお見合いには行くのだが、相手が彼女の容姿を見て戸惑うことが多い。

いき遅れのおばさんとの見合いかと思ったら、百四十センチに届かない身長、メガネが似合う少女がそこにいるのだから、当然の反応である。

見た目は若い、というよりも幼いと表現できるほどなので、見合いで気に入られて結婚なんて話もありそうなのだが、如何せんフェンリーは見合いの場にありがちな趣味の話題への食いつきが半端ないので、相手を遺跡愛でノックアウトしてしまい、結果見合いの戦績に白星がつく事はない。

フェンリーにしてみれば、実家が断り切れない見合いだから受けるだけで、向こうから断ってくれるなら大助かりというふうにしか思っていないのだが、親はいい加減結婚してほしいと思っている。

「ふう、少し遅くなってしまいました。まさか空に浮かぶ島の記述があるなんて・・・」

ぶつぶつと今日の成果を独り言でまとめていくフェンリー。

前も見ずに歩いていて、何かを踏みつける。

「ぐえ」

フェンリーの足元から聞こえる奇声。

「ぐえ?」

フェンリーは首をかしげて足を上げると、そこには木の棒を持った少年が倒れていた。

「え!?い、行き倒れですか!?大丈夫ですか!?」

フェンリーは膝をついて子供を揺らす。

「お、お、お、お、世界が、ゆ、れ、て、る」

やがてぐったりする少年。

「あああああ、大変です!どうしたら!!」

おろおろするフェンリーだが、少年のお腹から盛大な虫の声が聞こ

え、落ち着いて自分の体を魔力で強化し、少年を家に運ぶことにする。

「ぬぐう、飯の匂いがするぅ」

ゾンビのように、ベッドから這い出て匂いのするほうへ移動する少年。

「ちょ、ちょっと待ってください」

ベッドの脇にいたフェンリーが慌てて止める。

「ぬ、俺に止めを刺した幼女じゃないか！」

少年がフェンリーを見て声を上げる。

「幼女じゃありません！あなたよりずっと年上ですよ！」

フェンリーが怒る。

「じゃあいくつだよ！」

少年もむきになって聞く。

「女性に年齢を聞くなと習わなかったのですか？」

フェンリーが嗜めるように言い放つ。

「なんという理不尽・・・圧倒的理不尽」

少年は俯いてつぶやく。

フェンリーは、メイドに用意させたご飯を少年に与え、落ち着いたところで自己紹介と事情を聞いた。

「クリス君は、騎士団に入るために王都まで来たんですね」

思案顔のフェンリー。

「おうとも！トリエ村騎士団の団長さまだからな！王都の騎士団にもきっと入れる！」

自信に満ちた顔でクリスが言う。

「と、トリエ村から一人で来たんですか！？道中魔物はどうしたんですか！？」

驚愕の眼差しをクリスに向けるフェンリー。

実際は王都から周りの村々までしっかり街道が整備されていて、危険な魔物は排除されるのだが、繁殖力の高いゴブリンなどは、定期的に駆除してもすぐに沸いてしまうので、子供一人で歩くには危険すぎるのだ。

「この聖剣があれば魔物なんて一発さ！」

そんな驚愕を他所に、木の棒を掲げ聖剣と言ってのけるクリス。

所々魔物の血らしき跡がついていて、フェンリーもクリスを運ぶときに放置しようと思ったのだが、意識の無いクリスが頑なに離さないので仕方なく一緒に持ってきていた。

「ついでに弓もあるし」

こっちは作りのいい弓なのだが、クリスにとっては聖剣のおまけのようだ。

「いやいや、それだけで子供が一人で街道を・・・ん・・・？」

クリスをじっくり見ていたフェンリーが、おもむろに立ち上がると更に近くで観察する。

「あれ？君魔法使えるんですか？」

微弱な魔力で体を強化しているように見えなくも無いクリスに質問するフェンリー。

「え？魔法？」

フェンリーの言葉に首をかしげるクリス。

それに対して、研究者の魂に火がついたのか激しく質問を繰り返すフェンリー。

結論を言うと、クリスは無意識に魔力による身体の強化を使っているようだった。

普通はありえないことなのだが、クリスが嘘を言ってるようには見えないフェンリーは、珍しく強引に自分を納得させる。

そもそも、そんな微弱な魔力での強化だけで、子供が王都まで魔物を倒して歩いてくるなんて、到底無理なのだ。

クリスに、何か言いようの無い理不尽なものを感じ取ったフェンリーは研究者魂を引っ込める。

しかし、そんな理不尽なものを感じる少年に少しやり返してやりたいと思ったフェンリーは、自分がおもっているより強烈な一撃を少年に見舞った。

「知ってましたか？騎士団って、貴族の出じゃないとよっぽどのことが無い限り入れませんよ？」

実際、平民で入ろうとすれば、戦場で目覚しい功績を上げるか、それこそドラゴンを倒せるほどの実力がいる。

天使のような笑顔で言うフェンリーを見て、一瞬目を見開き、次いで呆然とフェンリーの顔を見るクリス。

さすがに可哀想になったフェンリーはフォローをするも、クリスが再起動する様子を見せない。

どうも、クリスにはクリスなりの深い事情があるようだと察したフ

エンリー。

それから数時間かけて、やっと動き出したクリスに、フェンリーはあることを心に決める。

「クリス君、折角魔力を無意識にでも使えているのです。魔法使いになってみませんか？私が一からしっかり教えますよ？」

見た目幼女の魔法使いの慈愛に満ちた言葉に、魔法使い未満の少年は、なぜか母を思いだし、泣きながら頷くのであった。

それからというもの、フェンリーの周りはにぎやかになった。

なんせクリスは何をしでかすか分からないびっくり箱のような弟子である。

いろいろな事件を引き起こし、巻き込まれ、中には死ぬんじゃないかと思うことも多々あったのに、そのたびにしっかり生きて、フェンリーに何かしらの研究材料を持ってくるのである。

その後始末はフェンリーに回ってくるのだが、なぜかフェンリーはそれを楽しく処理してることに気づいく。

「子供がいるとこんな感じなのかな」

そう呟き、結婚もいいかもと思うフェンリーだった。

そして、フェンリーに弟子が出来てにぎやかになったところがもう一つある、国の魔法関係機関だ。

そもそも、古代魔法の数少ない使い手でありながら遺跡研究ばかりし、弟子を取らないフェンリー・アスクルクが弟子を取ったのである。

なまじ名門貴族の出であるために、学院も魔法関係者も弟子を取れと言いづらかったので、その弟子取りに喜んだ。

しかし、いざ箱を開けると、その弟子は破天荒すぎた。

あのフェンリー・アスクルクの弟子がよりにもよって冒険者ギルドに出入りする、それだけで関係者は卒倒する光景だ。フェンリーの弟子ならば、ただ粛々と魔法学院に通い、卒業すれば宮廷魔法院にはいれるのだ。それが彼らの弁で言う、二流三流の集うギルドになど出入りするなんて、ということである。

そして、その弟子は遺跡を崩壊させかけたり、崩壊させたり、傭兵紛いの仕事をしたり、あまつさえドラゴンキラーの称号を国から授与されている。ドラゴンの鱗は非常に抗魔力に優れ、人間の魔法ではまず倒せないのにだ、どうやって倒したかなんてのはそれまでの所業で明確である。

明らかに魔法使いとして間違っている、それが国の魔法関係者の結論であった。

どうにかクリスの方向性を修正できないかと魔法関係者は考えた。

しかしクリスは、高位の精霊と契約しており、フェンリーの弟子で

もある、そしてなぜかクリス自身変な人脈を形成しており、手出しができない爆弾と化していた。

もう卒業を待って取り込むしか無い、魔法関係者はそう結論付けた。

そんな爆弾が今日も剣を下げて王都を闊歩する。

「師匠！めずらしい本もってきたよ！」

「あら！ありがとうございます、クリス君。けど、いつも思うのですが貰っていいのですか？」

「なんて言いつつ既に手が伸びている件」

「えへへ。おお！これは面白そうな本ですね！！どこで手に入れたのですか！？」

「連休中に遠出して、そこの行商人から買ったんだ。そのあと聖王国まで行ってたから少し遅くなったけど。安かったから気にしないでいいよ！」

「おおー！ありがとうございます！早速読まさせていただきたいところなんですが・・・聖王国ですか・・・」

「おっと、これからフウリとデートだったんだ」

「あの風精霊さんと仲良くやっているのは良い事ですが、逃げない

でくださいね。聖王国といえば、最近、姫さまに無礼を働いた賊の手配書が回ってるようなのですが、人相書きはありませんでしたが、特徴がクリス君に似ていましてね、身に覚えありませんか？」

「無礼なんて働いてないし！！ただちょっと羽・・・ハッ！」

「ほう？ただちょっと？なんですか？」

「くっ、あばよ師匠！」

「待ちなさーい！！」

王都にじゃれあう師弟の声が響くのだった。

第一章エピローグ

宴が終わり数日がたった。

その数日の間に、クリスの周りではいろいろあった。

宴の後、クリスがフィリスを連れて家に戻ったことで一騒動あった。

「お義母さま、この子は主と私の子供でフィリスと言います。さぁ、フィリス、お婆ちゃんに挨拶しなさい」

フウリがフィリスを促す。

「おばあちゃん　？」

フィリスがマリアンを見、フウリに向き直って聞き返す。

「そうですよ、お父さんのお母さんなんです」

フウリがやさしく教える。

「おばあちゃん　よろしく　おねがいします」

ぺこりとお辞儀付きで挨拶するフィリス。

「か、かわいいわ・・・。何かあったらお婆ちゃんに言うんだよ！」

一瞬で骨抜きにされるマリアン。

「母さんが婆ちゃんってことはジョシュは叔父さんか。しかしそも
そも俺の子供だと、どうしてこうなった・・・」

疑問がぶり返してきたクリス。

ちなみにジョシュは既に酔いつぶれて、兄が部屋に運んだ後である。

酔いつぶれた村人は基本放置なのだが、なんだかんだと弟に弱い兄
である。

「主、何を言っているのですか。この子は主と私の子供です、しっ
かり認めてください、往生際が悪いですよ」

「あんた！こんな可愛い子を前にしてよくそんな事が言えるね！表
出な！再教育だ！」

マリアンとフウリが結託し、クリスを責めたてる。

「おとうさん　ふぃりす　こども　いや　？」

フィリスがただ見上げてくる。

「そんなことあるわけないじゃないか！！お父さんはフィリスの味
方だからね！世界を敵に回してもいいよ！？」

即座に方向転換するクリス。

「さすが主です。家族で新しい世界を作りましょう」

「なんで一度更地にすること前提！？」

「私は綺麗好きなので。しかし、こうなると主のベッドは少し手狭ですね、どうしましょうか」

「綺麗好きが高じて世界を更地にするのはやめてください・・・。ベッドはフウリが浮いて寝ればよくね」

「何馬鹿なこといってるんだい、あんたは。ベッドならウルバのが私の部屋にあるから、持っていってくっ付けな」

マリアンが口を挟む。

「さすが、お義母さまです。早速運ばさせていただきます、主が」

「あはい・・・」

酔っているのか、よろよろとマリアンの部屋に向かうクリスだった。

翌日、叔父さんと言われて苦悩するジョシュの姿があったとか・・・

フィリスはマリアンによく懐き、一緒に寝ることさえある。

そのときは、ベッドが二つあるクリスの部屋では、なぜかベッドの一つが空いているようだ。

ジョシュは畑仕事に精を出し、クリスも手伝おうと思ったのだが、弟の畑を手伝う兄の図を想像し躊躇する。

結局、得意の錬金で村の農具や生活用品などを修理して回ることにするクリス。

村人たちは、ここにきてやっとクリスが魔法使いだということを認識する。

「クリ坊、本当に魔法使えたんだなぁ」

「俺はてっきり嘘かと思ってたぜ」

「っていうかフウリ様とはどういう関係だ!?」

「むしろ、フィリスちゃんを俺に下さいお義父さん!」

回る所々でいろいろ言われて、そのたびに叫ぶクリスが見られた。

子供たちも面白がってクリスの後をついてくるようになり、ついでにと村長に頼まれたクリスが健全な遊びを教えたりしている。

「いいか、的から目を逸らすなよ。しっかり狙いをつけるんだ。一番的に当てた数が多い子には豪華景品があるぞ!」

子供用の弓を作り、皆に扱い方などを教えているクリス。

「子供を物で釣ろうとするなんて、さすが主です。しかし、あの吸血鬼の前例もあります、あまり多用しないほうがいいですよ」

横からフウリが現れる。

「あ、フウリ姉ちゃんだ」

「姉ちゃんも一緒にあそぼー」

「おっぱいさわらせてー」

「俺が一番弓うまいだぜ」

「一本も的に刺さってないくせによく言うな！」

「お前だって刺さって無いだろ！」

「矢ははずしちゃいけないときに当てればいい、そう、意中の女を射止めるときだけな、って父ちゃんが言ってた」

子供たちが騒ぎ出す。

「物で釣るとか人聞きの悪い事言わないでくれる！？少しでもやる気をださせようとしてるだけだし！しかしあのちびっ子吸血鬼はちょっといじめすぎたな、元気にしてるかねぇ。それとおっぱい言ったやつ、後で個別に特訓な。それにお父さんの迷言を暴露した坊主、そっとしておいてやれよ、お父さんもきっと後悔してるからさ・・・」

このように、クリスが無職ライフを堪能する一方で、フウリは村の娘たちとよく話をしていた。

フウリはクリスのせいなのかかなりの水準で世間を把握しているので、娘たちが話を聞きたいとせがむのだ。

流行の服の話をしたり、読み物の話をしたりと、精霊らしからぬ引き出しが多いフウリは、面白おかしく話すのでよく盛り上がっている。

「ところでフウリさんは、クリスのどこが気に入ったの？こう言っちゃなんだけど、変わってるじゃない？彼」

「あら、その変わっているところも魅力的なんですよ。長年生きていると、変わったものに興味がでてくるんです」

「ええ！フウリさん若く見えるのに！」

「あらあら、いけませんよ。年齢は秘密です。それに主はああ見えて結構情熱的なんですよ」

「たとえばたとえば？」

「あれは、パーティーのメンバーが遺跡につくまえに脱落してしまい、主と私だけで遺跡に潜ることになったことがあったのですが、ちょっとしたミスで主が呪いにかかって私との契約が切れそうになったんです。そしたら主ったら、私との契約を維持するために呪われた自分の腕を切り落とそうとしたんですよ」

「きゃぁ！クリス君男前ね！」

「腕が無くなってもフウリさんと一緒にいたかったのねぇ」

フウリがそんな感じで村娘たちと親交を深める中、リリィは森に入った罰としていつも以上の畑仕事をしていた。

「クリス君が帰ってきたのに、ほとんど話す時間がない！フウリちゃんの話も聞きたいのに！うがー！！」

少女の叫びが広い畑に響き渡った。

こうして、魔法使いは故郷に平穏を取り戻し、自分もまたその平穏を楽しんだ。

そう、つかの間の平穏を。

番外四「魔法使いと幼馴染」（前書き）

オチに使ってしまったリリィの株を上げるために。

番外四「魔法使いと幼馴染」

リリィは、子供たちに弓を教えるクリスを見て、昔のことを思い出す。

小さいころ、リリィとクリスは、そこまで仲がいいと言うわけではなかった。

今でこそ、クリスとの仲をしきりに聞いているリリィの両親だったが、昔はいたずらばかりして、騎士になると夢ばかり言っているクリスを、娘にあまり近づけようとしなかったからだ。

リリィも、クリスのことをいつまでもいたずらをしている子供と思っており、そこまで関心も持っていなかった。

そんなリリィがクリスを意識したのは、ある晴れた日のことだった。

リリィは今と変わらずお転婆で、面倒見の良い少女だった。

その日、妹のユリィが風邪をひき、いつもは一人で行くのを禁止されている森へ、りんごを取りにいったのだ。

りんごを取って意気揚々と帰ろうとしたリリィは、茂みから近寄る魔物にようやく気づく。

しかし、気づいたときには魔物はリリィの目前まで迫っていた。

恐怖に目を瞑るリリィ。

そこに風切り音と共に奇声があがる。

「ひゃっはぁ！！今晩の肉ゲットだぜぇ！！」

その奇声の主であるところのクリスは、矢で頭を貫かれた魔物を掴みあげる。

そこで、へたれこんでるリリィを見つける。

「あ、あれ？これ、もしかしてお前の獲物だった！？」

獲物を横取りしたかもと焦るクリス。

しかし、ショックで口からうまく言葉が出ないリリィ。

仕舞いには泣き出してしまう。

「おおい！泣くな！こいつ上げるから！な？」

頭を矢で貫かれた魔物をずずいと差し出すクリス。

それを見てより一層泣きじゃくるリリィ。

まさに阿鼻叫喚の地獄絵図である。

数分後。

なんとか落ち着いたリリィにクリスが話かける。

「だめじゃん、一人で森入ったら」

偉そうにクリスが言う。

「クリス君だって入ってるじゃない！」

真っ赤な目をそのままに反発するリリィ。

「俺はほら、これがあるし」

弓を掲げるクリス。

「けど、大人と一緒じゃないと入っちゃだめなのはクリス君も一緒でしょ」

すぐにリリィがクリスの自信を打ち砕く。

「よ、よし、お互いこのことは内緒にしよう。すぐ森から出よう」

クリスが慌てて言うと、リリィの手を取って歩き出す。

手を繋ぎながら、リリィはいろいろな話をクリスとする。

クリスの話は、いたずらの自慢話が中心だったが、面白おかしく話すクリスにリリィは妙に惹かれてしまった。

結局、帰ってから二人は、それぞれ手に持っていた物で、どこに行っていたか判明し、こっぴどく叱られることとなる。

それから、クリスとリリィは時々会っては会話するようになる。

しかし、それも長くは続かず、クリスはある日、村を出て行った。

何も相談せずに出て行ったクリスに最初腹が立ったリリィだが、段々心配になってくる。

その心配も過ぎると、あのクリスだしそのうちひょっこり帰ってくるだろうという、妙な信頼がリリィの中で生まれた。

それからリリィは、クリスの手下だった子供たちの面倒を良く見るようになる。

「リリィ姉ちゃん、よくこっちくるけど友達いないの？」

「しかたないなぁ、リリィ姉ちゃんは。ほらりんごあげるよ」

「おい、リリィ姉ちゃん、俺たちはトリエ村騎士団なんだぜ。カッコイイだろ」

「将来お嫁さんにしてあげてもいいよ？」

「スカートめくっていい？」

「姉ちゃん、そっちはあぶないって。初代団長が罠放置していったから」

「おい、言ってる傍から姉ちゃんが罠にかかった！」

「なんという一本釣り」

「スカートをめくる前に姉ちゃんが自ら逆さづりだと・・・」

「サービス精神旺盛すぎる」

「おい馬鹿いってないで、リリィ姉ちゃん下ろさないと」

「あぶなっ！姉ちゃん暴れるなって！」

どっちが面倒を見てるかわからないような関係が結構続いた。

それでも、年下の面倒を健気に見るリリィに、段々村の男連中は魅了されていく。

そして、面倒を見られた子供たちも惚れていく。

ここ最近の、トリエ村お嫁にしたい女性ランキングと初恋の人ランキングで堂々一位を飾っている。

ちなみに村長の息子調べである。

そんなリリィは、男連中の熱い視線に気づくことなく、今日も畑仕事に精を出して、帰りに見かけた森に行く子供たちを注意しようと

追って行く・・・・

番外五「魔法使いと傭兵の出会い」（前書き）

私の組織票がおっさん枠に注ぎ込まれた結果！
少し違った感じで書いてみました。

番外五「魔法使いと傭兵の出会い」

その日、少し遅くなったが依頼を終えた俺はギルドへ報告し、寮へと帰るところだった。

最近の俺は、錬金にはまりだしてかなり金欠気味で、今日の飯代にも困る様になっていた。

師匠に言えばすぐにでもお小遣いをくれるだろうが、あの幼女師匠にそこまでしてもらうのは、見た目的にも気が引ける。

そもそも、幼女師匠には日々の寮での生活だけなら困らないような額を、援助してもらっている。

これは絶対返そうと思っているのだが、あの師匠がお金をただ返すだけじゃ受け取らないことは目に見えている。

なのであの遺跡マニアの嗜好をくすぐる物品で返していこうと思っている。

お金が無い、師匠に恩を返す、この二つを解決するのにギルドでの仕事はとても有効だと思う。

研究者の依頼で、遺跡に潜って魔物を倒しつつ何か珍しいものでもあれば、交渉次第では貰えたし、勿論給金もでる。

なので、最近は休日になるとほとんどをギルドの依頼でつぶしている。

今回は丁度、国からの遺跡探索の依頼があったのでそれを受けていた。

国からの遺跡探索の依頼は、安全確保、確認が目的なので、遺跡に何か残っていれば持って帰ってもいいという暗黙の了解になっており、俺にしてみればとても有難い依頼である。

休日冒険者の俺がそんな旨い仕事にありつけるのはまれなので、張り切りすぎて予定にない階層まで探索してしまった。

日も落ちてきて、寮の夕飯に時間に間に合うか微妙だったので、ショートカットするつもりでいつもは治安がよさそうじゃないのであまり使わない薄暗い路地裏を足早に歩く。

そこに、やっぱりというか、脇道から出てきたチンピラが三人ほど道を塞いでニヤニヤ笑っているのが見える。

面倒事を起こして学院に知られるのはまずいと思い、もと来た道を戻ろうとする。

しかし、すでに後ろにも二人のチンピラが道を塞いでいるのを見て、どうやってやり過ごそうかと考える。

すると、俺が考えてる間に距離を詰めてきたチンピラの肩を掴むでかい手が目に入る。

「おい、何してんだ?」

低く渋いその声は、さして大きい声でもなかったのにとても耳に残る。

「な、なんだてめぇは！？」

チンピラがうろたえながら答えてるのを見て、度胸があるなと思う。

なぜなら、チンピラの肩を掴んでいたのは竜人だからだ。

俺なら絶対に一目散に逃げ出す、そう思えるほどの迫力を持った竜人だ。

そして、案の定、肩をつかまれたチンピラから異音が俺の耳に聞こえてくる。

あと少しで肩がつぶれそうだ、そう思いながらも竜人から目が離せない俺がいる。

「俺が質問してるんだ、分かるか？」

もの凄い迫力だ。

竜人がチンピラを離すと、すぐに五人のチンピラが逃げ行くのを俺は見送る。

「おう、坊主、大丈夫か？」

こちらを気遣うように竜人は言葉を向けてくる。

「あ、はい、大丈夫です」

圧倒されて敬語になってしまう。

「ならよし！ここら辺はあぶねぇからな、気をつけな！」

「わ、分かりました、それでは失礼します！」

どうみても、あんなチンピラなんて目じゃないほど危ない匂いのする竜人にそんな気を使われると困ってしまう。

さっきのチンピラなら、最悪どうにでもできたが、この竜人だけは絶対に勝て無い、いや死ぬ、そんな確信めいたものが胸中を渦巻いて、俺はお礼も言わずに逃げ出してしまう。

その一週間後、連休を使って依頼をこなすためにギルドへと向かう。

今回は、相当実入りのいい仕事をしないと、過去にないほど金欠になると思う。

なんせ、試験が迫っているので、試験中の休みは勉強しないといけないからだ。

なぜ、あのとき、あの露店であんなものを買ってしまったんだと、自分の浪費癖をあれこれ後悔しつつギルドへ入る。

馴染みになっているギルドのカウンターのお姉さんに、そこらへんの話を踏まえてお涙頂戴、訴えかける。

すると、お姉さんは一ついい仕事があるとカウンターの奥に引っ込

んで、なにやら依頼書を持ってきてくれたので拝見する。

短期の商隊の護衛依頼だ！

この手の依頼は、大体町から町にいく間に盗賊などの危険がある場合に、長期の護衛以外に護衛を強化するために出されることが多いはず。

もちろん、道中も、帰りも危険が付きまとうのだが、その分実入りが良いので、人気があり、僕は一度も受けた事が無い。

今回はどうも、王都と近郊の町の間に少数だが盗賊団が出るらしく、その間の護衛の強化が目的のようだ。

そんな依頼書が目の前にある・・・！

「普通は何日も前に埋まって、当日に受けれることはまずないんだけど。受けてた五人組パーティーが急に断っちゃったみたいで、商隊の人が直前まで募集してくれって言いに来たのよ」

残り一個よ、とウインクするお姉さん。素敵だ。

「ありがとう、お姉さん！今度デートしましょう！」

「あら、嬉しいわ。もちろんクリス君持ちよね？」

僕がどれだけ毎日金欠か知っていてこんな返しをするお姉さん、素敵すぎる。

「すみません、学院卒業後に出なおしてきます」

だがデートできるほどの甲斐性すらないのが事実なのでこう返すしかない、無念。

依頼書に必要事項を書いて、俺はギルドを出て門へと向かう。

護衛の依頼を受けた僕は、門の前で商隊の人と合流する。

「君で最後の一人かな？」

護衛のリーダーが確認をとってくる。

「はい、ギルドで商隊の護衛の依頼を受けてきました」

俺はギルドの依頼書を渡すと、リーダーは少し考えるようにこちらを見てくる。

「ふむ、たしかに。すまんな、少し幼いようにみえたが、実力はあるようだ。君の剣の腕に期待しているよ」

おかしい、なぜ剣の腕なのだ。

確かに、剣を引っさげてはいるが、依頼書の必要事項の職業の欄にはちゃんと魔法学院在学と書いたはずなのに。

納得いかないものを感じながら、俺は護衛に割り振られた商隊の荷車に向かう。

列を成した商隊の前方付近にある所定の位置に向かうと、なにやら大きい影がみえる。

どうみても、一週間前の竜人さんです、本当にありがとうございます。

無意識にお金と命を天秤にかける。

何故か、あの竜人を前にすると問答無用で死ぬと思ってしまう。

「おう！なんだなんだ、坊主もこの依頼を受けたのか！さっきまで坊主に絡んだチンピラどももいたんだがなぁ、何故かどっかいっちまって、知り合いもいなくて寂しかったぜ。ほらこっちこい、隣座れ！」

竜人が俺を見つけて、うれしそうに馬車の椅子をぱんぱんと叩くのを見て、逃げる気も失せ、隣へとむかう。

絞首刑台に上がる罪人はこんな気分なんだろうな、そう思いつつ竜人の隣に腰を下ろす。

「よ、よろしく・・・お願いします」

怖くてどもってしまう。

「おう！そんなびくびくすんな。あと敬語もいらんぞ、やり難くてしょうがない、折角短い間だが一緒なんだしな、向こうで用事がないなら帰りも一緒にどうだ？」

助けてもらっておいてお礼も言わないこんな小僧に、大らかに言う竜人を見て、俺の直感も当てにならないなと思い、ちょっと心を許してしまう。

「敬語苦手だから助かるよ、この前は助けてもらったのにお礼を言わないでごめんなさい。俺クリスって言うんだ、帰りも良かったら一緒に頼むよ」

なんていい竜人なんだ、俺はつい口が軽くなる。

「おう、ガキはそのくらいふてぶてしいのがいいんだよ、この前のことは気にすんなよ！俺はベアードっていうんだ。こっちこそ頼むぜ！」

それから、商隊が出発し、周りを見張りながらベアードといろいろ話をした。

周りの雇われた護衛の人たちは何故かベアードを避けているようだったが・・・

竜人だからかと勝手に思っていたが、どうも違うらしい。

ベアードの話を纏めると、ベアードは傭兵でドラゴンキラーであるとともに、傭兵団の団長であり、今回はちょうど戦場帰りで休暇だったのだが、酒代が無くなったために小遣い稼ぎで参加したのだそうだ。

傭兵のドラゴンキラーってだけでも、冒険者は気が引けるのに、戦場の匂いをぷんぷんさせている竜人はそれは避けられるな、と心の

中で思い、やっぱり自分のこの竜人への直感は正しかったのではないかとも思う。

まぁ、基本いい人っぽく、身の丈以上の剣を持っていて実力者でもあるようなので、俺の粗い剣術をどうしたら直るかなど、俺のほうからも話題を提供してそれなりに楽しく護衛任務を消化して行く。

ちなみに先の質問への返答は「戦場でなんでも切ってれば、段々自分にあった剣になってくるぞ！俺もそうやって身につけた剣で身を立ててるからな！お前は剣の才能がありそうだし、どうだ？うちにこないか？ちょっとむさ苦しいがいい奴ばっかだぞ。まぁ人族はお前だけだが問題ないだろう」とのことだ。

この返答はある程度予測がついたのでどうでもいいが、後半がいただけない。ちゃんと魔法学院で学生をしていると言ったのにこの扱い、俺の中でベアードは、おっさん呼ばわりすることに決定する。

そうして、なぜだか移動中だけでなく野営中も絡んでくるベアードに、言葉遣いなんてこのおっさんは絶対気にしないだろうと段々ぞんざいな話し方になっていき、しかしそれを聞いてうれしそうにするベアードにまた少し俺は心を許してしまう。

おっさんと仲良くおしゃべりしているうちに目的の町までもう少しのところまできた。

しかし、商隊は止まっており、護衛である俺たちは臨戦体制である。

前方にいるのはどうみても盗賊団だ。

こんな開けたところで襲われ無いだろうと、見張りも油断していたのだろうと思う。

堂々と眼前に陣取る盗賊団に、逃げることも出来ずその口上を俺たちは聞いている。

曰く、立ち向かってくるのなら殺す、後ろを向いて逃げるのならば殺す、荷と商人を置いて引き下がるのなら見逃す、すぐに返答しろ、とのことだ。

盗賊団はどう見ても依頼書の内容より人数も多く馬もいる、ここから町までは少し距離があるので増援は見込めない、こんな拓けているところで商人を逃がそうとしてもすぐ捕まる、俺じゃいい案が思い浮かばない。

皆も同じらしく、依頼人に視線を向ける。

依頼人を放り出すことも出来ず、結局依頼人に判断を委ねるしかないと思う。

が、隣からなにやら物騒な声が響く。

「なんだぁ、あいつら偉そうに。全部ぶった切っていいんだろう?」

皆が唖然とする、俺も唖然とする。

その妙に響く低い声と共に、一気に駆けだす竜人をただ見送る。

我に返って、俺は防護の魔法を詠唱する。

俺が魔法使いだということをしっかり見せようと、無駄に強固な防護をおっさんと自分にかけ、剣を抜いておっさんの後を追う。

その間に、他の護衛の人たちも、各々、防護の魔法を詠唱したり、剣を抜き駆けていくのが横目にうつる。

おっさんが弓矢なんて気にも止めずに突っ込んで、盗賊団の頭らしき人間を中心に周囲一帯を薙ぎ払うのが見える。

ありえない、あれはどうみてもありえないと思いつつ、俺も片手に剣を持ち、もう一方で魔法を放つ。

やっとこさ俺はおっさんの横に並ぶ。

「おう！クリス、遅かったじゃねぇか！罰としてあそこのちょこまかと矢を飛ばしてくる馬鹿どもを切って来い！」

「おっさんの突進力がおかしいんだよ！なんで一回剣振るっただけで盗賊何人も吹き飛んでるんだよ！あとあそこまでどんだけ距離あると思ってるんだよ！！」

そこまで距離はないが、間の賊の数を考えると突きすすめる気がしない。

「弓があると他のやつらや荷車にかけた防護がきれたときがこわいだろ。俺にかけてる防護いらねぇから。自分にその分かければいけるだろ？」

「なんで囲まれてる中で、俺が魔法使いなのをみせてやるって頑張ってかなり強く張った防護いらねぇとかいえるんだこのおっさんは

あああああああ」

「がっはっは。そぉら行って来い！」

盗賊と切り結びながら俺とおっさんは作戦にもならない叫び合いをする。

結局、俺は防護の魔法を自分にかけなおして、弓を射っている一団へと飛び込んでいく。

必死に走る最中に思う。

ああ、やっぱりこのおっさんに感じた直感は間違って無かったんだ。

おっさんは絶対これからも俺に、それこそ生死を分つような厄介事を持ってくるだろうと。

番外五「魔法使いと傭兵の出会い」（後書き）

投票結果
姫さま　１０票
砂糖を吐く話　４票
フウリの話　３票
金髪友人　２票
会場爆破　２票

おっさん　１０００票
でした。

次は姫さまの話を書いて本編に戻ると思います。

番外六「魔法使いと姫」（前書き）

投票で一番多かった姫さまの話です。
マッドなキャラっていいですよね。
しかしおかしいな、このコーヒー、ブラックだったはずなのに・・・

番外六「魔法使いと姫」

そこは綺麗な花が並び、噴水のある庭園だった。

クリスとフウリは、その美しい庭園を眺めながら散歩している。

「うわぁ、綺麗だなぁ、癒される。来て良かったね」

まるでデートの定番文句のようなことを口にするクリス。

「そうですね。仕事で無ければもっとよかったのですがね」

フウリが冷たい視線をクリスに向ける。

「あはい、すみません。本当に反省しています」

クリスが必死に頭を下げる。

「口ではなんとでも言えますね?今度やったら主が何故か大事に寮に飾っている木の棒をへし折りますよ?」

フウリは冷たい視線のまま言い放つ。

「まあ、いいです。ここが綺麗なのはたしかですからね、主のお財布の中身くらい綺麗です」

フウリは相変わらず、冷たい視線をクリスに向けている。

「す、すこしは残してるんだ・・・ぜ・・・?」

「何かいいましたか？どうしようもない主さま」

「すんませんでした！」

なぜこんな険悪なことになっているかと言うと、数日前に遡る。

学院が連休に入ったので、王都から遠い、トライン聖王国との国境沿いの町まで護衛の依頼を受けたクリス。

依頼自体は難なくこなしたのだが、そのあと立ち寄った町で、師匠が欲しがりそうな本を見つけてしまう。

つい最近、クリスは遺跡一個潰してしまい、師匠を涙目にしてしまっている。

そんなことを考えていると、気づいたときには、持ち金のほとんどを使い本を購入していて、乗り合い馬車にすら乗れなくなってしまっていたのだ。

そこで別行動をしていたフウリが合流。

事の次第を聞いて呆れるフウリに、謝るクリス。

飛んで帰ってもいいのだが、フウリと契約したばかりで少々不安のあるクリスは、どうにかそれ以外の方法がないか考える。

「（歩くには少し距離があるし、道中の宿代や食費もない。飛べば

結構近いのだが、契約したばかりの風精霊なので少し怖い。どうしたもんか。もう一仕事するかなぁ）」

クリスが考えていたところに声が掛かる。

クリスの学院の友達、アレン・コンクルールである。

アレンはオーカス王国の貴族で、クリスとは学院の同級であり頭がよく、そして変人だった。

ただひたすらに、その頭に入っている知識をもとに怪しい実験を繰り返す、実験に足りないものがあれば躊躇なく親の権力だろうがなんだろうが使う人間だ。

そのアレンがクリスに、トライン聖王国に姫さまの誕生会に行くから、それについてきてちょっとした頼み事を聞いてくれれば謝礼を出すと持ちかける。

アレンは、クリスがこの町まで仕事に行くことを、本人から聞いて知っていたので、ダメもとでさがしていたのだ。

そして、クリスはアレンの考えた中でも一番いい状態で見つかった。

すなわち、クリスがお金に困って、どんな仕事でも受けてくれる状態だ。

アレンの願望通り、クリスはその仕事に飛びついた。

そして、数日かけてこのトライン聖王国聖都の王城につき、アレンがパーティーに参加しているので、クリスは庭園を散歩してるのだった。

フウリは、この王城に入った途端に雰囲気が暗くなった。

「どうしたんだ、フウリ？」

「すみません、主。ここは天使の気配が強いので、どうにも調子がでないんです」

「えなにその悪魔みたいな台詞」

「ふふ、主は本当に命知らずですね。調子が出なくてもこの城を吹き飛ばすくらい頑張れば出来ますよ？そうですね、そうすれば天使の気配も消えていいかもしれません」

「すとおおおっぷ！！落ち着いてくれフウリ！」

「私はいつでも冷静です。ただやっぱりこの雰囲気は慣れません。少し浮いてきますね」

「それがいいね！けど間違っても攻撃魔法はぶっ放さないでね！」

「ふふ」

薄く笑って急上昇するフウリ。

「天使の気配で調子がでないって、どんな精霊だよ」

最近契約した精霊の後姿に向かってぽつりと呟くクリスだった。

その後、フウリは戻ってこず、クリスは一人であてがわれた部屋へ戻る。

そこにはアレンがすでにいた。

「クリス、例のちょっとしたお願いなんだけど、いいかね？」

アレンが神妙に言う。

「おお、もちろん！」

クリスが暗い気持ちを払拭しようと明るく言う。

「それでは、姫さまの背中から羽を一本でいいので採ってきてくれたまえ」

しばし、部屋に静寂が満ちる。

「は？」

そしてクリスが聞き返すが、アレンは同じ言葉を繰り返す。

「え、人間に羽って生えるっけ？」

「ふむ、ここの王族は天使の血を引いてると言われていてな。特に彼女はその血が濃いらしい。噂はあったのだが、今日、パーティーでちらっとだけ見たが、羽は本当に生えていたな。ただ、ガードが固くて私には採取することができそうになかった」

どこも王族はガードが堅いか、と悔しそうに呟くアレン。

「おいまて、マッド。姫の背中から羽を毟るとか、下手したら戦争になるぞ」

「何を言うんだいクリス！技術の進歩に戦争はつきものだよ！さぁ、私の研究の更なる進歩のため、あの羽を毟ってきてくれたまえ！」

アレンは腕を広げ天を仰ぐ。

「本物の馬鹿がおる・・・」

クリスも天を仰ぐ。

「馬鹿とは失礼だね、君より数倍頭はいいつもりだよ？」

「頭のいい馬鹿ほど性質の悪いものはないな」

「まぁ、君の風精霊なら気配遮断も完璧だし、すぐ毟れるのではないか？」

話を強引に引き戻すアレン。

「いや、あいつ調子悪くてなぁ」

「なんと！それは困ったな」

あまり困ったよう見えないアレンが言う。

「明日まで待つとしよう。もしかしたら君の精霊の調子が元に戻ってるかもしれないしね」

「いやいや本当に峯る気かよ！？」

「ふはははは！本当は喉から手が出るほど欲しい触媒だが、まぁ無ければ無いでどうにかなる。しかしあると私は嬉しい、もちろん君も嬉しくなれる」

分かったかね？と言ってそのまま部屋を出て行くマッド。

「俺にどうしろと言うんだ、あのマッドは・・・あれで優秀でさえなければ！！」

マッドだが優秀すぎるために、アレンを止めれるものは極端に少ない。

そのアレンにほいほいついてきた自分を呪うクリスだった。

夜。

雲が薄く広がり月明かりを隠している。

フウリがまだ帰ってこないので、心配になったクリスは庭園へと足を伸ばす。

と、そこには一人の少女が立っていた。

クリスは今日のパーティーに来た貴族かと思い、その場を立ち去ろうとする。

しかし、逃げる前に何故か少女に腕をつかまれてしまうクリス。

「待ってください」

少女が必死そうに言うので向きなおってしまうクリス。

「あー、すみません、俺はパーティーに呼ばれた貴族の従者なので・・・」

とりあえず、クリスは貴族で無いことをアピールしてみる。

「呼び止めてごめんなさい。よければ少しお話しませんか？」

潤んだ瞳で見上げられ狼狽しつつうなずくクリス。

「よかった。それでは、あなたのお国のお話を聞かせてくれませんか？」

期待に満ちた目をし、手を組んでお願いする少女。

クリスは仕方なしに、ギルドの話などをしてみると、これがどうも好評のようだった。

「まぁ！空に島が浮いているのですか！私も飛んで見たいです」

クリスが空の島の話をすると、少女は思いの他食いついてきた。

と、そこで雲が流れ、月が顔を出す。

月の光を浴び、まるで天使のような美しい容姿と羽を持った少女がクリスの隣に座っていた。

「（って姫さまじゃないかぁぁぁ！ありえないよ！？なんでお付きも連れずこんなところいるのぉぉぉ！だれかたすけてぇぇぇ！）」

ムードもへったくれもなく、クリスは叫びだしそうになる口を押さえて、心の中でシャウトする。

「どうしたのですか？」

姫さまは、クリスが口を押さえてるのをみて、顔に手を伸ばす。

それを止めようとクリスが手を出し、あまつさえ手と手がぶつかった瞬間、風が吹き二人の体が飛び上がる。

「きゃぁ！」

クリスには覚えのある感覚だが、少女は混乱したようでこちらに抱きついてくる。

「大丈夫ですよ姫さま。これはさっきお話した俺の風の精霊の仕業ですから。姫さまが飛んで見たいと言ったのを聞いてたようですね」

それまで実は、敬語を使っていなかったのだが、さすがに姫さま相手だと分かった以上、慣れない敬語を使うクリス。

「あら！そうなのですか。とても良い精霊さまと契約してますのね。あと敬語はいりませんわ」

姫さまは空に浮いてることがとても嬉しいのか、クリスから手を離さないままぱたぱたと体を動かす。

「しかし夜空の旅をするにはちょっと薄着だね」

クリスはそう言うと自然な動作で上着をかけて、ついでに羽を毟ろうとするも、少しバランスを崩し失敗する。

「ありがとうございます。とってもやさしい方なのね。このまま連れ去って欲しいわ・・・お願い・・・」

うっとりとした声で言う姫さま。

「（これは高貴な少女特有の白馬の王子さま願望病か！下手な答えはまずいぞ！）」

貴族のお姫さまが、たまに本当に平民と駆け落ちして、大騒ぎになることがある。

何度か捜索に加わった事のあるクリスは、男ではなくその状況を愛している様子を見ているので対処に困る。

下手な事を言うと、好いている設定のはずの男にまで向かっていく

のだ。

「（いやしかしまだ軽度だ、返答を間違えなければ生き残れる！）」

クリスは引きつりそうな顔を堪えて笑みを作る。

クリスは、慎重似に姫さまに言葉を返す。

「しかし姫さま。姫さまも俺も帰る場所がある、そうだろう？」

心の中でいっそ殺してくれと絶叫するクリス。

「そう・・・ですね・・・、けどいつかきっと迎えに来てください」

目に涙を貯めて言う姫さま。

「そのとき、まだ君が飛びたいと思っていたら、空を見上げてごらん、俺が迎えに行くから」

心でひたすら涙するクリス。

それ以上は何も話さず、ただ姫さまの部屋のテラスまで風が運んでくれる。

そしてとうとう別れの時が・・・

「もう行ってしまうのね、せめてお名前だけでも」

ここまで死守してきたものを、クリスはなんとか守りきろうとする。

「名前なんてものは飾りさ。君と俺がただいる、そうだろう？」

クリスはいろいろと捨ててまでも、それを守り通そうとする。

精神が崩壊する音がクリスから聞こえてくる。

これ以上は無理だと、テラスから自分の魔力で離れようとする。

「待って！これを私だと思って持って行って！」

そういうと、姫さまは羽を一本自ら手折ってクリスに渡す。

「私は忘れないわ！あなたのこと！あなたもそれを持って私のことを忘れないで！！」

クリスはただ笑みを称えてテラスからぐんぐん離れていく。

すると不幸な事に、姫さまの大声を聞いた衛兵と王が部屋へと入ってくる。

「貴様！！どこの者だ！！」

王が大声をあげ魔法放つも、すでにかなり離れていたクリスは、なんとか逃げ切る。

結局、クリスはそのまま飛んで王都までもどることになる。

「主、なかなかいい見世物をありがとうございます。おかげで大分調子が戻りました」

「阿呆かぁぁぁ！何で姫さまを飛ばしたし！！」

「面白そうだったからに決まってるじゃないですか。あと、あの傲慢な天使どもの末裔が、空も飛べないと嘆いているのがどうにも気に障りまして。つい」

フウリが悪びれずに言う。

「フウリの思いつきで俺が犯罪者一直線だったよ？！けど調子が戻ったのはよかったね！！」

やけくそ気味に叫ぶクリス。

「主のおかげです、ありがとうございます。今ならキスしてあげますよ？」

そう言ってフウリは後ろからクリスに抱きつく。

「何か釈然としないものがあるんですが！キスはいらん！」

クリスはなんとかフウリから逃れようとする。

「照れ屋さんですね、可愛い主」

フウリはまったくクリスの言葉を聞かずに顔を近づける。

「やめろ！飛んでる最中に引っ付くな！落ちる落ちる！」

耳元で聞こえるフウリの声に怯えるクリス。

「ふふふ、落ちたくなかったら暴れてはいけませんよ、主。私の加減が間違ってしまうかもしれません」

「こわいわ！ああ！顔を近づけるな！むぐぅ」

動きの止まったクリスの口をフウリの口が塞ぐ。

「ふふ、可愛い主。まだ契約したばかりですが、私はそれなりに主を信用しているのですよ？キスしたいくらいには」

だから主も信用してください、とフウリは続ける。

フウリはクリスから離れる。

「すまん、最初から飛んで帰ってればよかったな」

クリスはフウリのほうを見て呟くように言う。

「少し悲しかったんですよ？主は、私にとって、あの空の牢獄から助け出してくれた、白馬の王子さまなんですから」

そっとクリスの手を握り、いつになくしおらしい言葉を口にするフウリ。

「う、本当にすみませんでした」

その様子にたじたじのクリス。

「言葉ではなく、行動で示してほしいです、主」

そう言うと、クリスの前に回り込むフウリ。

そのままクリスのほうを向き、目を瞑る。

魔法使いは意を決したように、風精霊の肩に手を置くと、二人の距離が縮まっていく・・・

なんやかんやあって、帰りの空の旅の途中。

「ふうむ・・・。フウリ、昔話でもしながら帰るかぁ、考えたらついこの間契約したばかりで全然お前のこと知らないもんなぁ」

少し考えたクリスが提案する。

「なんですか主、私の事ならなんでも知りたいのですか、仕方ないですね。まずはそうですね、私の嫌いな嫌いなシルフの話からしましょうか」

そう言いながらフウリが嬉しそうにクリスに後ろから抱きつく。

「最初からえらい飛ばすね！ビッグネームだよそれ！？フウリの名

前にしようとしたら怒られるし！」

フウリとクリスは、星が輝き、月が照らす夜空を進む。

「そうですね、それも含めて話をしましょう。天使に創られた私たちが・・・」

・・・・・・・

二人の関係は少しずつ変化するのだった。

その数日後、帰ってきたアレンに、黙って先に戻った事を詫びを入れに行くと、アレンは何故か上機嫌だった。

「聞いたぞ！あの王相手に大立ち回りをしたそうじゃないか！えらい騒ぎになってたぞ！犯人は分かってないようだったが、私はすぐにぴんときたよ！さすがは我が友人だ、私より狂気を孕んでいるぞ！」

その言葉を聞いて隅で丸くなるクリスだった。

そして更にその数年後、比喩表現ではない風の噂で、姫さまの病気も完治したことを知り、安堵する魔法使いの姿があったとか・・・

番外六「魔法使いと姫」（後書き）

投票いただきありがとうございました。
少しでも楽しんでいただけたら嬉しいです。
次回から本編更新しますが、ストックがほぼ尽きた上に年末なのでゆっくりになると思います。

今年は赤い服をきたお爺さんたちを国へ帰す仕事が例年より忙しいので、前話を含めて、誤字等ありましたら明日修正します。すみません。

第二章プロローグ

そろそろクリスがトリエ村に来て三ヶ月が経とうとしていた。

「ふう。フィリスも大分話がうまくなったよなぁ」

クリスはフィリスを膝に乗せて絵本を読み聞かせていた。

「ほんとう？」

時折絵本の質問をするフィリスは、たどたどしいなりにも上手く話すようになっていた。

「おう、本当、本当。しかし平和だなぁ、村の農具は粗方直し終わったし」

伸びをするクリス。

それを真似するようにフィリスも両腕を伸ばす。

「久々に平和な日々ですね、主。去年の今頃は王城に侵入してやらかしたりしてましたよね」

昼飯の後片付けを終えたフウリが、エプロンを取りながら部屋に入ってくる。

「思いださせないでくれよ！しかもやらかしたのは俺じゃないし！あの馬鹿がどうしてもっていうから！」

フィリスが落ちないように手でガードしつつ器用に頭を抱えるクリス。

「友人の頼みだからと理由も聞かずに、王城に一緒に忍び込むなんて普通しないですよ。付き合いが良すぎるのも考え物です。気をつけてくださいよ」

珍しく心配顔で言うフウリ。

「お、おう。なんかフウリに普通に心配されるのがこんなに不安になるなんて思わなかった」

予想外のことにクリスは本音がだだ漏れになる。

「ええ、少し注意しておいてください。何か大きな風が舞い込んできそうです」

クリスの本音を聞いて、更に不安を煽るフウリ。

「おぃぃぃ、不吉すぎる!!も、もう少し詳しく分からないの!?何か食べないほうがいいとか!鏡をどこかにおいたほうがいいとか!」

怯えたクリスはまじないにもすがる勢いだ。

「落ち着いてください主、必ずしも悪いものとは限りません。あと、主は巻き込まれるのは決定してますので、巻き込まれないように対策をしても仕方ありません。前向きに行きましょう。注意しなければいけないことは、巻き込まれたあと、主が死なないかということです」

「なんで巻き込まれて死ぬか死なないかが前提なの！？前向きじゃねぇ！！」

「ふむ。これまでの経験から避けれない運命というのが主の場合、少々多いように思えますので、今回も順調に巻き込まれるでしょう。むしろこの三ヶ月平穏だったのが不思議なくらいです。もし万が一悪いものだとしても、天使くらいならフィリスの炎と私の風を合わせれば打ち落とせますので、安心してください」

フィリスを撫でながら物騒なことを言うフウリ。

「ん、がんばる」

フィリスは拳をつくる。

「思い返せばそんな気もするけど！この三ヶ月はとても貴重だった気がしてきた！！あとフィリス、天使見つけても焼いちゃだめですよ！」

クリスが三ヶ月もほとんど何も無く、平穏にすごすということは、彼を知っている人物には信じがたいことなのだ。

「私は主の傍なら、平穏でも戦場でも別に気にしませんよ？あとフィリス、主を守るためなら躊躇してはいけませんよ？」

しっかりフィリスに言い聞かせるフウリ。

クリスが災いの神に溺愛されていることを理解しているので、自分の力が及ぶ範囲ならなんでもござれなのだ。

「ん、わかった」

二人の注意を聞いて、普段は天使を見かけても焼いてはダメだが、クリスが危険になったら天使を焼いてもいいと理解するフィリス。

本物の天使というのはこの世界にはもういないのだが、子孫が残っていると言われ、奇跡的な偶然で背中に羽の生えている人間もいる。

「俺は平穏無事がいいなぁ。まぁフウリといるのは嫌いじゃないが。っていうかさらりとそんなこと言われると照れちゃう」

フウリの発言を聞いて少し顔の赤いクリス。

「主は照れ屋さんですね。そんなところもからかい甲斐があって素敵ですよ」

フウリが面白そうに言う。

「ふぃりすは？」

若干むくれたようにフィリスが二人に尋ねる。

「フィリスも私たちの可愛い子です、愛してますよ」

「もっちろん！！フィリスも大好きだよ！当たり前じゃないか！よし、変な事に巻き込まれる前に国外逃亡しよう！」

親馬鹿二人は、娘を撫で回しながら愛と展望を語る。

「そしてまた厄介事に巻き込まれるんですね。あまり難易度の高いのはやめてくださいね。神クラスが出てくるとさすがの私も本気を出さないといけなくなりますよ」

「おいいぃぃ！巻き込まれねぇよ！？難易度選択できるの！？神クラスじゃないと本気ださないってフウリさん何者なのぉぉぉ」

「冗談です、主」

お茶目に無表情に言うフウリ。

「どこからどこまでが冗談なの！？ねぇ！？」

クリスは不安が胸中を席巻し、質問する。

「さぁフィリス、主はこれから厄介事に巻き込まれる準備をしないといけませんので、本の続きは私が読んであげますよ」

フウリは、クリスの膝の上からフィリスを抱き上げ、椅子に腰掛けると本を開く。

「ん、わかった、おかあさん」

フィリスは嬉しそうに膝の上からフウリを仰ぎ見て返事をする。

「俺は絶対巻き込まれないからな！くそ、どうするか。まずは情報収集か、こんな田舎じゃ情報なんて入ってこねぇ、一回王都にいくか・・・」

風精霊が火精霊を抱え、本を読み聞かせる横で、魔法使いがぶつぶつと対策を練るのだった。

そして、魔法使いが対策を考える間にもその平穏を破壊する使者がトリエ村へと近づいてくるのだった。

第一話「魔法使いの弟子」

「ここがトリエ村か。あの人がここに引き篭もって約三ヶ月。周辺にクレーターもないし、何かが暴れた様子もないですね。本当にあの人は平穏無事に過ごしているんでしょうか・・・？」

トリエ村の前で馬に乗って佇む男が一人。オーカス王国の印が目立つ鎧を着込み、剣を腰にさげている。

男はこの国ではさして珍しく無い金髪であるが、顔は整っており、どこか品のある高級感を漂わせている。

男の名前はジョン・タリエールエ、オーカス王国の貴族タリエールエ家の次男にして、王国騎士を拝命し、王子の親衛隊に所属している。

なんでも王子自らの指名ということで、貴族間でも一時期話題にあがったほどの男である。

実際は、王子の友人が弟子の自慢をよくしていたのを覚えていて、引っこ抜いただけなのだが、そんなことを知らない貴族たちの間では、今年とうとう社交界に現れた王家の王子とその騎士は、ただならぬ関係ではないかという噂までである。

オーカス王国では、王族は基本的に成人するまでその存在自体が秘匿とされ、極一部の人間以外、その容姿すら知らない。

そのやっと顔を見せた王子の一番信をおいている騎士がジョンなのである。

普通、国の騎士が田舎の村に来ることなど滅多にないのだが、ジョンは自分の主である王子から命令を受けてここへ来た。

この命令に一番適任なのがジョンだからである。

やっと到着した目的地の前で、ジョンは命令を受けたときの事を思いだす。

「おい、ジョン。お前はあいつの弟子なのだから、ちょっと面白いトラブルに巻き込まれて来い」

僕は今日、急な呼び出しで王城の中にある、王子の執務室に出向いている。

最近ではここで、王子の学院時代の親友たちや一部の重臣たちが集まって日々悪巧みが行われているので、あまり近寄りたくなかったのだが。

少しは自重していただきたいのだが、止める立場である王はあまり王子のすることに興味を抱かず、妻である王妃が亡くなってからは、後宮に通いつめていると聞く。

重臣の方々も、そんな王を放って、自分たちに都合のよい政に日々忙しそうである。中には真に国を憂う重臣の方々もいるのだが、何

を思ったのか、王子の悪巧み会議に参加しているようだ。
そんな執務室で我が主、ステイン王子がどこか楽しそうに言って僕のほうを見る。
この言葉だけで、我が主が僕の師匠をどう見ているかが分かる。
「師匠はトラブル体質ですからね、危険なトラブルが向こうから花束を持って、それこそ師匠の精霊より速く迫ってきているに違いありません。心配ですよ僕は」
我が主も相当変わっている方で、あまり堅苦しい話方をすると怒られてしまうので、最低限の敬語で話をするようにしている。
まぁ、師匠の友人だからちょっと変人でも仕方ない。
そして、我が師匠はというと、王宮魔法院の推薦を蹴って田舎に引っ込んだのだ。ありえない、師匠を知らない人ならばそう思うだろう。
しかし、僕は師匠が傭兵になっていないだけ、まだましだと思っている。
もし、あの人が傭兵になってグルーモスにでも雇われたら本当に危ない。
そうなったら、僕が騎士を辞めて田舎に引っ込んで畑を耕していたところだ。
そんな忠義あふれる僕だが、今日はなんで呼ばれたのかよく分からない。
無駄話をするために呼ぶような王子ではないし、何かばれてしまったのか。

いやしかし、第一騎士団と揉め事を起したのは、しっかりもみ消したはずだ。
第三の連中をぼこぼこにしたあれが今になってばれたのか？
しかしあれはかなり昔だし師匠がほぼ全部やったわけだし、僕は関係ないな。
あとやばそうなのは・・・・

「・・・ジョ・・・ジョン、ジョン！」

「いえ、第五の馬鹿どもに正義の鉄槌と称して下剤を盛ったのは僕ではないです。勘違いはやめてください」

考え込んでいると王子が僕を必死に呼んでいたので、呼び出しの一番可能性の高いものを否定してみる。

「ほう？あいつらに薬を盛ったのはやはりお前か。よくやったぞ」

どこか楽しそうに目を細め僕を見て王子は言う。

さすが我が主、正義の定義が僕と同じだ。

「しかし、その件で呼んだわけでは無いぞ。ただその件についても聞かなくてはいけなくなったがな。まったくお前はヤるならばちゃんと殺るんだ。中途半端に薬を盛るなんてのはいかんぞ」

再起不能にくらい追い込まなくてはな、そう続けて言ってくる王子。

これぞ師匠の友人だ、僕の正義よりも更に固い意思をもっていらっしゃる。

「はい、すみません。次からは王子のご意向に沿えるような正義の鉄槌を下して見せます」

「うむ、しっかりな。それで今日の用件だが、最近よくここに重臣や私の友人が出入りしているだろう？」

王子は一つ頷くと、最近のこの部屋の使用状況について私に確認を取ってくる。知ってはいるが、あまり巻き込まれたく無いという僕の意思までは伝わらないのだろうか。

「ええ知ってますよ、夜な夜ないかがわしい密会をしてることですよね」

「うむ、それだ。その密会に我が一番の友人も呼ぼうと思ってな。あいつめ、まさか田舎に引っ込むとは思わなかった」

「師匠ですか。もうそろそろ三ヶ月になりますね。僕は師匠の故郷のほうから正体不明の大爆発や、天変地異が無いかといつも朝起きると見てしまいます」

王子でもあの師匠の行動は分からないようで悔しそうにしている。

しかし、弟子でもある僕もいまだに師匠はよく分からない。
そもそも、僕のことを弟子と思っているかも怪しい。
僕は師匠師匠と言っていたが、あまり何かを口で教えてもらう機会は無かった気がする。

実地で教えられることは多々あったけど。剣の師匠と言うよりか、戦場の師匠と言った感じだ。
戦場でドラゴンをぶった切っておいて、本人は魔法使いのつもりなのだから笑える。

「私もそろそろ他国で問題を起してやばいことになっていないか心配だが、そんな話も聞かないので大丈夫だろう。お前が行けば、無下に扱われることもあるまい。最悪、骨だけは私自ら拾ってやる、行って呼んで来い」

なんとも、有難いお言葉である。涙が出そうだ。

師匠とそのお嫁さんがいちゃいちゃしてるかもしれないところに行けだなんて、もしその蜜月を邪魔する者だと分かったらどこからか吹くそよ風に刻まれてしまうということがこの王子には分からないのか！！
確かに師匠も怖い、しかし一番怖いのはその嫁なのだ。

「我が主のお望みとあらば是非もありません。ご命令たしかに受け賜りました」

しかし、王子の騎士としてこれ以外の答えはない。

「うむ、素早くな」

王子は膝をつき礼を取る僕の肩に手を置き、一度叩くとそのまま執務に戻るのだった。

そんな理由でジョンは今、トリエ村の門をくぐろうとしている。

馬から降り、門のところにいる子供たちに話をかける。

「すまんが、君たち。ここはトリエ村であっているかな？」

村に看板がかかっているわけもないのでジョンは子供たちに確認をとる。

「うお、騎士さまだー！」

「おー、かっくいい！」

「本当だ、剣持ってる」

「あの剣高そうだな」

「兄ちゃんのとは大違いだな」

「あれ所々ぼろっちい感じするもんな」

「おいだれだ、僕の将来のお義父さんの悪口言った奴は！」

「だまれ！フィリスちゃんは俺の嫁だぁぁぁ」

「おい、トリエ村騎士団の姫に対して嫁とはなんだ！」

「騎士団の掟を破ろうとするとはいい度胸だ！」

「フィリスちゃんは皆の姫、それ以外は認めない！」

「制裁だー！」

ジョンを無視して、年長の子供たちは取っ組み合いの喧嘩に発展している。

年少の子供たちは、ジョンにまとわりつき、剣を取ろうとする子までいる。

あまり怒らないので年下に好かれるジョンも、ここまで躊躇いなく子供に引っ付かれるのは久しぶりだ。

剣を必死に守りつつも、ここが自分の師匠が育った村だろうと確信する。

少し時間を置いて、なんとかお得意のスマイルと口先で子供たちを宥めすかし、ジョンは村長のところへと案内してもらう。

こうして魔法使いの平穏を破壊する使者がその一歩を踏み出すのだった。

第二話「魔法使いと親子」

「よし、聖王国に行こう！あそこなら何かあっても、神さまとかが守ってくれそうじゃない！？」

フウリがフィリスに絵本を読み聞かせしてる横でクリスが声を上げる。

クリスは信じていない神にも縋りたいほど追い詰められている。

「急に声を上げないで下さい。神に祈ったらこれまでにないほどのトラブルが舞い込んでくるんじゃないですか？主には災いの神が背後霊のようにはりついてますからね。けどいいですね、聖王国。あそこは天使の末裔がいましたね。ふふ、主も分ってるじゃないですか」

本を置いてフウリは思いだしたように薄く笑う。

「てんし、やく？」

フィリスが、フウリの膝の上で首をかしげて聞く。

先ほどの会話のクリスが言った大事な部分を忘れてしまったようだ。

「ごめん、やっぱ無し。今の話無しで。俺の背後に四六時中張り付くってどんだけ暇なんだよその神さま！あと、フウリが物騒なこと言うからフィリスまで言動が物騒になっちまっただろ！どうするんだ！」

クリスはちらちらと自分の後方に視線を向けつつ、フィリスの発言がフウリに似てきた事を嘆く。

「はて？フィリスもそれなりに生きていますからね。天使の一人や二人・・・」

フウリは首をかしげつつ語尾を濁す。

フィリスは真剣な顔つきで考えているように見える。

「なんでフィリス考え込んでるの！？そんなことしてないよね！？冗談だよね！？冗談って言って！」

クリスはフィリスの仕草を見て、昔にそんなことをしたことがあるのかと戦々恐々だ。

「冗談です」「じょうだん」

フウリとフィリスは笑いながら、お互いの手を合わせ悪戯の成功を喜びあう。

二人の声が重なるのを聞いてクリスは、本当に二人が似てきてしまったことに、ただただうなだれる。

と、そこで玄関のドアを叩く音が部屋に響く。

フィリスがそれに一早く反応して、ドアに駆けていく。

最近はフウリやフィリス目当てこの家にいろいろ持ってくる客が多い。

その対応をフィリスが自分の仕事と思い、いつも誰よりも先に出ようとするのだ。

客は大抵家に上がってお茶を飲みながら話をしていくので、フウリはお茶を二つ入れ、クリスは更にうなだれ、部屋でフィリスがお客さんを連れてくるのを待つ。

「おきゃくさん、つれてきた」

「すまんの、お邪魔するぞ」

すぐに戻ってきたフィリスは、すこし自慢げにそう二人に告げ、それと同時に村長が上がってくる。

「村長が来るのは珍しいね。あとフィリスえらいぞ、将来は美人さん間違いなしだな。」

「いらっしゃいませ、村長。あとフィリスは将来、気の利くお嫁さんになる事間違いなしですね」

クリスとフウリは村長を立って迎え、フィリスの頭を撫でる。

うれしそうに撫でられているフィリスを見ながら、クリスは極当たり前のようにに言い放つ。

「馬鹿な、フィリスを嫁に出すわけが無いだろう。俺を倒せるやつになら任せても・・・いやしかし・・・！」

「む、そうですね。最低でも主と私を倒せる程度の力を見せていた

だかないと。それで手を握る権利だけはあげるとしましょうか」

まだ見ぬ強敵をどうやって倒そうかと苦悩する親馬鹿と、娘の手を握らせるためだけにまだ見ぬだれかに命を賭けさせることを決定する親馬鹿。

「よしちょっと鍛えてくる」

「私も少し鍛える必要がありますね」

「ふぃりすも」

自分が強ければ何の問題もないと結論を出す親馬鹿二人と、理解しないで手を上げて賛同する娘。

「よし、それじゃあ三人で国外逃亡だな。ということで追って来るなよ、馬鹿弟子」

そう言って窓から逃亡を謀るクリス。

村長は慣れたもので、お茶を飲みながら成り行きを見守っている。

そして部屋の前の廊下では、居間から見えない位置に隠れていたジョンが慌てる。

ジョンは村長の家に行き、クリスのことを尋ねたのだ。

そうしたら、彼にとっては信じられないことに、来て早々に魔力食いなんてレアな魔物を倒して以降は、本当に信じられないことに平穏無事な毎日を送っていることを聞く。

思わずそれは本当にクリスという男か、確認をとってしまったほどだ。

村長によってその事実が肯定されると、ジョンは絶望する。

三ヶ月も平穏に過ごしていた師匠たちに、その平穏を壊すようなことを自分が言いに来たと知られれば、よくて師匠に逃げられる、悪くて師匠の精霊に消される、絶望の中でどうにか生き残れ無いか考えを巡らせるうちに、気づいたときには村長に先導され、クリスの家の前にいた。

村長が扉を叩くと軽い足音がして、フィリスが出てきた。

ジョンは、自分の師匠の家族構成は把握してなかったので、フィリスは師匠の妹なのだろうと判断した。

フィリスに案内され廊下を歩き、すぐに居間の入り口に辿り着き、村長はフィリスと一緒に入っていくが、ジョンは怖気づいて入るのを躊躇ってしまった。

クリスとフウリは、ジョンが家に来る大分前から、ジョンが来てい

ることには気づいてた。

正確に言えば、ジョンが村に入ったときにフウリが気づき、家の前の道を歩いてるときにクリスが気づいた。

フウリはジョンが主や村の人に直接害を成すような愚か者ではないことを知っていたので、特にクリスにそのことは告げなかった。

クリスは、ジョンが家の前に来たとき、確実に件の大きな風だと判断し、どうしたものかと頭を抱えた。

フウリは、二人の客人にお茶を用意しながら、ジョンがどんな厄介事を持ち込みにきたのか、考えを巡らせた。

こうして、魔法使いの平穏を破壊する使者は、その姿を表すのだった。

第三話「魔法使いと精霊と弟子の関係」

居間の入り口の前に、おずおずとジョンが姿を現す。

「お、お久しぶりですね。フウリさん、師匠」

挨拶の順番から、ジョンの中でどちらがより怖い存在かよくわかる。

ジョンはフウリのことを、様々な情報に精通して、人の機微にも鋭い変わった精霊だと思っており、師匠のためなら割と無茶をするところ見てきているので、ついつい恐縮してしまいがちなのだ。

そんなジョンの挨拶を聞いて、クリスは窓に向かっていた体を反転させ、今の入り口に向き直る。

「おい馬鹿弟子！お前が厄介事を運んできたことは分かっているんだ！俺の平穏な日々は渡さんぞ！！」

クリスはフィリスを後ろから抱きしめながらそう吼えると、ジョンを睨みつける。

まるで威嚇する犬のように、目を怒らせ、今にも唸りだしそうだ。

「師匠、落ち着いてください。と、ところでよく分かりましたね、僕が隠れてたの。結構自信あったんですが」

ジョンはクリスを落ち着かせようと、厄介事ではない別の話を咄嗟に振る。

ちなみにジョンが気配を消すのが得意なのは、それができないとまず死ぬようなところにクリスによって連れて行かれることが多々あったからだ。

「だれがお前に教えたと思ってんだ！っていうか隠れてたってことは何か後ろめたいことがあるんだろ！それ以上寄ったらこの超絶可愛い娘の頭を撫でるぞ！撫で回すぞ！」

そういいながら、クリスはフィリスの頭に手を置く。

フィリスは嬉しそうにクリスの手に叩いている。

藪をつついて蛇を出したジョンは、この訳の分からない状況を打開しようとする。

「それ脅しになってないですよ。ところでその可愛い娘さんは誰ですか？」

ジョンは自分の師匠が抱きついている、おそらく相当可愛がっているであろう妹の話をさせて、少しでもクリスを落ち着かせようとする。

「ほほう。師匠に厄介事を運ぶ馬鹿弟子にもフィリスの可愛さは分かるか！しかしお前なんかに娘はやらんぞ！！俺とフウリを倒せたら、四十秒だけ会話できる権利をやろう！」

「ふむ。主の弟子は、いくら可愛いからと言って私たちの娘を嫁に欲しいのですか？仕方ないですね。少し本気をだしましょうか」

とうとう娘と喋る相手すら命を賭けさせることを決定する親馬鹿と、

アップをしだす親馬鹿。

別の方向でぶっ飛んだ自分の師匠と師匠の精霊の会話を聞いて、ひたすら頭を悩ますジョン。

「し、師匠とフウリさんの娘ですか？無茶がありませんか？いくら師匠だからって種族は超えられないでしょう？」

ジョンは、ふとした疑問を何の気なしに口にする。

「フィリスは実の娘だ！なぜなら血はつながっていなくても、魂は繋がっている！！あと魔力も。いいか馬鹿弟子！大事なのは血じゃない！心だ！！」

「ふむ、主の弟子なのに、少し道理が分からないようですね。この子は主と私の娘です。家族になるのに必要なのは血ではなく心なんですよ」

「こころだー」

クリスが目を血走らせて魂の叫びを、フウリが冷静にものの道理を、ほぼ同時にジョンに向かって口にする。

それに遅れて、クリスに抱きしめられていたフィリスが両手を振り上げ大事なことを強調する。

そしてジョンは、何も考えないで疑問を口にした自分を恨む。

「す、すみません。どうも僕もまだまだ修行がたりないようで」

ジョンはなんとか取り繕うとする。

「まったく、こんなことも分からないなんて、お前は本当にどうしようもない馬鹿弟子だな！そんなんじゃ、この災い渦巻く世界を生きていけないぞ！」

「そうですね。もう少し精進するべきでしょう。魔法使いである主に、あなたが剣で勝てるくらいに」

クリスがフィリスを抱っこして、まるで大切なことを言うように世界で生きていくことの大変さを弟子に言い、フウリがばっさりと自分の主の弟子を切り捨てる。

「その子が師匠とフウリさんの娘だってことは分かりました。ただ、災いの中心はいつも師匠じゃないですか！！何度巻き込まれたと思ってるんですか！それでも生き残ってるんですよ僕は！！そして、精進しただけで勝てるなら魔法使いを剣の師匠にはしません！！」

理不尽な説教と理不尽な事実を言われ、ほんのり涙目になりながら反論するジョン。

いつもは冷静なジョンも、この二人と話すときは大抵こんな感じに、感情むき出しになってしまう。

「だれが災いの中心だ！そもそも、師匠の面倒事は買ってでもするのが、弟子ってもんだろ！まったくこれだから近頃の若い者は」

「あんたの面倒事は生死に直結なんですよっ！！」

まるでクリスの無職っぷりを見た村の老人のようなことを、クリス

が弟子に言う。

それを聞いてジョンは、歩く死亡フラグ量産機の師匠の後ろでその旗を取って歩く作業なんて、死んでもごめんだと思い、形振り構わず叫ぶ。

「そ、そんなことないぞ・・・？」

「なんで目を逸らすんですか」

クリスのもその自覚はあるらしく、さっきまでの強きが嘘のように汗を流し、視線を明後日の方向へ向ける。

ジョンはそんなクリスをジト目で見つめる。

「そうだ、おい！馬鹿弟子！俺はこの三ヶ月平穏にすごしていたんだ！それが証拠だ！！」

「よかったですね、これから三ヶ月分の厄介事が待ってます」

まるで鬼の首を取ったかのように言うクリスに、冷静になってきたジョンはいつも通りに返答する。

「やっぱり厄介事を持ってきたのかぁぁぁ！逃げるぞフウリ、フィリス！」

「あ、しまった」

クリスが慌ててフィリスを抱え上げ、フウリに手を伸ばす。フィリスはよく分かっていないが、抱えられてくすぐったそうに笑ってい

る。フウリは手を握られ、しかしクリスを留める。

ジョンは自分の失言に手で口を覆う。

「主、弟子いじりはこの辺にしましょう。何か重要な用事があって来たのでしょう？そうで無ければ、五寸刻みになる危険を冒してまで、主のところにはこないでしょう」

真顔でそう言うフウリに、ジョンは収拾をつけてもらったことにほっとすると同時に、何か気にさわることがあれば五寸刻みだったのかと、恐々とする。

「ちっ、命拾いしたな馬鹿弟子！それで何の用があるんだ！？俺はやらんぞ！」

「なんで用件聞いといて、結論を一緒に言うんですか！」

「そうですよ、主。折角弟子が尋ねてきたのですから、少しは寛容に応対してあげればいいじゃないですか。まぁ、つまらない話題ならば少しの間喋れ無いようになるかもしれませんが」

「な、なんですかそれ！どこも寛容じゃないじゃないですか！師匠からも何か言ってください！弟子の口がピンチですよ！？」

慌てて師匠に助けを求める弟子。

「お前、口が無くなるとあとは腹黒さしか残らないからなぁ。だからこいつから口を取るのはやめてやってくれフウリ」

クリスは、しみじみと思いだすように口にする。

「たしかにそうですね。主の弟子は、礼儀正しいですがお腹が真っ黒ですからね。フィリス、あまり見ちゃいけませんよ」

「はーい」

フウリがフィリスの目を両の手で隠し、フィリスは嬉しそうに返事をする。

「何か僕が口と腹の悪さでしか評価されていない気がしますよ!?師匠としてそれはどうなんですか!?剣の腕とかあるでしょう!?」

「それは置いといて、結局なにしにきたんだ?」

「置いておかないでくださいよ!!」

ジョンは目的も忘れて叫び倒す。

まるでクリスが王都にいるときのような光景が広がっていた。

すなわち、クリスとフウリがジョンをいじり、ジョンが叫び、さらにクリスが悪乗りしてフウリが諫め、またクリスとフウリがジョンをいじるというエンドレス、だいたいいつもこんな感じの三人組だった。

王子の懐刀、冷静沈着な騎士と噂され、自分の主である王子相手ですら腹黒毒舌を忘れない魔法使いの弟子も、魔法使いとその精霊に

かかれば、その仮面をあっけなく剥がされるのだった。

第四話「魔法使いと弟子の用件」

「で、どんな厄介事を持ってきたんだ？」

先ほどの騒ぎからやっと落ち着いた面々が、テーブルを囲う。

フィリスはクリスの膝の上でご満悦だ。

「えっとですね。師匠は僕が騎士になったのしっていましたっけ？」

「ああ？ああ！そういえば、いい鎧着てるな？」

クリスはジョンが騎士になることを一片も疑っていなかったが、実際その姿を見たのは初めてだったことを思いだす。

そして、まるで田舎のチンピラのように、テーブル越しに下からねめつけるようにジョンを見る。

「やめてくださいよ。僕だって騎士団に入っていろいろ苦労してるんですよ？師匠はそれが嫌で騎士団に入らなかったじゃないですか」

推薦はもらっていたでしょう？とジョンが続ける。

確かにクリスは魔法院の推薦を蹴ったあとに騎士団の推薦ももらっていたのだが、騎士団とは馬が合わないことはこれまでの出来事で確実だったので、そちらの推薦も蹴ったのだ。

ギルドの名うての冒険者、ドラゴンキラーであり、凄腕傭兵と組んでの実戦経験も豊富、国の難易度の高い依頼も何度か受けて、その全てを成功させている。

国境争いでは、ドラゴンを一刀の元に両断し、敵増援すらその姿を持って引かせた男は、いくら平民の出とはいえ、名門貴族の弟子でもあるのだ、騎士団上層部にお欲しいと思わせるのに十分であった。

加えて騎士団の上層部に息子を鍛えてもらった父親がいて、息子がもってくるその他の武勇伝を聞き、たるんだ騎士団に是が非でもほしいと思っていた。

そしてその「魔法使い」が、魔法院の推薦を蹴ったことを聞き、騎士団が推薦を出したのだ。

ちなみに、当初クリスの話が上がったとき騎士団上層部は、それが魔法学院の生徒だということを頑なに信じようとしなかった。

クリスは騎士団を戦場で見て、そのあまりの頼りなさと、あまりの特権階級意識の強さに辟易していたのだ。

「冗談だ。すまんすまん。騎士叙勲おめでとう」

一転、真面目な顔でクリスはジョンを祝辞を述べる。

「ありがとうございます。騎士になれたのは家柄ですが、自信をもって自分が騎士だと言えるのは、師匠のおかげです」

今の王国の騎士は、ほとんどが家柄で決まっている。それを良しとしなかったジョンの父が、ジョンに課題を出して冒険者をさせていたのだ。クリスとの出会いもそのときである。

そして、その父の思いの通りにジョンは名実共に騎士となったのだ。

ジョンは自分を真の意味で騎士にしてくれた、父と師匠のことを実は誰よりも尊敬している。

「それでですね、配属は親父のところだと思っていたんですが、何故か王子の親衛隊に配属されたんですよね。師匠そこらへん何か心当たりないですか？」

「王子の親衛隊なんて大出世じゃないのか！？俺は特に何もしてないぞ」

特に心当たりのないクリスはそう答える。

「え？いや、あるでしょう？王子ですよ？」

ジョンはクリスが王子の正体を知っていると思い込み、念を押して聞く。

「しらんがな！そんな偉い知り合いなんぞおらん！そもそも、いたとしてもうちの国って王族は成人するまで分からないだろ」

「い、一般的にはそう言われてますが・・・、本当にしらないですか？」

「さっきから知らないって言ってるだろう！」

クリスの返答を聞いて、天を仰ぐジョン。まさか自分の主が正体を明かさずにクリスと友達付き合いしていると思わなかったのだ。

「何を考えてるんだあの馬鹿王子・・・！」

予想外のことに、悪態が口をつく。何時もはそんなことしないのだが、あまりにショックだったようだ。

「おいおい、一応主人なんだろ、黒いのを隠せ！」

突如黒い雰囲気を出しはじめた弟子にクリスは驚き、いさめる。

「いいんですよ、あんな人。こっちは師匠もそれなりに事情を知っていると思って来たのに・・・」

いきなり用件に入らなくて良かった、とジョンが続ける。

友人が呼んでると言えば師匠も無碍には断らないと思うが、何も知らないで王子が呼んでると言った場合

逃げられていたな、とジョンは想像する。

「それで、その王子なんですが。我が主、ステイン王子は今年魔法学院を出て、成人の儀を終え、正式に我が国の第一王子として即位されました」

「おいまてステインと言ったか今?聞き間違いだよね?」

クリスの脳裏に、野外実習で死にかけたこと、パーティー会場を爆破しようとしたときのこと、貴族の馬鹿な子弟たちをはめたこと、王城に侵入したときのこと、その他にもステインと学生時代やらかしたことが浮かんでは消える。

「間違いありません。師匠の今頭に浮かんでいる人物ですよ」

「これは王都に行く必要がでてきたな。あいつはよく隠し事するけど、これはとびっきりすぎる！」

「よかったです。僕もそれしか言われて無いので」

クリスはいつも厄介事を持ってくるステインを一発殴るために王都へ行くと言い、ジョンはにっこりと微笑み自分の仕事が終わった事に安堵した。

「え、よかった？」

「師匠を王都に連れて来いって話でしたよ。僕が受けた命令は」

「な、なんだと・・・。どっかでなんか倒してこいとかじゃないのか。そうなると、会いにいくと厄介事に巻き込まれ、会わないとこの胸に渦巻くもやもやを発散することができない・・・！どうするべきか」

クリスは悩む。確かにその馬鹿王子は一発殴っておきたい、しかし良からぬことに絶対巻き込まれる、どうするか・・・と。

「主、何を迷う必要があるのですか？」

それまで黙って成り行きを見守っていたフウリが口を開く。

「おお！何か言い案があるのかい！？さすがフウリだね！」

「ふふ、そんなに褒められたらいろいろしちゃいますよ。それでですね、主。迷う必要は無いんですよ、どうせ何をしたって三ヵ月分の災いの神の愛が主を待ちうけてるんですから」

クリスの膝の上で眠そうにうとうとしていたフィリスを引き取りながが自慢にフウリは断言する。

「褒めて損した！！解決になってねぇ！！」

「ひどいですね主。けど、主はステインの頼み事断った試しがないじゃないですか。どうせ今回も引き受けるのでしょう？」

クリスの行動を見てきたフウリは的確に指摘する。

「あいつは断ると捨てられた子犬のような雰囲気をかもし出すからなぁ。はぁ、仕方ない」

盛大なため息をついてクリスは王都へ行きを決心する。

「よかったです。ありがとうございます、フウリさん、師匠」

ジョンは任務を達成できたことを喜び、後押ししてくれたフウリと、どんな用事かまでは王子から聞いていないが、確実に普通の人間なら命を賭けることになるだろう厄介事に巻き込まれる決心をしてくれた師匠に礼を言う。

「いえいえ、面白そうなことになりそうですので」

「今回だけだからな！！」

クリスはとこあるごとに毎回言うが、その通りにはまったくならない言葉を叫ぶ。

「それでは師匠、準備が出来次第の出発でいいですか？」

「ううむ、急だな」

ジョンの提案に、もう村でやり残した事が無いか考え込むクリス。

「それでは、明日宴でも開いて、明後日の出発でよろしいのではないかな」

今まで黙っていた村長がそう提案する。

「分かりました、そうしましょう」

「了解」

クリスとジョンが頷き了承する。

「話がまとまったようで何より。騎士さまはうちに泊まってもらとしますかの。ちと狭いですがご容赦を」

村長が立ち上がり、そう締めくくる。

こうして魔法使いは、平穏を捨て災いへと身を投じるのだった。

第五話「魔法使いの知らない裏事情」

王子の執務室に集まった面々が、その部屋の主に注目している。

年齢も様々な集まった面々は、しかし一つの志を持ってこの執務室のテーブルの席に座っている。

執務室は重い雰囲気に包まれ、誰一人として口を開くものはいない。

「皆集まっているな」

その静寂を破り、部屋の主であるスティン王子が口を開く。

「それでは会議を始める」

王子の厳かな宣言によりその話し合いは始まる。

「まずは、各々どこまで準備が進んでいるか、確認しよう。宮廷魔法院のほうはどうだ？」

王子に話を向けられた魔法院の長が口を開く。

「宮廷魔法院は、三分の二以上は私と息子で掌握しておりますが、やはり宰相派に近しい者たちも多いですからな。これ以上動くと勘付かれてしまうやもしれません」

魔法院長、グゥエン・アスクルクがそう答える。

グゥエンは白髪混じりの頭に深い皺の刻まれた顔、しかし今だ衰えない力強い目を王子に向ける。

アスクルク家は、代々続く魔法の名門貴族だが、それ抜きにしてもグゥエンは魔法院で信望を集めている。

グゥエンは誠実な男で、自身が名門貴族の出であることを鼻にかけない行いが多い。

能力の高いものが難癖をつけられて貶められるのを救ったりと、能力がない者が家柄だけで、能力のある者の足をひっぱるのがきらいなのだ。

そうして部下には能力の高い人間が多く集まり、結果魔法院の長に就いている。

宰相派とは、オーカス帝国の宰相ガルンド・アザシールを中心とする派閥である。

ガルンドは元々、前宰相の補佐をしていたのだが、前宰相とその有力な派閥後継者が相次いで死に、後を次ぐ形でその地位についた。

そうして、王妃が死に王が後宮に引き篭もりがちになると、その権力を使い好き勝手をし始めたのだ。

その甘い汁を吸おうとする貴族によって、一気に宰相派は大きくなった。

今では政治だけでなく、騎士団や魔法院にまで派閥があり、気づくと誰も止める者がいなくなっていた。

「魔法院のほうは、そこまで押さえられれば十分だな。数でも質でも勝っているのであろう？」

王子はグゥエンの言葉を聞いて一度頷き、確認をとる。

「勿論です。もしもの時でも、家柄だけしか取り得の無いものに負けることはまずないでしょう」

グゥエンはその力強い目で、自身満々に言う。

「ならばよし。次は騎士団だな」

その質問を向けられたのはマッシュ・タリエルーエ。

第二騎士団の長であり、王子の近衛騎士、クリスの弟子でもあるジョンの父親に当たる。

マッシュは成人してからずっと常に第一線で活躍して来た騎士だ。

彼は最近ではほとんど戦場にも出ず、たまに行われるちゃんばらごっこを演習と呼ぶ騎士団を憂いていた。

そんな折に、息子経由で王子に呼ばれ、その考えに賛同し、この会議に参加している。

「こちらはほとんどが宰相派に属しているようなものですからな。第二騎士団は私の指揮下なので問題ないですが、あとは第四がこちらにつくかどうかというところでしょうね。他のところは宰相につくと見て間違い無いでしょう」

騎士団は貴族の数が多く、宰相派の人間が必然的に増え、今ではかなりの数に達している。

そうして、実力よりも家柄が重視される傾向に拍車がかかり、今では騎士団と言っても装備がいいだけというのが共通認識になっていた。

「やはりか。いざというときは傭兵がいるが、第四騎士団に関しては引き続き取り込み工作を頼む」

「はっはっは、武以外のことは苦手でしてな、期待せずにお待ちください」

王子は想定された答えに、しかし落胆したように答える。分っていたこととはいえ、国の戦力の要でもある騎士団も政治の力が入り込んでいる事実を突きつけられ、やり切れないといった様子だ。

その王子の気持ちを読み取り、マッシュは殊更明るく答える。

その答えを聞いて、王子は少し笑うと別の方に顔を向ける。

「軍のほうはどうなっている?」

王子に顔を向けられた男、タール・エンダールは緊張したように答

える。

「軍の方は、混乱に乗じて帝国やグルーモスに攻め込まれないために国境方面の守備強化を行っています。宰相が帝国と繋がっているという噂もありますから」

タールは年若く、家柄だけで軍の高官になったような男であるが、自分自身その出世をよしとせず、その地位に見合うように努力をする人間だった。

この中では、王子を除き一番年少のため、何度も参加している会議だが、毎回緊張している。

「なるほどな。派閥は大丈夫なのか？」

「軍は騎士団ほど貴族の比率が高くないので、政治色もその分薄いですから」

他の中央にいる軍高官は仕事をほとんどしないため、タールの意見は自動的に採用されることが多い。おかげで軍をある程度好きに動かすこともできた。

「よくわかった。後は宮廷内はどうか？」

タールの言葉に頷いた王子は、次に宮廷内で調査を頼んでいる、ローア・コンクルールに話を向ける。

ローアは国の財務を担当する貴族の一人であったが、宰相派の使途不明金に容赦しなかったためにその不興を買い左遷され、今は国の図書を管理する仕事をしている。

本人は今の仕事も気にいっているのだが、未だに残る宮廷内のネットワークに目をつけられ王子に引きずり込まれた。

「宮廷貴族もほとんどが宰相派ですが、下の者は多くがその被害を被っておりますから、やつらの不正の数々の証拠も続々と集まっております」

「そちらは順調か。重要となるからな、しっかり頼む」

「お任せを」

こうして会議は進んでいく。

全ての確認が終わり、これからの行動指針を告げた王子は、皆を見回す。

「さて。父は王としての志を失い、国は一部の者が好き放題。私は王族として、この国を想う一人の人間として、これ以上この状況を座視することはできず、想いを同じにする皆に集まってもらったわけだ。それから何度も会議を重ね、そしてようやく動ける段階まできた。少ない時間でよくここまでやってくれた。あとは実行するだけだ。しかし、宰相も馬鹿ではない。何かしら準備をしているだろう。しかしやらねばならぬ！皆の一層の忠誠を願う！」

（後少し、後少しでお前を外の世界に出してやれるからな）

動乱の時が近い。

「む、何かものすごく嫌な予感がする。やっぱ帰るか・・・」

「馬鹿言わないで下さいよ師匠。あんなに盛大に送り出されたのにすぐ戻ったら、赤っ恥かきますよ？」

「それに予感も何も、厄介事に巻き込まれるのは決定じゃないですか。今更どうこう言っても仕方ないですよ。私はフィリスに都会を見せれるのが嬉しいですけどね」

「いっぱい、ひといる」

「む、それはあるか。人もいっぱいだし、おいしいものもあるし、綺麗な服もあるぞ」

「服は私が気に入ったのを作ってあげますからね」

「い、一応王子の命ということを忘れないでくださいね？観光は後ですよ？」

「スティンなんてちょっと待たせてもいいんだよ！馬鹿弟子はフィリスと命令とどっちが大事なんだよ！？」

「そうですね。フィリスの情操教育に勝るものがあると言うなら言ってみなさい。その命を賭ける覚悟があるならですが」

「し、仕方ないですね。先に観光しましょう。まぁこんな無茶をやらされたんですから、少しくらい寄り道してもいいでしょう」

「わかってるじゃないか！そのまま海外旅行に行くか！」

「それはだめですよ！？もう諦めてください」

「お前は俺に何を諦めろといってるんだあああ！命か！？命なのか！？」

ほのぼの魔法使い一行が王都につくまであと少し。

第六話「魔法使いの思い」

「しかし、師匠も隅におけませんね」

街道をのんびりと歩いていると、ジョンが思い出したかのようにクリスに話しかける。

「いきなりどうした、馬鹿弟子」

クリスは、ジョンの横でフィリスと手を繋いで歩いている、フィリスはもう片方の手でフウリと手を繋いでいる。

「いやいや、師匠が王都に行くと知れ渡ったら、女性が師匠の家に来て話してたじゃないですか」

かなりの美人さんでしたね、とジョンがニヤニヤ顔をクリスに向けて言う。

ジョンはこの道中での扱いがどうにも気に入らないのだ。

魔物に襲われたときにクリスがジョンを気遣うように動くので、ジョンからすれば未熟者扱いされている気がするのだ。

フウリはともかく、フィリスにもほとんど気を配らずに戦闘をしているのになぜ自分だけ、とジョンは思っている。

なので、クリスを困らせようと思い、ジョンの先の発言がある。

「ん？リリィのことか。話をしたというか、一方的に怒鳴り込んで

きたというか」

「またまた、師匠といい関係だったんじゃないですか？」

特に気に止めた感じではないクリスに、フウリを気にして無理にポーカーフェイスを保っていると思ったジョンはニヤニヤと追い打ちをかけるつもりで言う。

「とは言ってもなぁ。ちょっと話したら、なんで私こんなに勢い込んできたんだろうって首かしげて帰ってったぞあいつ。俺が知るかっての！前回みたいに黙って出て行くわけでもないのに。そもそもなんでお前そんなニヤニヤしてんだ？」

リリィがその謎を分かる時が来るのか謎である。

「おそらく、道中ずっと主に気を使われいたことに気づいたのでしょう。それくらいには弟子も成長しているということですよ、主」

本当に訳がわからないといった感じに首をかしげるクリスに、フウリが的確にジョンの内心を言い当てる。

「む、そうなのか。成長したなぁ、前は全然気づかなかったのに」

「まったくですね。主は過保護ですからね」

二人が逆にニヤニヤとジョンに視線を向ける。

あたらしいおもちゃを見つけたようなその視線に、ジョンは即座に自分の発言が間違いだったことに気づくも後の祭りである。

「あのギルドのチンピラに絡まれておろおろしてたジョンがなぁ」

「まったくですね。戦場でいろいろなものを体から流しながら、必死に主の後ろをついてきていたのがついこの間のことのような気がしましたが。人間の成長とは早いものですね」

クリスとフウリは、まるで道行く人たちにも聞こえるかのような音量で隣を歩く王国の印を纏った男の過去を暴露する。

最初は我慢していたジョンだが、段々と内容がエスカレートしていく。

「もう勘弁してください」

結局、ジョンが音を上げるまでその暴露大会は続いた。

「しかし、ジョンもそこまで成長したか、師匠として嬉しいぞ。うん」

「もう勘弁してくださいよ！」

クリスが頷きながら言った言葉にジョンがまたからかわれるのかと、焦ったように向き直る。

「いや、本当に。昔は余裕なんて毛ほどもなかったろ」

「まぁ確かにそうですね、言われてみれば焦っていたのもあったとおもいますが、周りを気にする余裕なんてなかったですね」

やたらと難易度が高い依頼ばかりを受けていたクリスに、ジョンはそれまで王都からほとんど出たことが無かったので、それはもう大変な思いをして必死について行っていた。自分と年齢が近い、それも魔法使いにまったくついていけないというのはジョンのプライドが許さなかったのだ。

「それが今ではしっかり余裕をもって周囲を観察できているんだから、三ヶ月ちょっとの間の成長を感じれたよ」

「騎士団に入って、父の言ってることが身にしみてわかりましたしね。あそこはいるだけで腐っていきそうなので、自分なりに努力もしたんですよ、一応」

王子の近衛騎士となったジョンは、騎士団を社交場と勘違いした貴族を相手にすることが多くあり、こんなところではいつも何かしらの厄介ごとに巻き込まれている師匠に置いて行かれるばかりだと考え、必死に努力をしていた。

「その意気で頑張ってくれよ、弟子！俺が育てたって胸張って言えるくらいに！」

「はいはい、頑張らさせていただきます、師匠」

この三ヶ月をクリスに評価されたことが嬉しいジョンはそれまでが嘘のように、上機嫌に歩を進める。

「しかし主が弟子に気をつかっているのは昔からですが、フィリスは戦闘中でもあまり心配しませんね？」

「いやだってフィリスはなんだかんだで高位精霊だからなぁ、俺が心配してもどうにもならんし」

「ふぃりす、つよいよ」

夜、街道沿いの村の宿の部屋で、ランプの光が揺れる中、二つのベッドに腰掛けたクリスとフウリが向いあって座り話をしている。

フィリスはフウリの膝の上で上機嫌にクリスを見上げている。

「そういうところは相変わらずですね、主。フィリスが強い子というのには同意ですが」

「そもそもジョンも心配し過ぎるのはいかんなと反省したところだし。しかしあれはもう癖みたいなもんだからなぁ」

口ではいろいろ言うが、自分のことを師匠と呼んで慕ってくれているジョンのことを心底大事に思っているクリスは、弟子入り当初からいろいろなことに気を使って面倒をみている。

戦闘中も毎度ついつい視線を向けてしまっていたのだが、とうとう気づかれたことにクリスとしては嬉しくもあり、少し寂しくもある。

「主は心配事が多いですからね、減らしていかないと大変なことになりそうですね？」

「これから先のことを考えると心配でなりませんフウリ先生」

フウリの心配そうな声を察知したクリスはわざとおちゃらけたように手を挙げて答える。

「ふふ、大丈夫ですよ。何かあっても私とフィリスが守ります」

「おとうさん、まもる、よ？」

二人に守ると言われて、難しい顔で上を向くクリス。

「うぅむ。守られるよりかは守りたいんだけどねぇ、男としても、父としても」

「精霊封じでも使われれば主に頼るしかないですが」

「あれ？昔単独で脱出してるフウリを見たことがあるよ？おかしいね！」

「ふふ、あれの百倍ほど魔力がこもっているものなら少し足止めされてしまいますよ？」

「あれの百倍でも時間かければ単独なのかよ・・・」

いつものごとく、嘘か本当かわからないことを言うフウリに、クリスはげんなりと足元を向き、ブツブツと呟く。

「しかし主、男としても父としても、ですか？」

「おっとそろそろ寝ないとな」

面白そうにフウリはクリスに向けて笑顔を向け、クリスはしまったという顔をして、急いで毛布にくるまり横になる。

「ふふ、ごまかしてもダメですよ、主。私も身の危険を感じないといけませんね？」

「おい、どういう意味だ！」

眠そうにしているフィリスをベッドに寝かせて、自分も一緒にベッドに入り、フウリは体をクリスのベッドのほうに向け、わざとらしく身をよじる。

それを見てクリスは毛布を跳ね上げ声を荒げる。

「ああけど、主が守ってくれるのでしたか。しっかり守ってくださいね、期待していますよ」

「くっ、もう知らん！寝るぞ！」

フウリは落ち着き払って、しかしどこか可笑しそうにクリスを見て、クリスはそんなフウリを見て毛布を乱暴にかぶりなおす。

そうして、精霊の風が静かにランプの炎を消す。

「ふふ、本当に期待してますよ？」

果たしてそのつぶやきは魔法使いの耳に届いたのか。

夜は更けていった。

第七話「魔法使いのお買い物」

クリスたちの前には大きな壁がそびえ、門は多くの人が行き交っている。

「やっと着きましたね、行きは馬だったので、歩きでの帰りは長く感じました」

ジョンが村まで乗ってきた馬は今、皆の荷物を積んで引かれている。

「さてまずは師匠に顔見せに行かないといけないな」

「それでは先に学院に寄って主のお師匠さまにフィリスを紹介した後に観光しましょう」

「ついでに変なもの食べて進化した魔剣も見せないとな・・・」

「拾い食いをさせてしまいましたからね」

「フィリスはそこらへんの転がってる魔力とか食べちゃだめだよ！」

「うん、わかった」

クリスとフウリが王都での予定を立てる一方で、ジョンは何か言いたそうに二人をちらちらと見ている。

「宿も取らないといけないな、これからじゃそんなに見て回れないからな」

「そうですね、いい部屋を取りましょう。王都は夜も綺麗ですからね」

ジョンを無視して二人はどんどん予定を決定していく。

「師匠！観光はいいですが、今日中には一度城へ行きますよ！あと滞在場所は僕の実家の客室がありますので、勝手に宿を取らないでくださいね！」

放っておくと目的を忘れて観光しそうな親子に、ジョンがたまらず会話に割り込む。

「ちっ、うるさい弟子め！あんな馬鹿王子少しくらい待たせてもいいだろう！」

「王都に入ってその日に会いにいかなかったら、下手したら僕の首が飛びます！あれでも王子なんです！偉いんですよ！？分ってます！？」

「あーはいはい、分かった分った」

ジョンの叫びに、めんどくさそうに手を振って答えるクリス、会話の内容が内容だけに周りの注目をかき集めつつ門をくぐったのだった。

「ひといっぱいいる」

目を輝かせてフィリスが大通りを見ている。

ジョンは実家に顔を出しに行き、観光が終わったら合流する事になった。

クリスたちは王都に入ってすぐに学院へと足を伸ばすも、師匠は最近新しく発見された遺跡に調査へと国の依頼で出ていて会えずに終わり、その足で大通りへと繰り出した。

大通りには露店が並び、話し声や客引きの声、値引き交渉の声、果ては怒声まで入り混じりそれら全てが通りを賑やかに彩っている。

フィリスは村とは違うこの空間のあらゆる物に気を引かれ、放っておくと飛んでいってしまいそうなほどだ。

クリスとフウリが手を繋いでいても、あっちへふらふら、こっちへふらふらと二人を引っ張るほどの勢いで興味のある物に突進している。

「おっと」

「わふ」

フィリスは無軌道な動きを繰り返し、クリスとフウリが上手く手を引っ張って人にぶつからないようにしていたのだが、さすがに通りの通行量は多く、運悪く商人風の男に当たってしまう。

「すみません！」

「申し訳ございません」

「いえいえ、気にしないで下さい」

クリスとフウリが即座に謝り、男も人のいい笑みで手を振り返す。

「フィリスも謝りなさい」

「ごめんなさい」

クリスに言われてフィリスも頭を下げて謝る。

それにも男は笑みで返し、そのまま歩いて去っていく。

その背中に再度謝罪をしてクリスたちは、今度は流れに逆らわずに進んでいく。

「しかし、最近では商人も精霊と契約しているものなのですね」

「さっきぶつかった人か？身のこなしは商人って感じじゃなかったけどな」

「せいれいがついてた」

ゆったりと歩きながら三人は先ほどぶつかった男について話し合う。

「まぁ最近は街道にも魔物が多いっていうし、自衛できるくらいには鍛えてるのかもしれないな。それはそうと次はどこ行く？」

「もう少し露店を見て回りましょう。露店は少し少ないようですが、

何かフィリスに合う物があるかもしれません」

「おいしいものたべたい」

フウリは、先ほどから露店の串焼きを夢中で食べているフィリスに目を向ける。

フィリスはその視線に気づいて顔を上げ、更なる美味を要求する。

「俺も師匠に貢物を買わないと！」

「主はそんなにお金をお持ちでしたか？」

「え？ええっと、ないかな！」

クリスは無意味に胸を張り、フウリはそれを無表情に見つめる。

「威張らないで下さい。お師匠さまに貢ぎすぎです。無理をしてプレゼントされても喜ばないでしょう？」

「う、うん。っていうか俺の財布がすっからかんなのになぜフウリは買い物できるし」

フウリはお金を欲しがるということも滅多に無いので、財布なんて持って無いないと思ったクリスは先ほどからたまに出てくるお金の謎に言及する。

「主の財布の紐がゆるすぎるのには以前からなので、甲斐性の無い主には黙って、へそくりをしていました」

当然とばかりに、フウリは言い放つ。

「甲斐性が無くてすみませんね！っていうかさっきから高い露店ばっか覗いてるけど、そのへそくりいくらあるの？」

「他所の女に貢いだ挙句、嫁のへそくりに手を出そうというのですか。主はダメ亭主ですね」

「おい、天下の往来でそういうこと平気で言わないでくれる？視線がものすごい痛いんだけど」

周りから質量があると錯覚するほどの視線を浴びて、クリスは俯き加減で小声でフィリスに話しかける。

「これに懲りたら散財もほどほどにしてくださいね」

「はい、すみません」

クリスは肩をがっくりと落とし、フウリとフィリスが仲良く手を繋いで露店を見て回る後ろにくっついている。

「このペンダントはフィリスに似合いそうですね、どうですか？」

「うん、似合うんじゃね、ってかなんか加護っぽいものが」

「掘り出し物のようですね」

フィリスが甘味を食べている横で両親がぼそぼそと話し合う。

「お客さんお目が高いですね。それは帝国の遺跡で見つかった物なのですよ」

二人に気づいた商人があからさまな笑みを湛えて話しかける。

商人には、田舎の若い夫婦が都会に来た祈念に娘に何かプレゼントしようとしているように見えたのだ。

フウリとフィリスはいいモノを着ているが、クリスは服装には無頓着なため、着ている物は少しみすぼらしく見える。そのため、嫁と娘に奮発して服を買ったのだろうと商人は判断した。

実際は、クリスの着ている物は変な加護が掛かっていたり、呪われているが性能の高い物など、曰くつきで下手に繕うこともできない、出すところに出せばいい値がつく物なのだが、露天商はさすがにそこまで見抜くことはできなかった。

「ほほう、帝国の遺跡と言えば珍しい物が多く出ますからね」

「訳の分からない物が大半を占めてるがな！」

クリスは実感の篭った言葉を吐く。

商人はクリスのまるで体験したことがあるような言い振りに首をかしげながらも、二人がある程度知識があることを確認して、セールストークに入る。

「確かに呪いが掛かっている物などもたまに出ますが、大半はすぐに見つかり処分されます。それにこれは、ほらこの通り、私がつけても特に何もありません。なによりこのデザイン、今の技術では再

現できないほどに凝った細工は、王都でもなかなかお目に掛かれませんよ？」

露天商は実際に自分の手に取り、説明することによってそれに呪いの類が掛かっていないことを説明し、希少性を謳ってこれを逃したら手に入らないことをアピールする。

対して二人は慣れたもので契約を通しての会話で作戦会議をしている。

『加護については気づいて無いようだな』

『そうですね、どうにも特殊なもののようですが。帝国からということは、あまりよろしくない物であることも大いにありそうですが』

『ふむ。しかし、デザインは良いからな、ろくでもない加護なら無力化すればいいし。なんにしても安く買えたほうがいいよな』

『そちらのほうがいいですね。主のお金ではないですが』

『どうも、自分の精霊より貧乏な魔法使いです。っていうか、妙に変な気配のする物も置いてあるな。よし！』

『腹黒値引き交渉ですね、さすが主』

二人が黙って自分の手にあるペンダントを見ながら考えているので、後一押しで売れるだろうと商人は考える。

しかし、その考えは一瞬で崩れ去る。

「私、魔法学院を先ごろ卒業しまして。在学中には遺跡に何度も潜

って、そのような品々も拝見する機会がありました。呪われた物にも当たったことがありまして」

若い父親の雰囲気が一変したことに商人は驚き、その発言の内容に先ほどの妙に実感の篭った言葉に納得する。

「確かにそのペンダントは装飾も素晴らしく、呪いの類もありませんね」

並んでいる商品を一瞥し、妙に迫力のある微笑みを向けてくるクリスに、商人は嫌な汗を流す。

「しかし、いくつかの商品には・・・」

そこで言葉を切ってじっくりとクリスは商人を見つめる。

商人は考える、この客をどこまで信用していいのかと。
全部嘘ならば、自分は痛まないで済む。
しかし、この言葉と仕草が本当なら、自分の商品には何点かいわくつきのモノがあり、それを売ってしまえば信用が地に落ちる。
少し前に、取引のあった帝国の商人から紹介してもらった男から仕入れた物はどれも凝った装飾で素晴らしい物だが、如何せん初めての取引相手であるし、少しの胡散臭さもあった。
そして目の前の若い男は何故か信用出来そうな、そんな商人の勘ともいうべきものが働いた。

そして商人は決心する。

「こちらの商品はお譲りします。ですのでよろしければその他の商品を見てもらってもよろしいですか?」

この発言には当の本人であるクリスも驚いている。

少し値引きしてくれればめっけものと思っていたのに、タダになるとは思ってもいなかったのだ。

『どうやら取引相手が信用できるところはないようですね』

『そうかもな、まぁタダになるんだし、しっかり鑑定しよう』

二人は結論を出す。

「こちらとしても有難い限りです、それではここに並んでいる物だけでよろしいですか？」

「裏にもありますので、そちらもお願いします」

そうして全てを鑑定し終わったクリスは、疲れたようにため息を吐く。

数点のいわくつきの物があったからだ。

それも、遺跡から出た物ではなく、最近作られたような物が多く、クリスのつけている指輪の錬金前の劣化版のような性能の物が大半であった。

身につけていても一般の人間ならそこまで違和感がないだろうラインで調整されているような、魔力吸引機能だけがついた物で、デザ

インはよかったのでクリスはその機能だけ破壊していった。
商人はクリスの話を聞いて感謝し、ペンダント以外にもお礼をしたいと言い、クリスはいくつか壊す前の状態の物を頂いて露店を後にした。

フィリスの胸元には巧みな細工が施されたペンダントが揺れている。
大層気に入ったようで、フィリスはペンダントを弄りながらご満悦だ。
クリスとフウリがその様子を見て和みながら会話をしている。

「なんかきな臭い物が出回ってるなぁ」

「そうですね。主はお師匠さまに鍛えられてますが、商人にはなかなか分かる物ではないですね」

「たしかに、身につけただけじゃ分からんしなぁ」

「いっそのこと主が商人でもやってみますか？」

「俺が商人なんてやったら、他所がみんな潰れちゃうじゃないか！」

「主は商品を貢物にしそうですね。とりあえず、そのような妄言は私より資産を増やせてから言ってくださいね」

「はい・・・」

これ以降おとなしく荷物持ちに徹したクリスの両腕には、これでもかと言うほどの荷物がぶら下がる。

結局、合流時間を大幅に遅れた一行は、魔法使いの両手に荷物を満載して弟子の実家へと向かうのだった。

第八話「魔法使いと王子」

「ありえません！」

ジョンは先ほどから繰り返している言葉を再度、隣を歩くクリスに向ける。

「約束の時間からどれだけたっていると思っているんですか！」

「けど会うのはステインだろ、別に少しくらい・・・」

「あれでも！王子！なんですよ！」

城の廊下を言い合いながら早足で歩く二人組に、すれ違う人は例外無く振り返る。

フウリとフィリスは見えないようになって二人の後ろをついていっている。

「大声であれでもとか言うな！ああこいつちょっと頭があれなんですよ。気にしないで下さい」

「だれが頭がおかしいんですか！？」

振り返って凝視してきた貴族らしき人物に、クリスは隣を指差しながら愛想笑いを浮かべ弁解するが、それにすらジョンは立ち止まって噛み付く。

怒りでどこを歩いていたかも忘れているようだ。

そんなジョンをクリスは先ほどからなだめすかしている。

「悪かったって。そんな怒るなよ。ほら飴やるから。今度剣の稽古にも付き合うからさ」

「し、仕方ないですね。今度から気をつけてくださいよ」

実地ばかりでこれまで師匠に稽古をつけてもらうことがほとんど無かったジョンは、クリスの提案を聞いてさっきまでの怒り様が嘘のように歩きだす。

クリスは弟子がやっと平常心になったことにそっと息を吐いた。

「ここが王子の執務室です」

暫く歩くと大きめの扉の前で止まり、ジョンは部屋の前にいる同僚に挨拶しつつ要件を伝える。

「この時間ならぎりぎりここで仕事をしているみたいですね」

そう言いながら、扉をノックする。

暫くの間があって中から返答がくる。

「何用か」

「ジョン・タリエルーエです。クリス殿をお連れ致しました。お目

通り願います」

「入れ」

部屋の前で成り行きを聞いていた騎士が扉を開ける。

「ご苦労だった、ジョン。そして久しぶりだな、クリス」

ステインが執務机から振り返り、入り口に立つ二人に向かう。

ジョンはその言葉に礼で返し、クリスは扉から入ってそのまま止まらずにステインに向かってつかつかと歩いていく。

そうして、ステインの前まで来ると快音一発、脳天にゲンコツを浴びせる。

「この馬鹿ステインが！何が久しぶりだな、だ！！お前がふんぞり返ってる姿なんぞ見たくなかったわ！！」

「お、おい！久々に会った親友にこの仕打ちはなんだ！それに自国の王子を殴るとは何事か！」

「だまれ！ステインのくせにえらそうにするな！正座しろ正座！」

王子の座る椅子を蹴たぐって、床に正座させるクリス、ステインは涙目で正座する。しかし、自分が王子だと分かっても変わらないクリスの態度に嬉しそうでもある。

「ったく。ちょっと王子さまやってるからって調子に乗るなよ！何偉そうに呼びつけてやがる、いじめるぞ」

「わ、悪かった。しかしさすがに私自らと言うわけにもいかなくてだな・・・」

床に正座しつつ、捨てられた子犬のような目でクリスを見上げるステイン。

「おーおー。王子さまですもんねー。俺は知らなかったけど！」

「き、決まりで言えなかっただけだ！」

「けっ。何人かは知ってたみたいじゃねぇか」

「あいつらは家柄的にだな」

オーカスの王族は一般的に成人するまでは一部の人物を除き容姿すら分からないものだが、宰相は勿論知っており、その派閥の人間の子供で魔法学院に所属している者も取り込みのために親から知らされていたので、学院ではほとんど公然の秘密扱いであった。

しかし一定の知り合い以外とほとんど話さなかったクリスは、勿論知らなかったし、聞いたとしてもそれを信じなかっただろう。クリスにとってステインは、弟分的な存在であり、それが王族と言われても鼻で笑うのがせいぜいである。

「俺の親友のステインは家柄で差別するようなやつじゃなかったなぁ」

「む、むぅ」

困ったようにステインが唸る。

それを見たクリスがため息一つ、口を開く。

「で、何で王都までわざわざ呼び出したんだ？」

その言葉を聞いてステインは目を輝かせる。

「ゆ、許してくれるのか！」

ステインは立ち上がってクリスの肩を掴む。

「くだらないことで呼んだならゆるさん」

「も、もちろん。とても大事な用件で呼んだのだ」

ステインは椅子に腰掛け無理やり威厳を出そうと足を組む。

「終わりました？」

王子が落ち着いて話出そうとしたところで、先ほどから目を瞑って耳を塞いでいたジョンが片目を開けて質問する。

王子に無言で歩み寄って行く師匠に、瞬時に見ざる聞かざる言わざるを選択したジョンは、落ち着くまで息を殺して待っていたのだ。

「ほう、そこにいるのは忠義に厚い我が近衛騎士殿ではないか」

「いやいや、こればっかりは師匠に言ってなかった王子が悪いと思

いますよ僕は。貴族内ではほとんど公然の秘密みたいになっていたんですから、親友には話してるものかと思いましたよ。おかげで任務失敗しかけたんですから、勘弁してください」

「ところで用件なのだが」

状況がよろしくないと分かった瞬間に、ステインはジョンからクリスに視線を動かす。

「その前に。ジョン、任務ご苦労だった。下がって良いぞ」

「はっ。それでは失礼致します」

ジョンは先ほど騒いでいたのが嘘のように、綺麗な礼をして王子の執務室を後にする。

「ジョンには聞かせられない話なのか」

「そうだな、極めて個人的な願いがあってな」

ジョンの後姿を見送り、クリスが話は脇にあった椅子に腰を掛ける。

「実はな。近々城の風通しを良くしようと思ってな」

「風通し？」

「うむ。簡単に言えば、粛清というやつだな」

ステインは物騒な言葉を平然と言ってのける。

「粛清ねぇ。宰相か」

「やはり知っていたか」

「まぁ昔から市井でも宰相のことは結構有名な話だからな、俺みたいな一般人でも予想はつくな」

「いっぱん・・・じん・・・？」

明らかにおかしな単語で自分を形容するクリスに、ステインは信じられないものを見るような顔を向ける。

「さて、帰るか」

「ま、まてまて、冗談だ」

本当に背中を見せるクリスに慌ててステインはその袖を掴む。

「はぁ。で、俺にそれを手伝えって？」

座りなおしたクリスはため息を吐く。

「そちらのほうは、準備も万端なのだがな。先ほども言った通り、個人的に頼みたいことがある」

真剣な顔でクリスを見つめるステインに、クリスも自然と真剣な顔で向き合う。

「去年の今頃のことを覚えているか？」

「お前が城に忍び込みたいって泣きついてきたときのことか」

クリスはそのときの出来事を思いだして苦い顔をする。

「そのときに行った場所を覚えているか?」

「王さまの騎士が周りを固めてた塔か・・・」

なんとか忍び込んだことを思いだし更に苦い顔をする。

「うむ。事が起こったらその塔へ行ってそこにいる私の妹を助けて欲しい」

「ん?妹?」

「うむ、妹だ。実はあのときは誕生日プレゼントを渡すために忍び込んだのだ」

まさかの話にクリスは頭の回転が追いつかず口を開けたり閉じたりを繰り返す。

「諸般事情があってな。私の妹は父、この国の王によってずっとあの塔で生活しているのだ」

「事情ねぇ」

クリスが立ち直ったころあいを見計らってステインが話しだす。

「うむ。妹が生まれるのと引き換えに母が死んでな。父は母を深く愛していたからな、それが原因で妹を塔から出さないのだ、災いの子だと言ってな。ただ、さすがの父も羽が生えた子供を殺そうとは思わなかったようだが」

「羽ねぇ。で、そのお姫さまをなんでまた俺が」

羽の生えた王族、それもお姫さまという類に、いい思い出のないクリスは微妙な顔を作る。

「私が動くわけにもいかんしな。まずは宰相派の排除が絶対なのだ、この国を治める王族として私情は挟めぬ。なので親友にお願いしようとな」

「なるほどな。ステインのくせに考えて行動してるんだな。仕方ない、その願いを聞いてやろう」

「王子の私より偉そうだな」

昔から、何かと無茶を言うステインに、似ても似つかないのになぜか故郷の弟が重なって見え、言うことを聞いてきたクリスは、またその無茶振りを了承する。

今回はそれだけでなく、ステインの話を聞き、力になってやろうと思ったのもある。

「ふん。王子だろうがなんだろうが、ステインはステインだからな。その妹を助ければいいだけの話だろ。まかせとけ」

「そうだな、我が親友ならそのくらい朝飯前だよな。しかし、宰相が帝国と絡んでいるという話もある。追い詰められたら何をしでかすか分からない。それが妹に向くかもしれない。どうかよろしく頼む・・・！」

こうして魔法使いは親友の願いをかなえるために動き出す。

第九話「魔法使いの財布」

その後、ステインと少し話をして部屋を出たクリスは、部屋前で待機していたジョンと共に城を後にしようとした。

「そこにいるのは王子に取り入って騎士になったジョンじゃないか」

クリスとジョンはその声を聞いて、明らかにうんざりしたような顔をして、無視して歩き去ろうとするが、綺麗な鎧を着込んだ騎士に阻まれる。

「ジョン、目上の人間の前を挨拶もなしに通ろうなんて、君は本当に騎士なのかい？まぁ所詮、君には礼儀作法は難しいか」

嫌味たらしくジョンを見るその騎士に、ジョンは明らかに侮蔑の顔を向ける。

そしてクリスは、その騎士が自分を眼中に入れてないことを察知すると徐々に気配を消していく。

「これはこれは、栄えあるオーカス王国第五騎士団のラストフ・ストロースさまではないですか。何か御用ですか？生憎腹痛に良く効く薬は持ち合わせておりませんが」

ラストフの家は代々国の政治を司る家系で、宰相に近しい人物であり、息子を騎士団に入れることによってその勢力を伸ばそうと画策した。

結果、ラストフは派閥の力で第五騎士団に所属し、剣の腕もなければ指揮官として優秀なわけでもないのに、副団長という地位に収ま

っている。
一度、王子の近衛になったジョンを取り込もうと接触したが、けんもほろろに断られ、逆上して決闘を申し込み、決闘前に派閥の力で小細工をしたりしたのだが、決闘当日に軽くジョンにひねられたという過去を持つ。
それ以来、何かと言い掛かりをつけてジョンにちょっかいをだしているのだ。
ちなみに、ジョンが王都中で好き勝手する第五騎士団に下剤を盛ったときに一番に被害を受けている。

「なっ！だれが貴様に薬など無心するものか！ただ、貴様が小汚い平民を連れていたのが見えてな。由緒正しいオーカスの騎士、それも王子の近衛騎士がそんな者を城に入れるとはまったく教育がなってないな。仕方ないから私が騎士というものを教えてやろう」

「ふむ、お言葉ですが、ラストフ副団長。その小汚い平民とはどこにいるのですか？気のせいならばいいのですが、私にはそのような者がこの近くにいるようには見えないのですが。もしかして幻でも見たのではないですか？よろしければ、良い薬屋と良い医者を紹介いたしますよ？」

ふんぞり返るラストフに、ジョンは周りを見渡し問いかける。

クリスは既にフウリとフィリスと共に空の上から、風で拾ってくるジョンとラストフの話し声を聞きながら、ニヤニヤとその様子を観察している。

「な、何を馬鹿な！？貴様の隣に・・・」

「いやいや、私はずっと一人だったのですが。困りますねぇ、脳内

で架空の人物をでっち上げて、それを叱責の的にして指導すると言われても。いや困った、宰相さまにでも相談しないといけませんかね」

うろたえるラストフを見てジョンはニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべ挑発する。

「貴様！図に乗るなよ！先ほどの小汚い平民を出せ！」

「さすがの私も魔法使いではありませんので、ラストフさまの脳内にいる人物を現実にお出しすることはできません。まぁ、宮廷魔法院の方でもできるとは思いませんが。申し訳ございませんが、その騎士としての指導でしたか？それはまたの機会にお願いしたいですね、是非、ラストフさまの医者通いが終わった後にでも」

「貴様っ！！」

顔を真っ赤にしてわめき散らすラストフに当然注目も集まり、かなりの数の人間が二人を遠巻きに囲っている。

それを確認しながら、更に挑発を繰り返すジョン、他の貴族の前でそこまで言われて引けないラストフは剣に手をかけようとする。

「しかし、よしんばその平民とやらがいたとして、オーカス王国第五騎士団副団長さまともあろうお方が、一瞬で見失うというのはいかがなものか。何でしたら、私がまた稽古をつけて差し上げますよ？」

以前の決闘騒ぎで、まるで赤子の手を捻るかのように負かされた記憶がラストフの脳内で思いだされる。

剣から手をはずし、ラストフは真っ赤な顔でジョンを睨みつける。

「ふんっ！いつまで粋がっていられるものかな！私の権力でお前ごとき騎士をやめさせることもできるのだぞ」

ジョンにその真っ赤な顔を近づけ、ラストフは脅すように高圧的に言う。

「それはそれは。また脳内のお話でございましょうか？騎士を辞めさせることのできる人物とは、王と私の直接の主である王子だけですが。はて、ラストフさまは王になるおつもりなのですか？いけませんよ、城でそのような物騒な冗談を呟かれては。今までの発言が本気ならば私はあなたを切らないといけなくなってしまう」

もちろん全部ラストフさまの脳内でのお話ですよね、とそこだけボリュームを下げてジョンが剣に手をやりつつ呟く。

「あ、ああ。冗談だとも」

ラストフは周りの目を気にして、小声で呟く。

「ならば良かった。しかし今度からはもう少しうまい冗談を言うことをお勧めいたしますよ、何でしたらそちらの講師もご紹介いたしましょうか？冗談のような人生を歩まれている方でしてね。ラストフさまには少々小汚い平民に見えてしまうかもしれませんが」

怒りに震えるラストフに対し、ジョンは剣から手を離しさわやかな笑顔で対応する。

「おっと。ラストフさまにはもう少しご指導のほどを受け賜りたかったのですが、少々騒がしくなってしまいましたのでまたの機会にお願い致します。それでは」

笑顔のまま周りを見回して、最後にラストフに礼をして颯爽と去るジョン。

その後姿をラストフは、形容のし難い表情と真っ赤な顔、怒りに震える体で見送った。

そうして、城の門を出たあたりで、降りてきたクリスがジョンに合流する。

「口も達者になったなぁ、ジョン」

「ああいうのの相手ばかりしてましたので」

ジョンはうんざりとした顔で話す。

先ほどの事は少しやりすぎかとも思っていたのだが、師匠を小汚いなどと言われて自制があまり効かなかったのだ。

「とりあえず、僕の家に行きましょう。王子になにを頼まれたか知りませんが、今日はもう動けないでしょう?」

日の沈んできた空を見てジョンが判断する。

「そうだな。まぁいつになるのかよく分からないから、当分世話になるかもしれん」

「うちは大丈夫ですよ。父も兄も喜ぶでしょう。特に父は、師匠が全然会ってくれませんでしたからね。ずっと直接会いたいと言っていましたよ」

「ほのかな脳筋臭がする」

知り合いの傭兵と同種であるとクリスの第六感が警鐘を鳴らす。

「うちには修練場もありますからね。師匠に稽古をつけてもらうのなんていつ以来でしょう」

「弟子も脳筋に・・・！」

うきうきとしているジョンを見て、クリスが嘆く。

「まぁ、父も無理はしないと思いますから。兄はそこまで争い事が好きな人でもないですからね」

「お兄さんも騎士だっけ？」

「ええ、兄は父のところの騎士団ですね。剣の腕は僕より数段上なのですが、とにかく優しい人でして」

「なるほどね」

それ以降も、ジョンはクリスと王子の会話の内容については触れず

に、クリスもその事については言わずに他愛のない会話をジョンの実家に着くまで続けた。

「やっぱりでかいな」

「そうですか？」

ジョンの実家である屋敷の前に立ってそれを見上げる。

「だまれボンボン！」

「なんで怒りだすんですか！」

「貧乏人の僻みだ」

「師匠は貧乏というか、お金の使い方が荒いだけのような気がしますけどね」

事実を弟子に指摘され、言葉に詰まるクリス。

「そうですね、フィリスもいることですし、今後は主の財布を預かるようにしましょうか」

「いつのまに出てきたフウリ！っていうか、財布とフィリスは関係なくね！」

「ほほう？主はいつまでたってもフィリスにプレゼントを買えない

ような気がします」

「はい、すみません」

自分の財布の中身と、今日の大通りのことを思いだし、クリスは即座に頭を下げる。

「ふぃりす、ぷれぜんといらないよ？」

フィリスがクリスを見上げ気遣うように言う。

「フィリスは気遣いもできて偉いですね。欲しい物はお母さんに言えば買ってあげますからね」

「あああああ、フウリィィィ！これ財布！俺の財布！預ける！」

フウリがフィリスの頭を撫で、クリスが悲痛な叫び声と共に懐から財布を出し片言になりながらそれを預ける。

「ふむ。本当にほとんど入ってないですね。仕方ありません、これからは計画的に買い物するんですよ」

「はい」

「師匠がまるで子供のようだ」

財布を確認するフウリに、小さくなってそれを見守るクリス、その師匠と精霊の姿がまるで母親とその子供のように見えてしまった弟子。

「まぁ、とりあえず入りましょう」

ジョンが無理やりその場を纏め、屋敷へと案内する。

こうして、脳筋当主が手薬煉引いて待つ屋敷へと魔法使いは踏み入ったのだった。

第十話「魔法使いと弟子の父」

クリスたちは屋敷に入り、案内され客室に向かう。

「父はもう帰ってますか？」

「坊ちゃんたちと入れ違いでお戻りになられました」

途中でジョンが執事に話掛ける。

「それでは荷物を置いて父の所に向かおうとおもうのですが、いいですか？よろしければフウリさんとフィリスちゃんも一緒に」

ジョンが、先を歩く執事から後ろを歩くクリスたちに視線を移す。

「了解。しかしジョンの父親かぁ」

「分かりました、私たちも着いて行きましょう」

クリスは弟子の父の噂を思いだす。

ギルドでもその人柄は、オーカスの騎士とは思えないほど評価されている。

オーカスの真の騎士、オーカス唯一の騎士、オーカス最強の騎士、その他にもいろいろな呼び名でギルドの冒険者から呼ばれている。冒険者を下に見る騎士から無理難題を言われる者に助け舟を出すうちにそんな呼び名がついたのだ。

また、戦場で傭兵がオーカスの中でもっとも信用する騎士として人

望を集めている。

実はギルドとの繋がりもあり、傭兵やギルド所属の冒険者を偏見なく、その実力を見抜き正当な評価を下しているのも、その評判を後押ししている。

また、騎士として優秀であり、剣の腕は年老いた今でも国一と言われるほどだ。

指揮官としても優秀で、国境での戦争に騎士団を率い何度も参戦し手柄を上げ、国内においては傭兵や軍人崩れの盗賊退治などで指揮を振るい名を上げている。

「ジョンパパか・・・。もういい年齢のはずなのに聞く噂は衰えを知らないんだけど、どうなってるの？」

「今でも、兄と僕、二人がかりでも父を倒せないくらいですからね」

「私が聞いた話ですと、オーカスの騎士らしからぬ実力と人望を持った人物だそうです。今でも現役で国内最強と言われております」

「脳筋チートか。帰りたいな」

実感の篭った声でクリスが本音をぽつりと漏らす。

「帰らないでくださいよ」

「だって絶対手合わせしたいとか言われるじゃん、脳筋ってどいつもこいつも手加減ってものを知らないじゃん、俺の命がやばいじゃん」

「おとうさん、しんじゃうの？」

「大丈夫ですよ。なんだかんだと死ねないのが我が主ですから」

フィリスの心配そうな顔を見て、フウリが笑顔で断言する。

「死ねないってなんなのぉぉぉ！そんな決定事項は嫌だ！！死ぬ直前まではいくみたいじゃん！！せめて生死から離れてほしい！！」

「父はその辺は大丈夫ですよ、よく手合わせしてるけど僕生きてますから」

胸を張ってクリスを安心させようとするジョン。

「手合わせは前提なのね。なんか嫌な予感しかしない」

「ま、まぁ、とりあえず挨拶だけはしないといけませんから・・・」

クリスはため息一つ吐いて、長い廊下を歩くのだった。

「シッ」

向かい合った二人のうち一人が素早い剣捌きで相手の首を狙って薙ぐ。

もう一方は、その薙ぎをぎりぎりで防ぐ。

ジョンの父、マッシュは自分の剣がはじかれると、そのまま流れるように木剣を上段に持っていき振り下ろす。

クリスはひたすら防御に徹している。

先ほどから木剣同士がぶつかり合う音がタリエルーエ家の修練場に響いている。

ジョンは息をするのも忘れるほどに真剣にその試合を見ている。

クリスは魔法を使ってはいないものの、それ以外は全力でマッシュの相手をしている。

にも関わらず、マッシュに打ち込む隙がないのだ。

マッシュはものすごい勢いで木剣を振り下ろしているのに息を乱すことなくクリスと対峙している。

その目は明らかに手加減をしているようには見えない。

「（は、話が違う!!俺の命が風前の灯だぁぁぁ!!手加減できるって話はどこいきやがった!!今の!今のどう見ても俺の頭かち割る気満々だった!?）」

クリスは心の中でひたすら呪詛を唱えるのだった。

「ふむ。君がうちの馬鹿息子の師匠か」

「はい、一応そういうことになっています。そんな立派なことを教えたわけでもないのですが」

ジョンの案内でマッシュの部屋へと案内された一行は自己紹介を終えて、今はマッシュと向かいあって座り歓談していた。

「なんのなんの。どうしようもなかった息子が、私の課題を終えて帰ってきてみれば、一端の男の顔になっていてな、話を聞けば師匠師匠とクリス君の話ばかりだったのだよ。なので会ってお礼をしたいと思っていたのだが、こんなに遅くなってしまい申し訳ない」

「いやいや、ジョンの努力の賜物でしょう。俺は本当に何もしてませんから」

頭を下げるマッシュに、クリスは更に謙遜する。

クリスは目の前に座る人物が、自分より遥かに強いことを感じ取っていた。

しかも、押さえ切れない闘志が溢れているのが目に見えて分かるので、冷や汗を流してこの状況からどうやって逃げだすか頭をフル回転させて考えている。

「またまた、息子からよくクリス君の活躍を聞かされてな。それは

もう御伽噺の勇者のようじゃないか。是非とも一勝負お願いしたい」

「は、はぁ。いやしかし俺なんて栄えある騎士団のそれも団長さまと手合わせするなんて、とてもとても」

『ど直球きたー！無理無理無ー理ー！助けてフウリ！！』

『面白そうではないですか。最近剣の腕も鈍ってきてるのではないですか？いい機会です、稽古をつけてもらったらいかかでしょう』

『も、ってなんだよ！魔法の腕は鈍って・・・あれ最近使った覚えが』

『錬金以外を見てないですね、そっちは相変わらずの主クオリティですが。諦めてお受けしてはいかかですか。弟子父もキラキラした目で待ってますよ』

『どう見ても、キラキラなんて可愛いもんじゃねぇ！ギラギラだろぉぉ！獲物を狙う目だよあれは！！』

二人が契約を通していちゃいちゃしてる間に話は進む。

「はっはっは、面白いことを言う。我が国の騎士団は今や張りぼてのようなもの。それはよく知っているだろう。騎士団の実力に反比例するように、ギルドには実力のある者が集まっていると聞く。その中でも一目置かれているクリス君、君には息子云々を抜きにしても是非一度勝負したいと思っていた。なぁに、既に準備もできている、さぁ行くぞ」

マッシュは返答を聞かずに立ち上がる。

「父上、僕もついていってよろしいですか？」

「うむ。後学のためにしっかり目に焼き付けておくようにな」

「はい！」

ジョンは期待に満ちた目をする。

「じゃ、若輩の身でありますので、お手柔らかにお願い致します・・・」

クリスはそんな二人を見てがっくりと肩を落とし了承するのだった。

「（くそ！隙がない上に、剣捌きが速すぎる。しかも一撃一撃が重い！ベアードのおっさんといい勝負なんじゃないか！ジョンパパは化け物か！）」

「（若く荒削りだが、とにかく勘がいいな。的確に私の剣を捌いている。実戦慣れしているのもあるのだろう。だが・・・）」

マッシュは考えつつもスピードを落さずクリスを攻め立てる。

クリスは自分の手が痺れてきたのを感じる。

どうにか反撃の糸口を見つけたいのだが、そんなものは存在しない

かのようにマッシュの剣が迫る。

どんどん押されクリスは焦りだす。

いつもは魔剣の性能やフウリの恩恵もあって、人間相手ならば一振り二振りで終わることが多いのだ。

いくら剣の才能があったとしても、それだけを武器に戦うことはなかったクリスに、長い年月を剣と共に生きてきたマッシュの剣捌きは重すぎた。

クリスの焦りは動きからさらに余裕を無くしていき、マッシュの剣はひたすらに重くのしかかる。

やがて、クリスの焦りとマッシュの剣、その二つの攻防が頂点を迎え・・・

そうして次の瞬間にはクリスの体が文字通り吹っ飛んでいた。

「あ」

誰かの呟きとも取れぬ声が一瞬の静寂の中、修練場に響く。

その日、魔法使いは弟子の父に敗北したのだった。

第十一話「魔法使いの勝負」

早朝、タリエルーエ家の修練場でクリスがひたすら素振りをしている。

昨日、マッシュに吹き飛ばされ気を失ったクリスは、深夜に客室のベッドで目が覚め、ふらふらと夢遊病者のように修練場へと向かってからずっと一心不乱に木剣を振っている。

クリスの頭には、昨日のマッシュとの勝負の映像がエンドレスで流れている。

クリスにとって剣で負ける事は、昨日が初めての事ではない。

勝てる気がしない相手というのもいる、決して自分が一番強いなんて思いは無い。

ただ負けを気にしているわけではないのだ。

「ふぅ・・・」

一息ついて、クリスは修練場の隅に座り込む。

何故負けたかはクリス自身分っていた。

心のどこかで驕っていたのだ。

人間相手なら魔法なしでも早々負けないだろうと。

そしてオーカスの騎士は総じて弱いだろうと。

だからクリスは魔法を使わず、自分の剣の力だけで勝てると思い挑み、結果として無様に負けたのだ。

そんな自分がただただ情けなく感じ、クリスは深くため息を吐く。

「お早いですね、主」

そんなクリスを見下ろす形でフウリが空から降ってくる。

「ああ、お前もな」

クリスはフウリを見上げる。

「なんですか、暗いですね、主」

フウリはクリスに横に座り、顔を覗き込む。

「うん？ああ・・・」

「その落ち込んでますよアピールはやめてください、空気が暗くなります」

クリスの生返事を聞いて、フウリが無表情になじる。

「すまん」

「はぁ。本格的に落ち込んでますねぇ」

いつものように調子よく返してこないクリスにフウリはめずらしくしかめっ面をする。

「どうせ主のことです。私やフィリス、弟子の前で無様に負けて、自分がいかに傲慢だったか分って落ち込んでいるのでしょう。魔法も使わずに勝てると本当に思っていたところにびっくりですよ。私のように常に謙虚に生きられないのでしょうか」

「うっ」

クリスはフウリの言葉を聞いてうめき声を上げる。

それを聞いてもフウリの口撃は止まらない。

「フィリスは主が気を失ったのを見て心配していましたよ。まったく、娘にも心配をかけるなんて」

「うぐっ」

「まぁ、主がうだうだ悩んでいるようなので、私が解決策をお教えいたしましょう」

フウリがクリスの前に人差し指を立てる。

クリスはその人差し指から視線が外せない。

「簡単な話です。もう一回勝負をお願いすればいいのですよ」

なんでもないかのように、フウリは自分が揺らしている人差し指に合わせて目線を揺らすクリスに言う。

それを聞いて、クリスはぱっと顔を上げ、フウリの目を見る。

「弟子の父親、マッシュはどうみても脳筋族ですからね。主がもう一回勝負をしたいと言ったら二つ返事で了承してくれるでしょう。そもそも、主から言い出さなくてもあちらから言ってくるのではないですか」

「い、いや、けど、昨日、俺」

フウリの解決策に、クリスは思考が追いつかない。

「国の騎士と見下し、挙句に全力も出さずに負けたことですか？そんな小さいこと気にしないと私は思いますよ。そもそも、この国の騎士が下の下なのは今更ではないですか。まぁ、主が普段通り、しっかり相手の力量を見ていればそんなことにならなかったと思いますが。主の騎士への屈折した思いは、これを機に直しましょう。私への屈折した愛もですが」

そういうとフウリは立ち上がる。

「さてと、そろそろフィリスが寂しがるころですので、先に部屋へ戻りますね」

そう言って飛び去ろうとするフウリに、クリスは後ろから声を掛ける。

「フウリ！お前に言わなきゃいけないことがある！！」

その声を聞いて、フウリは上昇するのをやめるとくるりと振り返る。

「さっきは言えなかったけど・・・」

クリスは立ち上がると、浮いているフウリを見て意を決したように口を開く。

「フウリのどこが謙虚に生きてるんだよぉぉぉ!!どう見ても我が道を突き進むタイプだろ、お前!謙虚な奴は自分を謙虚なんて言わないんだよ!!あと屈折した愛ってなんだよ!!主を変態みたいに言うなよ!!」

そう叫ぶとクリスは膝に手をついて荒い呼吸を繰り返す。

フウリはその姿を見ると、薄く笑ってそのままクリスに背を向ける。

「あと、有難うな」

クリスはその後ろ姿に向かってそう付け足す。

フウリはただ笑みを深くしてそのまま飛び去っていく。

それを見えなくなるまで見送ったクリスはぽつりと呟く。

「しかし、黒はまだ早いと思うんだ・・・」

そうして、クリスは一度寝かされていた部屋に戻ることにし、丁度通りかかった屋敷のメイドに朝食はいらない旨を告げると、寝なおすことにする。

何時間か経過し、パチリと目を開けたクリスは、部屋の中にいつの間にか置いてあった軽い食事を食べると、深く瞑想する。

魔力を全身に巡らせるように、少しずつ伸ばしていく。

全身に行き渡るとそれを今度は一箇所に集めなおす。

そうして集まった魔力をまた全身へと巡らせていく。

その繰り返しを徐々に速くしていく。

クリスは何十分かそれを行ったら、すっと立ち上がり部屋を出る。

そうして、マッシュの気配のする部屋へと直行する。

クリスの様子を気にしていたフウリは、自分とフィリスがあてがわれた客室で安堵の吐息を漏らす。

フィリスは朝からずっとクリスの所へ行きたがっていたが、フウリはそれを押し留めて膝の上に乗せて、借りた本を読み聞かせながら、クリスの気配に注意を払っていた。

ジョンには主に話掛けないように言い含め、代わりにあの二人が今日中にもう一勝負することを告げ、そのときに声を掛けると言い、フウリはクリスが一人になれるようにした。

マッシュが今日は屋敷の執務室で仕事をしていることも、朝食のときにフウリは確認していた。

フウリは朝食を取り終わると、厨房を借りて軽い食事を作り、クリスを起さないように置いてきた。

そうして、動き出した主の気配に、フウリもフィリスを膝から下ろし立ち上がると、ジョンの所へ行き、三人で修練場へと向かうのだった。

「たのもう！」

ノックもせずに扉を勢いよく開けると、椅子に腰掛けて書類を眺めていたマッシュは驚いたようにクリスの方を見る。

「クリス君か。どうした？」

「昨日の雪辱に参った次第です！」

異様なテンションのクリスに、マッシュは目を丸くする。

「ふむ。しかし、昨日の傷は大丈夫なのか」

「はい！ほとんど痛みもありません！」

クリスが背筋を伸ばしマッシュを真剣に見つめる。

「そうか。では行くか」

クリスの返答を聞き、その目を見て、マッシュは即座に表情を切り替えると立ち上がる。

昨日の非礼を詫びようと思ったクリスだが、マッシュが放つ静かな闘気を感じ、口を閉ざす。

あんな無様を晒した自分に、昨日と変わり無く向き合ってくれるマッシュに頭が下がる思いで、クリスはマッシュの後をただついていく。

修練場につき、二人は軽く体を動かす。

クリスは魔力を体に巡らせ、ひたすらに素振りをする。

マッシュはそんなクリスを見ると、深い笑みを浮かべる。

そうして、二人が準備運動を終えると、向かい合い木剣を構える。

ただ静かににらみ合う二人。

そのまま、幾何かの時間が流れ・・・

一陣の風が舞い終わると共に、クリスの木剣が振りあがり、マッシュに襲い掛かる。

マッシュはそれを難なくはじき返す。

真正面から二人がぶつかり合う。

そこからは、ひたすら攻め合いが続く。

クリスが攻めればマッシュが防ぎ、マッシュが攻めればクリスが防ぐ。

一進一退の攻防、隙をついて攻守がめまぐるしく入れ替わる。

見るものが居れば圧倒されるであろう光景が永遠に続くかと思われたが、修練場に一際甲高い音が響き決着する。

密かに見守る三人の観客がいる中、魔法使いの雪辱戦が幕を閉じた。

第十二話「魔法使いの憧れ」

マッシュとの勝負の後、夕飯を食べ終えたクリスは用意された客室にいた。

ソファに腰掛、先ほどから一向に離れようとしないフィリスを膝の上に乗けてお茶を啜っている。

そのフィリスは、珍しい満面の笑みでお菓子を頬張っている。

フウリも隣に座り、同じくお茶を手に持ち、穏やかな表情でフィリスを見ている。

「こら、フィリス。膝の上にお菓子のくずをこぼさないでくれ」

「ふふ、口の周りもべたべたにして。拭きましょうね」

クリスを見上げたフィリスの顔を見て、フウリが微笑みながらナプキンでその口を拭う。

部屋には穏やかな空気が流れていた。

されるがままに拭かれたフィリスは、クリスの顔をまじまじと見る。

「もう、しんぱいかけちゃ、だめだよ?」

ずっと心配していたフウリの近くにいたフィリスは、いつものクリ

スに戻ったことを感じ取り、釘を刺しておく。

「はい、努力します」

「よろしい」

クリスの返答を聞き、フィリスがませた口ぶりでそう言う。

その様子を見ていたフウリが口を開く。

「それで、主。気は晴れましたか？」

「まぁ、な」

顔を赤くしてそっぽを向くクリスをニヤニヤと見つめるフウリ。

「それは大変よろしいことです。私も嬉しいですよ、主」

「なんだ、その目は！」

クリスは怪しく光るフウリの目を見て怯える。

「いえいえ。落ち込んでいる主も、あれはあれで可愛かったのですよ」

「やめて！思いださせないで！」

クリスが自分の耳を塞ぎ、首を振る。

「ふふ。ところで私に言うことがあると思うのですが」

「あー・・・。あ！」

フウリは期待に満ちた目でクリスを見る。

「あー、えっと、その、ぁ・・・ぅ」

「なんですか？聞こえませんよ、主」

「あ、有難うって言ってんだよ！」

やけくそ気味に叫ぶクリス。

「いえいえ。主が落ち込んだときに優しく包んであげるのも、私の役目ですからね」

「あれが、優しくだと」

クリスの脳裏に、散々罵倒され抉られた記憶がよみがえる。

「ご不満ですか？あれ以上優しくするのはいくら心の広い私でも少し難しいのですが。記憶を飛ばして解決したほうがよかったですか？」

「いいえ、不満なんて滅相もございません。だから記憶を飛ばすのは勘弁してください」

フウリの自信満々の問いかけに、内容はどうあれ心配をかけ、気を使ってもらった自覚のあるクリスは、ただ否定することしかできなかった。

「話も纏まったところで、主にはお礼をして頂かないといけませんね」

「お、お金なんてもってないぞ!?」

クリスは両腕で自分を抱き体をよじる。

「知ってます、というか財布は私が預かってるでしょう?まぁ、その財布も実際はお金なんて入ってないも同然でしたが」

「魔力もすっからかんだぞ!?」

昼のマッシュとの勝負で、いつものクリスらしくないほど魔力を使ったため、ほとんど残っていないのだ。

「それもいつものことではないですか。主のお金と魔力と運はいつでも赤貧状態なのは仕様ですからね。そんな世界の常識を今更言わないで下さい」

「ばっ、ちげぇし!あるときはあるし!ばーか!」

「否定できないからといって、子供みたいなことを言わないでください。頭も足りないように見えますよ」

フウリの言葉にがっくりとうな垂れるクリスを、フィリスがなぐさめる。

「さて、それではお礼の件ですが。フィリスもとても心配していたので、ここはフィリスに決めてもらいましょう」

「？」

フィリスは自分の名前が急にでたので、クリスの膝の上からよくわからないといった風にフウリを見上げる。

「おとうさんが何か一つお願いをかなえてくれるそうですよ」

そんなフィリスに、フウリが優しく教える。

それを聞いてフィリスは少しの間考え口を開く。

「みんなで、いっしょに、ねたい」

そんなわけで、クリスが泊まっている客室のベッドで三人が川の字になって寝ている。

「すごい気になったんだけど、精霊って寝るの？」

「寝なくても支障はありませんが、寝れないわけではないですね。現にフィリスはすっかり熟睡してますし」

二人の間で寝ているフィリスを見やる。

「うむ。寝顔も可愛いな、まるで天使のようだ」

「可愛いのは同意しますが、天使なんかと一緒にしないでください」

「なんかって、世界を救ったって言われてるのに。まぁいいか」

フウリの天使嫌いはいつものことなので軽く流すクリス。

「そうです。そんなことより今日は寝ましょう。主も疲れているでしょう」

「そうだな、おやすみ」

「おやすみなさい、主」

少しの静寂の後、クリスが口を開く。

「フウリ、まだ起きてる？」

間にいるフィリスを気遣って、小さな声でフウリに呼びかける。

「おきてますよ」

二人とも天井を見ながら、小声で声を交わす。

「俺さ、騎士に憧れて王都きて、けど現実を知って。卒業後に騎士団に誘われたじゃん、あれ実は結構迷ったんだよね。まぁ結局その

誘いも蹴ってさ、理由はいろいろあったけど、自分の中で踏ん切りつけたつもりだったけど、まだ心のどこかで霧がかかったみたいで。マッシュさんとの一回目の勝負で、剣だけで勝てればその霧が晴れると思ったんだけど、結果見事に負けて霧が深まって。けどフウリに言われて二回目の勝負をしようって思ったときに、すっきりと霧が晴れたんだ」

クリスはそこで一旦言葉を切ってフウリのほうを横目で見る。

フウリは相変わらず天井を見ていて、しかし話を確かに聞いている気配に、クリスは小さな声で話を再開する。

「俺の憧れていた騎士はこの人のような騎士なんだって。ちゃんと実在するんだって思ったら、なんか知らないけど嬉しくてさ。だから、王子の依頼が終わったらさ、俺・・・」

クリスは一度深呼吸する。

「本格的に冒険者しようと思うんだ」

「はい？」

クリスのあまりに脈絡のない決意表明に、フウリが思わず聞き返す。

「いやだからさ、冒険者になって大陸中回ってみようと思うんだ」

「会話の脈絡がない上になにか付け足しましたね」

二人の声が大きくなる。

「ぅん・・・」

その声を聞いてフィリスが寝返りをうつ。

顔を見合わせたクリスとフウリは、フィリスを起さないように起き上がり、星の輝きがみえるテラスの椅子へと向かう。

「マッシュさんと勝負したらさ、俺には騎士は無理だなって分かった訳なんだよ。あの人は、国のためならそれこそ家族だって顧みないと思う。それが、俺にはできないんだ」

本気で剣を交えたクリスは、マッシュが文字通り剣に命を賭して打ち込んでいることが分かり、それが何のためかも理解した。

そうして、憧れの騎士に自分がなれないことも。

「けど、それでいいんじゃないかなって思ったんだ」

「それは分かりました。しかし何故冒険者に？」

フウリが酒を注いだグラスを両手に持ち、片方をクリスに差し出す。

「いやさ、すっきりして考えたら、いろいろやりたいことがあって。魔法の研究やら、師匠への恩返しやら。けど、フウリとフィリスと三人でいろんな場所に行くのを想像したらさ、それが一番楽しそうだったから。だから冒険者」

差し出されたグラスを受け取って、中身を口に含みながらクリスが本当に面白そうに言う。

「勿論、やりたい事は全部やるつもりだけどね。それでさ、フウリ、ついてきてくれる？」

クリスが酒のせいか若干赤い顔でフウリを遠慮がちに見る。

「はぁ。主はたまに馬鹿なことを言いますね。私は主と契約しているのですから、ついていくのは当たり前じゃないですか」

「い、いや、そういう意味じゃなくてだな」

フウリの返答に、クリスが言いにくそうにする。

「それに、主を一人になんてしたら、それこそ次の日には大陸が消えているかもしれませんからね。契約がなくとも、目を離せませんね？」

「あー、うん」

フウリが月明かりに照らされた綺麗な笑顔をクリスに向け、向けられた本人は顔を更に赤くして俯く。

「しかし、これで主も無職卒業ですね。よかったですね、収入ができますよ。その収入は私が管理しますが」

「え！？」

フウリが月明かりに照らされた綺麗なニヤニヤ顔をクリスに向け、向けられた本人は焦って顔を上げる。

「主は財布を私に預けたじゃないですか」

「あ、預けたけど！」

クリスはこの家の敷居を跨ぐ直前の会話を思いだす。

「大丈夫です。何か欲しいものがあるときは、私が判断した上でちゃんとお小遣いをあげますから」

「じ、自由にできるお金がないだと・・・！」

「私に言えないお金の使い道があるのですか？」

「えっ、いや別にそういうわけでは・・・」

クリスは言い難そうに、視線をさまよわせる。

「ふむ。ああ、主も男性ですからね、そういうことでしたら、仕方ありません。しかし、お金が勿体無いので私がお相手を」

「あー！あー！あー！きーこーえーなーいー！」

クリスは両耳を両手で塞ぐ。

「そんな大声を出すとフィリスが起きてしまいますよ」

「大声を出させないでくれ・・・」

「初心ですね、主」

「う、うるさい。ほら、冷えてきたしベッドに戻るぞ」

「そうですね。今一番私が主にしてほしいことをしてくれたら戻ります」

クリスは引き返すために立ち上がろうとするが、それをフウリに阻止させる。

「意味が分からん」

「本当に分からないんですか？ヒントはここです」

そう言いながら、フウリは自分の唇を人差し指で示す。

「い、意味がわからん」

「ふふ、赤くなって可愛い主」

「く。いつまでも弄られているだけの俺だと思うなよ」

「ふむ。それでは・・・」

そう言ってフウリが目を閉じてクリスに唇を差し出す。

月明かりが照らす中、魔法使いとその精霊の影が重なっていった。

第十三話「魔法使いと王都の影」

王都の町並みに隠れ、影が蠢く。

「それは本当か！」

「ええ、王子はあなたの派閥に対して強攻策を取るようですよ」

ここはオーカス王国王都の貴族街、その中でも一際大きい屋敷の、その主の部屋に蠢く影が二つ。

「馬鹿な！ありえん！いくらあのろくでなしの王の息子でも、勢力差くらい理解できんのか！」

「その差を埋めるために、王子は傭兵を雇ったようです。騎士団にはあなたの派閥が多いですからね。騎士団が王都にいれば王子にとって計画の邪魔になるので、近々ある大規模演習中に傭兵を足止めに当てるようです。そして演習中に、あなたと、あなたの派閥の人員が行った不正の数々を会議で暴き、その場で全員を拘束する、というのが王子の計画のようですね。」

屋敷の主であるオーカス王国宰相ガルンドは腰掛けていた椅子から立ち上がり喚き散らし、それに対し正面に立つ男は、涼しい顔で補足説明をいれる。

男の名はハイドラ、帝国の対オーカス工作員である。

ハイドラの部隊は、帝国の命令で様々な工作をオーカスで行ってい

た。

「しかし、騎士団がおらずとも、我々のほうが圧倒的に有利ではないか」

ガルンドは自分の派閥の人間の人数と、私兵の数を思いだし、安心したように椅子に座りなおす。

「城には王族の騎士がおります。そして王子は一人腕利きの冒険者も雇ったとか」

「騎士なんぞ、軽くひねれるだろう。冒険者にいたっては、一人二人雇ったところで何の障害にもならんわ！」

ハイドラは自分と部下が集めてきた情報を赤い顔をしたガルンドへ、必要な分だけ渡していく。

「いえ、無理でしょう。王子の騎士は精鋭揃いです、そして先ごろ戻ってきた騎士はその中でも別格の強さを誇っております。この騎士がいなければ、もう少し王子周辺で情報収集ができたのですがね。そして雇った冒険者に至っては、我が帝国でも危険視されている男です。例え私たちが前面に出てあなたを援護したとしても、勝てる見込みは薄いでしょう」

ハイドラはいくつかの情報を誇張して伝え、ガルンドを誘導していく。

「では、私はどうしたらいいのだ！」

ガルンドが目の前のテーブルに突っ伏して頭を抱える。

「少し早まりましたが、帝国へ亡命しませんか？」

ガルンドの叫びに、気づかれないように薄く笑ったハイドラが答える。

「しかし、出された条件をほとんど達成していないが、私の帝国での身分は保証されるのか？」

「帝国は領土は広いのですが、優秀な人材の確保に難航していましてね。条件に関しては、あくまで目標であって絶対ではありません。帝国にとっては人材が失われるほうが痛いですから」

ガルンドが顔を上げるのを確認して、ハイドラが言う。

「そ、そうか。そうだな。帝国にも私が必要なのだな。それではこんな馬鹿な王族が納める国に見切りをつけるべきだな」

「はい。それではそのように手配いたします。それにあたって、我が王に土産を用意していただけないでしょうか？」

吹っ切れたように笑うガルンドに、薄い笑みを張り付かせたハイドラが提案する。

「土産とは？」

「王国には姫がいると聞きます。その姫を帝国へとご案内したいと思いまして。そうすれば、条件以上の待遇が望めます」

「む。塔の姫か。王の騎士が守っているが、うちの私兵とお前たち

がいれば、どうとでもできるだろう。しかし、帝国に連れて行っても意味があるのか？」

「ええ、とても重要な意味があります。羽の生えた姫を長年軟禁してきたオーカスの王、気に食わない家臣を濡れ衣で粛清する王子。そんな事実と噂に、王子が大切にしている姫、宰相のあなたが帝国にいれば、オーカスへの侵略、そしてその後の統治がとても楽なものになるでしょう。もしかしたら、あなたと姫に結婚していただいて、オーカスをそのまま統治していただくことになるかもしれません」

ハイドラが、まるでそれが確定事項であるかのように、ガルンドに囁く。

「なるほどなるほど。よく分かった。では姫にもご同行願うとしよう。して、いつ帝国に発つのだ？」

「王子の計画と合わせて事を起しましょう」

「何故だ？早いほうがよいのではないか？」

ハイドラの囁きに、自分のその後を妄想したガルンドは早く事を進めようとする。

「残念ですが、こちらが先に動いてしまっては、後々やり辛くなってしまいます。それに混乱に乗じたほうが、追っ手もつきにくいでしょう」

「そういうことでは仕方ないな。では、大規模演習までに何かやっておく事はあるか？」

すっかり自分任せになったガルンドを見て、ハイドラは笑みを濃くする。

「それでは騎士団の中から、あなたが優秀だと思うものに、怪我をしていただきましょう。怪我ならば演習には出れませんからね。しかし多すぎると疑われますので、常識の範囲でお願いします」

「うむ、分ったぞ」

二つ返事をするガルンド。

「それでは、後は何かあればいつも通り使いを出してください。無ければ、大規模演習の日にお迎えに上がりますので」

「宜しく頼んだぞ」

椅子にふんぞり返る宰相に、薄い笑みを顔に貼り付けた男が礼をして闇に消えていった。

「それは本当か！」

「ええ、王子はあなたの派閥に対して強攻策を取るようですよ」

王子の動きが活発になり、戦力も整ってきたので、そろそろこの男の危機感を煽って、上手く誘導しなければいけませんね。

「馬鹿な！ありえん！いくらあのろくでなしの王の息子でも、勢力差くらい理解できんのか！」

「その差を埋めるために、王子は傭兵を雇ったようです。騎士団にはあんたの派閥が多いですからね。騎士団が王都にいれば王子にとって計画の邪魔になるので、近々ある大規模演習中に傭兵を当てるようです。そして模演習中に、あなたと、あなたの派閥の人員が行った不正の数々を会議で暴き、その場で全員を拘束する、というのが王子の計画のようですね。」

あの邪魔な騎士がいない間に、王子の執務室にまで忍び込んで調べた結果をこの無能な男に教えましょう。

これくらいのことは、私より自由に城を歩けるこの無能が部下を使ってやってくれれば楽なのですが。

まぁ、無能にいくら期待しても仕方ありませんね。

「しかし、騎士団がおらずとも、我々のほうが圧倒的に有利ではないか」

この男はどこまで頭が足りないのでしょうか。腹にいっている栄養を少しは頭に回せれば、頭皮にもよかったのかもしれませんね。もう手遅れですが。

「城には王族の騎士がおります。そして王子は一人腕利きの冒険者も雇ったとか」

「騎士なんぞ、軽くひねれるだろう。冒険者にいたっては、一人二人雇ったところで何の障害にもならんわ！」

私たちが協力すれば、それでもなんとかなるかもしれませんが、馬鹿正直に言うこともないですね、この無能は計算もできそうにないですから。

「いえ、無理でしょう。王子の騎士は精鋭揃いです、そして先ごろ戻ってきた騎士はその中でも別格の強さを誇っております。この騎士がいなければ、もう少し王子周辺で情報収集ができたのですがね。そして雇った冒険者に至っては、我が帝国でも危険視されている男です。例え私たちが前面に出てあなたを援護したとしても、勝てる見込みは薄いでしょう」

冒険者のほうは人相書きに似ていますし、特殊な精霊を連れているようなので、例のドラゴン養殖場襲撃の犯人一味で間違いないでしょうし、騎士のほうは精霊の魔法まで使った私の隠密行動にも感づきますからね、おちおち仕事もできません。

「では、私はどうしたらいいのだ！」

さすが私の見込んだ無能、思考放棄でこちらに丸投げとは。

「少し早まりましたが、帝国へ亡命しませんか？」

本当ならもっと先、あなたがこの国をもっと腐らせてからの予定だったのですがね。

「しかし、出された条件をほとんど達成していないが、私の帝国での身分は保証されるのか？」

「帝国は領土は広いのですが、優秀な人材の確保に難航していまし

てね。条件に関しては、あくまで目標であって絶対ではありません。帝国にとっては人材が失われるほうが痛いですから」

優秀な爆弾になっていただかないといけませんからね。

「そ、そうか。そうだな。帝国にも私が必要なのだな。それではこんな馬鹿な王族が納める国に見切りをつけるべきだな」

「はい。それではそのように手配いたします。それにあたって、我が王に土産を用意していただけないでしょうか？」

それはもう、帝国には是非とも必要なんですよ、あなたという爆弾の材料が。あとは姫と合わせれば高威力の爆弾ができます。

「土産とは？」

「王国には姫がいると聞きます。その姫を帝国へとご案内したいと思いまして。そうすれば、条件以上の待遇が望めます」

「む。塔の姫か。王の騎士が守っているが、うちの私兵とお前たちがいれば、どうとでもできるだろう。しかし、帝国に連れて行っても意味があるのか？」

「ええ、とても重要な意味があります。羽の生えた姫を長年軟禁してきたオーカスの王、気に食わない家臣を濡れ衣で粛清する王子。そんな噂と、王子が大切にしている姫、宰相のあなたが帝国にれば、オーカスへの侵略、そしてその後の統治がとても楽なものになるでしょう。もしかしたら、あなたと姫に結婚していただいて、オーカスをそのまま統治していただくことになるかもしれません」

王子は妹を大事に思っていますからね、帝国にガルンドともどもいることが分かれば絶対に使者を出すでしょう。これで姫がオーカスの王族であるということに保証がつくでしょう。後はオーカスに対する爆弾として無能と一緒に、如何様にも使い道がでてくるというものです。

「なるほどなるほど。よく分かった。では姫にもご同行願うとしよう。して、いつ帝国に発つのだ？」

「王子の計画と合わせて事を起しましょう」

「何故だ？早いほうがよくないか？」

まったく、これで自分が優秀だと思っているのですから、ある意味すごいですね。あなたの出世はただ毒殺と一緒だったというだけなのに。

「残念ですが、こちらが先に動いてしまっては、後々やり辛くなってしまいます。それに混乱に乗じたほうが、追っ手もつきにくいでしょう」

「そういうことでは仕方ないな。では、大規模演習までに何かやっておく事はあるか？」

そうです、無能は無能なりに、しっかり我が帝国のために動いていればいいのです。帝国国民に無能はいませんけどね。

「それでは騎士団の中から、あなたが優秀だと思うものに、怪我をしていただきましょう。怪我ならば演習には出れませんからね。しかし多すぎると疑われますので、常識の範囲でお願いします」

「うむ、分ったぞ」

このくらいなら、無能にもできるでしょう。なんとか魔法避けくらいに役立つ者を用意して欲しいものです。

「それでは、後は何かあればいつも通り使いを出してください。無ければ、大規模演習の日にお迎えに上がりますので」

「宜しく頼んだぞ」

私は椅子にふんぞり返る無能に背を向け、もう一仕事するために闇へと紛れる。すべては帝国のために。

「ふむ。すると、このような指輪が市場に出回っているのだね」

「ええ、そうみたいです。見つけた分は機能だけ壊したんですが」

マッシュの部屋でクリスとマッシュが向かい合って座り話しこんでいる。

マッシュが王子の協力者だということ、今後の予定をマッシュ経由でクリスに伝えるようになったことを伝えるために、部屋に呼ばれたのだ。

その話も終わり、クリスがマッシュの武勇伝をリクエストし、盛り

上がって二人は話をしていた。

そして武勇伝の区切りがついたところで、マッシュの話でその人脈の広さを知り、魔法院にも伝手があるようなので、クリスは王都にきたときに見つけた怪しい指輪を、マッシュに報告したのだ。

害もほとんどないような物で、装飾はたしかにいいので買った人間も損することはないとクリスは思っていたのだが、宰相が帝国と絡んでいるという話を聞いて、この指輪の出所も帝国だったことを思いだし話をすることにした。

「魔法が使える人間ならすぐに分かると思うので、魔法院で調査するといいと思います」

「そうだな、手回ししておこう」

そうして、指輪の話が終わり、少しの静寂があり、マッシュが口を開く。

「クリス君。オーカスの騎士にならないか？」

そう静かに口にするマッシュはまっすぐクリスを見据える。

「マッシュさんのような騎士に憧れはありますが、騎士にはなれません」

クリスはマッシュの視線を正面から受け止め、答える。

「そうか。残念だが、君が決めたことなら仕方ないな。また手合わせはしてくれるのだろう？」

「それはこちらこそ是非、お願いします。」

「はっはっは。この家に来たときとは、まったく違う返答だな！」

マッシュの言葉を聞いて、自分がマッシュに挑まれたときのことと先の返答を比較し、クリス自身も面白くなって笑ってしまうのだった。

「さて、主。ここに来てからずっとぼろぼろになってますが、今日もまたひどい格好ですね」

「いや、すんません」

結局マッシュと話をした後、修練場で手合わせし、ぼろぼろになったクリスを見たフウリはため息をつく。

「主が自分の魔力を使って回復する分には、私に文句なんてないんですけどね」

「本当にすみません！」

クリスはフウリに傷を癒してもらいながら、ひたすら頭を下げる。

「主の魔力は塵に等しいのですから、いざと言うときに魔力が無かったということにならないようにして欲しいですね。主が怪我するのは勝手ですが」

「おかあさん、おとうさんのけがみて、しんぱいしてたよ？しんぱいかけちゃ、だめよ？」

フィリスがフウリの様子を暴露する。

「フィリス、そんなことはないのです。あんなむさい男と嬉々として勝負していて、あまりかまってくれないのが不満とかそんなことはないのです」

暴露されたフウリは、まったく表情を変えずにクリスを見る。

「おい、どう聞いても、フィリスの言ってる内容と否定する内容が違くね！」

「主も脳筋組になってしまったらどうしましょう。やっぱりここは脳洗浄で新たな主を」

「脳筋にはならないから洗浄はやめて！新しい主って、それ全然別物じゃね！相変わらず怖ぇよ！」

傷が癒えた体で、後ずさるクリス。

「でしたら、修行もいいですが、折角王都にいるのです。いろいろ見て回りましょう。フィリスも主と遊びたがっていますよ」

「よし、明日は王都散策だな」

すっくと立ったクリスがフィリスの傍に行き、頭を撫でる。

「楽しみにしていますよ、主」

そういってフウリはクリスに近寄る。

「あと、怪我するのはほどほどにして下さいね。本当はとても心配なんですよ」

クリスは耳元で囁かれた言葉に顔を赤くする。

フウリはそれを見て笑みを浮かべ、フィリスは首をかしげる。

「あと、主はお金をもってませんので、買い物はできませんね」

「お、お小遣いをください！」

「それが必要だと私が判断したらあげますよ」

「なんという子供扱い」

「大人の男性扱いすればいいんですか？」

「なんか卑猥に聞こえる」

「主の心が卑猥だからじゃないですか。怖いです」

「ひどくね！」

「仕方ないので我慢できなくなったら、契約で呼んでくださいね、

他所様に迷惑かけてはいけませんよ」

「迷惑かけないし、そもそも俺が何を我慢できないのか分からないし」

「大人の男性の主なら分かると思ったのですが」

「くそ、口で勝てる気がしない！」

「ふふ、私はいつでも主に負けてますよ」

「え、うそうそ、いつ？」

「惚れたほうの負けというじゃないですか」

王都の闇に紛れて影が蠢く一方で、顔を真っ赤にして口を開閉する魔法使いに、精霊が優しく妖艶に微笑むのだった。

第十四話「魔法使いとそれぞれの想い」

王都から騎士団が出発していく。

これから約一週間、彼らは大規模な演習を王都より離れた場所で行う。

以前の騎士団と比べるべくもなくなったその集団を、王都の民も盛大に見送ることはない。

「行ったか」

騎士団に訓示を述べ、執務室に戻ったステインが窓から門から王都の外へと伸びる列を見送る。

「王子、衛兵隊も自警団も問題なしです」

「そうか、分った。戻っていいが、少し休むのだぞ」

ステインは疲れた様子のタールの報告を受けると、窓から離れ椅子に腰掛ける。

王都自警団と衛兵隊は平民が主体なのであまり心配していなかったステインだが、万が一買収などされたら厄介なので、タールに命じぎりぎりまで見張っていたのだ。

「さて、これが終われば後は父上か」

ステインは独り言を呟いた後、ため息を吐く。

「もはや父上には王の座を譲ってもらうしかないが。さて抵抗があるかどうか」

最近では顔を合わせるのも珍しい父親がどのような行動にでるか、ステインには検討がつかない。

「とりあえず、まずは目の前のでかい問題を片付けるか」

ステインは机に向かうと、ローアが集めた膨大な不正の証拠を一つ一つチェックする作業に戻る。

「しかし、量が多かったな。まったく」

日が沈み暗くなったころに、ようやく書類から開放された王子は伸びをする。

そうして窓の外の妹が囚われている塔を見やる。

「後少しだ。私は行けないが、ちゃんと白馬の王子を用意したからな。だから少しだけ待っててくれ。もう父上にも文句は言わせないさ」

王子を決意を固め、後宮の方を睨むのだった。

ジョンは騎士団出発の日、ステインに命じられて家で待機し、早朝に屋敷を出て行くマッシュを見送った。本当は町の門まで見送るつもりだったのだが、そんな時間があるなら素振りでもしておけ、とマッシュに言われ屋敷の門までの見送りとなったのだ。

騎士団出発前夜に、最近よく自分の師匠と剣を交えている父親に呼び出され、今日こそは文句を言ってやろうと息巻いて部屋に行ったジョンだが、そこで真剣な表情の父親に最近王子が企んでいることの全容を聞かされ、しばし放心状態になっていた。

「何か質問はあるか？」

立ち直ったジョンにマッシュが声を掛ける。

「それはすでに王子の他の近衛は知ってるのですか？」

「いや、本当なら計画直前に王子から話があるはずだったんだがな。頼んでお前には私から伝えることになった」

マッシュは準備していた酒とグラスを取り出し、テーブルに並べる。

「何があるかわからんだろう、お前も私も」

そういって、マッシュはグラスに酒を注ぎ、ジョンに手渡す。

ジョンはマッシュの言いたいことを察し、黙ってグラスを受け取る。

「まぁ死ぬつもりなんて毛頭ないがな」

そう笑うマッシュがグラスを掲げる。

「僕もですね。では、オーカス王国の未来に乾杯しますか」

合わせてジョンもグラスを掲げ言う。

そうして、二人の前でグラスが触れ合う音がする。

親子の夜は更けていった。

グゥエン・アスクルクは騎士団が出発した夜、娘の部屋にいた。

最近は王子に頼まれた魔法院での仕事が忙しく、あまり屋敷に戻っていなかったグゥエンだが、その仕事に区切りがつき、久々の我が家に戻り感慨にふけっていた。

グゥエンの娘の部屋には貴族っぽさも、女っぽさもなく、本やらよく分からない図面やら魔法道具が散乱している。

もういい年をした娘なのだが、グゥエンはついつい甘やかしてしまっている。

本当なら宮廷魔法院に入れて、適齢期には結婚をさせようと思っていたのだが、学院の教師になって遺跡に入り浸り、未だに結婚もしていない、少し甘やかしすぎたかとグゥエンは思う。

「お前が初めて取った弟子にも、苦労させられたしなぁ」

そう独り言ちり、娘の使っている机をなでる。

グゥエンは、王子の計画に娘の弟子が参加すると聞いて、娘が弟子関係で持ってきた無理難題を思いだしたのだ。

「しかし、王子にとっていい友であってくれるのだから、私の苦労も報われるか。あとはお前が結婚してくれれば言うことはないのだがな」

計画が近くなりグゥエンは自分の権限を使って、わざわざ遠くの遺跡の調査に娘を向かわせたのだ。

グゥエンがわざわざ根回ししなくとも、娘は遺跡に関して優秀すぎるので遅かれ早かれ調査に向かうことにはなっていただろう。

しかし、なんだかんだと親馬鹿なグゥエンは、確実に計画が終わるまで王都から娘を遠ざけたかったのだ。

「落ち着いたら、また見合い相手を探すか」

グゥエンは机に手を置き、窓のから見える星空を眺める。

「しかし、結婚するところを思い浮かべると、どうにも落ち着かなくなるな」

娘の未来の幸せを願う父の背中が、部屋に浮かぶのだった。

タール・エンダールは城に用意された自分の執務室で、部下からの報告書類を処理していた。

タールは、マッシュから信頼できる人間を紹介してもらい、部下にしているのだ。

タールの部下は王子の計画の当初から参加し、軍内部の情報収集や要注意人物の監視をしていた。

宮廷内の軍関係者は少ないが、万が一衛兵隊や自警団が宰相についたら大変なので、気の休まる暇がなかったのだ。

しかし、計画が差し迫っても動きがないので、タールは問題なしと判断し、部下を下げて王子に報告に行き、帰ってきたところだ。

「ふう。王子に心配させてしまうとは。少し休むか」

そう言ってタールは執務室のソファに倒れ込む。

そのまま、タールは寝てしまう。

「う・・・ん」

数時間後、タールは目を擦りながらソファから起き上がる。

すると毛布が床に落ちる。

タールは、覚えのない毛布に首を傾げつつ拾い上げる。

窓の外が暗いことから、大分寝てしまったことを悟ったタールは、部屋に明かりをつける。

そこで、テーブルの上に、食事が乗っていることに気づく。

その横には、妙に丸っこい字で、『しっかり寝ていたので起しませんでした。追加の書類と食事を置いておきます。体調には気をつけてくださいね』と書いてあった。

タールは字を見て、いつもは愛想の悪い部下の女性を思い浮かべる。

平民の彼女に、家柄で軍の上層部にいる自分は嫌われてるかと思っていたタールは、そのまるっこい字を見て嬉しそうな笑みを浮かべ、食事を口にする。

そうして、嬉しそうに食事を食べ終わった軍人は一度自分の頬を両手で叩くと、真剣な表情で仕事を再開する、自分の信じる国と貴族の姿、そして少しだけ部下のことを思い浮かべて。

ローア・コンクルールは、王子に頼まれた不正の証拠集めがやっと終わり、自分の仕事部屋で一息ついていた。

「まったく。王子は人使いが荒いな」

椅子に腰掛けながらローアが愚痴る。

「まぁ、しかし、国の風通しがよくなるのなら、それにこしたことはないな。後は計画が終わった後か」

そこまで考え、また一段と忙しくなることが容易に想像できたローアは、げんなりとする。

「息子の教育で手一杯なのだがなぁ」

ローアの息子は、いわゆる天才と呼ばれる部類の人間だ。

小さいころからその片鱗を見せていた息子が、魔法学院に入りその才能を開花させた。

それがいい事だったのか、未だにローアには判断できない。

昔からいろいろな物に興味を持ち、欲しがる子供だったが、開花した後のそれは常軌を逸していた。

実験に使う物なら、それこそ親を使ってでも手に入れようとするようになった。

「おかげでいろいろ苦労させられてたな」

ポツリとこぼすローア。

そんな息子が魔法学院を出た後は一般常識を教えているローアだが、

果たしてそれが実を結んでいるのかまったく分からずにいた。

「いっそのこと、王子の元に送り込むか。そのくらいはお願いしてもいいだろう」

思いつきだが、名案に思えてきたローアは、脳内でどうやって息子を城仕えにするか考える。

「どうせ人手不足になるだろうしな。あの息子なら能力的にはどこでもやっていけるか」

性格的に今の宮廷では確実に問題を起してしまうが、計画後ならば大丈夫だろうと結論付けるローア。

そうしてローアの頭の中は、計画後の宮廷内の人事のことで一杯になっていく。

親は子供の未来のために、何を残していくのか悩むのだった。

「ほら、あれがマッシュさんのところの騎士団だ」

クリスはフィリスを肩車しながら、騎士団を指さす。

「ほんとだ、おじいちゃんいた」

「あまり動くと危ないですよ」

クリスの上で嬉しそうにはしゃぐフィリスを、やさしく見守るフウリ。

そうして、見えなくなるまで騎士団を見送ったクリスたちは屋敷への帰路につく。

「フィリスは肩車が気にいったようですね」

「うん、たかくてたのしい」

フィリスはクリスの上できょろきょろと首を動かしている。

「今度、空の旅をするのもいいですね」

「おお、それはいいな」

「おそら、とぶの？」

「ええ、とっても綺麗ですよ」

フウリの言葉にフィリスは嬉しそうに目を輝かせる。

クリスは、「空の旅」を「空を飛ぶこと」と理解したフィリスに目頭を熱くする。

「そのためにも、早く王子の頼み事を終えないといけませんね」

「そうだな、しっかり妹を助けてやらんとな」

珍しくやる気なクリス。

「さすが主、姫と名がつく人が好きなのですね」

フウリが無表情に言う。

「おい聖王国での元凶はフウリだったじゃないか！あれで俺の心がどんだけダメージ負ったと思ってるんだ！」

「そのあとちゃんとアフターケアをしたはずですが」

「え、あ、うん」

その後の空の旅を思いだし、クリスは恥ずかしさに顔を赤くする。

「顔が真っ赤ですね、主」

「最近、こんな弄られ方ばっかだ！」

「それは仕方ないのです」

フウリが胸を張り断言する。

「赤くなった主は可愛いですからね」

「おとうさん、かわいい」

フィリスにまで可愛いと言われて、クリスは恥ずかしさのあまり顔を俯かせる。

「さて、主弄りはこのくらいにしましょう。あまり弄ると拗ねてしまいますからね」

「わかった」

フウリがクリスの弄り方をフィリスに伝授していく。

「もう、好きにしてくれ・・・」

燃え尽きた感のあるクリスがぽつりと呟く。

「そんなこと言うと本当に好きにしてしまいますよ？」

クリスの発言を聞いてフウリは怪しく微笑む。

「か、堪忍して！」

「ふふ、仕方ない主ですね」

フィリスを肩車したまま、器用に両腕で自身を抱くクリスに、フウリは面白そうに微笑む。

そんなクリスたちの横を、騎士団を見送りにきていたのであろう子供たちが木の棒を振り回し、走り去っていく。

「少年たちの夢を守らないといけないな」

子供たちの後姿をクリスはまぶしそうに見送り、ぽつりと呟く。

「そうですね。しかし主、それはちょっとどころではなく、くさい台詞ですね」

「おとうさん、くさい？」

クリスの呟きに横と上から合いの手が入る。

「くさくないよ！くさくないよね！？」

フィリスの言葉に反応して、自分の匂いを嗅ごうとするクリス。

「ふふ、けど本当に守りたいですね」

クリスの様子を見て、小さくフウリが呟く。

「そう、だな。主に頑張るのはステインだけど、あいつのためにもできることをやろう」

フウリの呟きを聞いたクリスが真剣に言う。

子供たちの遊ぶ声が響く中、魔法使いと精霊は決意を新たにするのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5884z/

魔法使いと風精霊

2012年1月15日03時49分発行